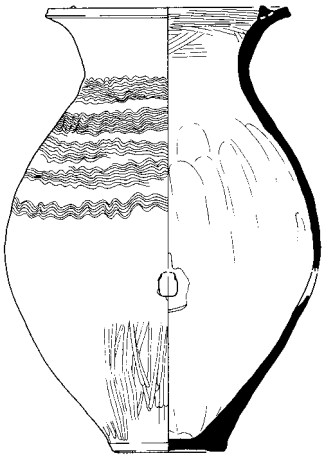
長岡京市埋蔵文化財調査報告書

第４４集



２００５

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市埋蔵文化財調査報告書

第４４集

２００５

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序　　文

平成10年度から開始された長岡京駅西口地区第一種市街地再開発事業も最終年度となりました。当地域においては、事業に関連してこれまでに数多くの調査が行われてきました。

ここに報告する調査は、再開発事業に伴う長岡京駅前線整備事業に関する埋蔵文化財発掘調査です。この道路はＪＲ長岡京駅から長岡天満宮に向かう東西方向の道路で、当市の幹線道路の一つとなっています。

市街地のため、複数次に分割した調査がこれまで継続的に実施され、すでに長岡京市埋蔵文化財調査報告書第16・24・28・30・34・36・39集として報告されております。調査地を含む一帯は、長岡京跡を始め、神足遺跡、近世勝龍寺城跡などにも含まれています。今回報告する調査でも、弥生時代から近世に至る多くの遺構・遺物が検出されています。

今後は個々の調査単位に留まることなく、広く周辺の調査を総合することによって、各時代の様相をより具体的に解明する作業が必要となってきます。この作業によって、地域の歴史が鮮明に浮かび上がってくることでしょう。これが市民の知的財産として親しまれ、広く活用されることを望んでやみません。

最後になりましたが、調査の実施・整理にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後もなお一層のご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成１７年３月

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　　芦　田　富　男

凡　　例

１．本書は、平成16年度に実施した長岡京駅西口地区第一種市街地再開発事業長岡京駅前線整備事業のうち、Ｂ－１地区（長岡京跡右京第820次調査）、Ａ－９・12・14地区（長岡京跡右京第826次調査）、Ｂ－７地区（長岡京跡右京第834次調査）、Ｂ－２・３地区（長岡京跡右京第835次調査）、Ａ－７・８地区（長岡京跡右京第836次調査）の調査報告書である。

２．発掘調査は、長岡京駅西口地区市街地再開発組合から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、調査期間と調査面積、調査担当者は付表－１に示した次のとおりである。

３．調査の対象になった遺跡は、長岡京跡右京六条一坊十一・十四町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡の３遺跡である。

４．長岡京跡の調査次数は、宮域、右京域、左京域にそれぞれ分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半が奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。

５．長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号の復原に従った。

６．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

７．長岡京跡に関する調査の場合、正式な遺構番号は調査次数＋番号であるが、本書では煩雑を避けるため調査次数を省略している。

８．本書で用いた方位と国土座標値は、旧座標の第VI系にもとずいたものである。

９．本書挿図の土層名で〈　〉を付して示した記号は、『新版標準土色帖』（1997年版）のJIS表記法による土色である。

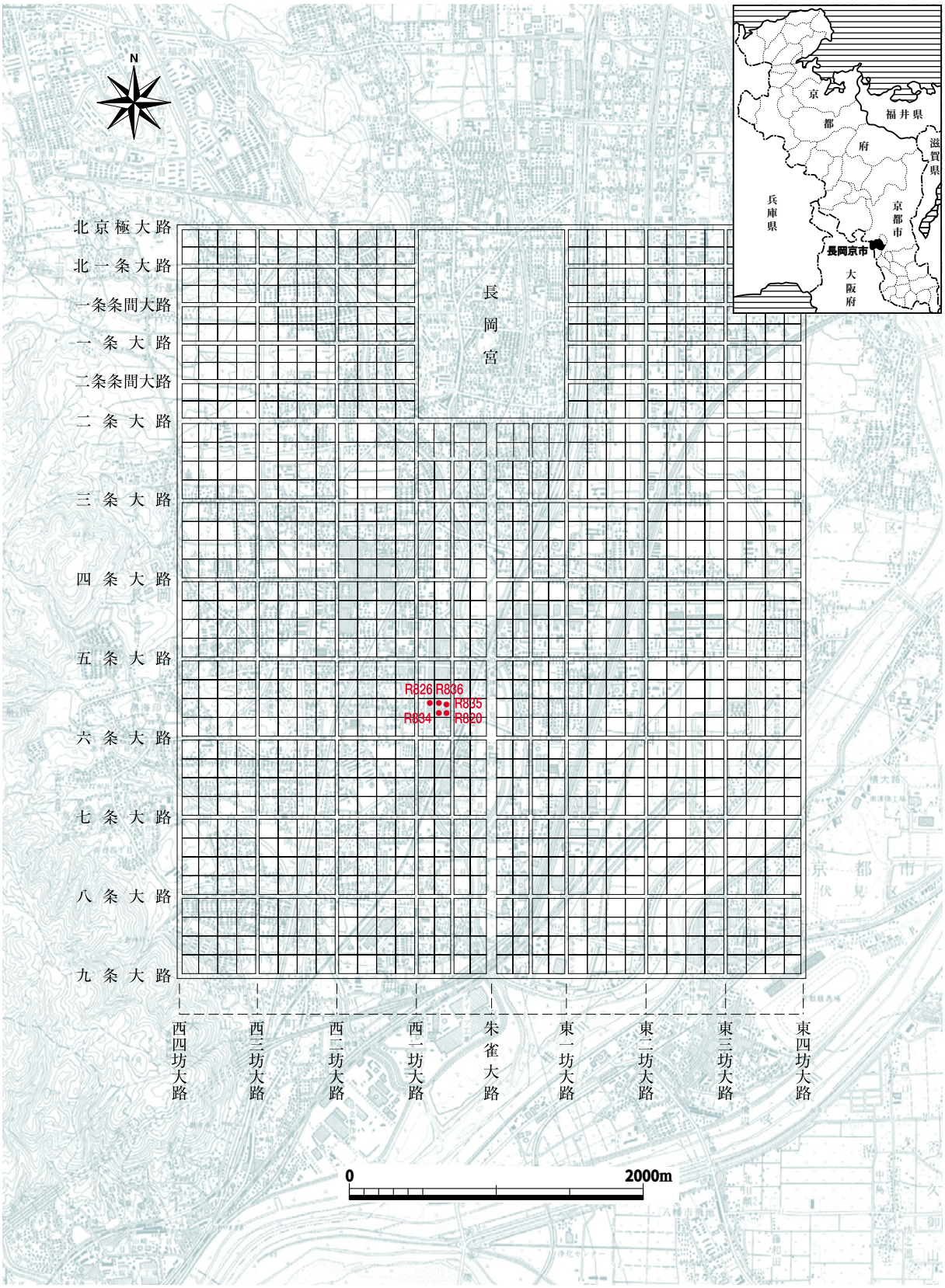
10．遺物写真は、（財）京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。

11．本書の執筆は、各調査担当者がそれぞれ行い、執筆者の協力のもとに山本輝雄が編集を担当した。

＊表紙カット　右京第820次調査出土の弥生土器壺

付表－１　本書掲載調査地一覧表

調査次数	調　査　期　間	調査面積	調査担当
右京第820次調査	2004年６月10日～2004年６月30日	64㎡	原　秀樹
右京第826次調査	2004年７月12日～2004年７月30日	167㎡	山本輝雄
右京第834次調査	2004年９月16日～2004年11月２日	43㎡	中島皆夫
右京第835次調査	2004年９月16日～2004年11月２日	73㎡	中島皆夫
右京第836次調査	2004年９月21日～2004年11月５日	174㎡	山本輝雄



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本　文　目　次

序　　文 …… i
凡　　例 …… ii
はじめに …… 1
第１章　長岡京跡右京第820次（７ANMDB－17地区）調査概要
　１　調査経過 …… 3
　２　検出遺構 …… 3
　３　出土遺物 …… 6
　４　ま と め …… 8
第２章　長岡京跡右京第826次（７ANMSM－８、７ANKSM－13地区）調査概要
　１　調査経過 …… 9
　２　検出遺構 …… 10
　３　出土遺物 …… 14
　４　ま と め …… 16
第３章　長岡京跡右京第834次（７ANMDB－18地区）調査概要
　１　調査経過 …… 17
　２　検出遺構 …… 17
　３　出土遺物 …… 20
　４　ま と め …… 21
第４章　長岡京跡右京第835次（７ANMDB－19地区）調査概要
　１　調査経過 …… 23
　２　検出遺構 …… 24
　３　出土遺物 …… 30
　４　ま と め …… 35
第５章　長岡京跡右京第836次（７ANMSM－９地区）調査概要
　１　調査経過 …… 37
　２　検出遺構 …… 38
　３　出土遺物 …… 44
　４　ま と め …… 50

図　版　目　次

長岡京跡右京第820次調査

図版１　（１）上層遺構全景（南から）
　　（２）下層遺構全景（南から）
図版２　出土遺物

長岡京跡右京第826次調査

図版３　（１）１トレンチ北半部全景（東から）
　　（２）１トレンチ南半部全景（北東から）
　　（３）１トレンチ井戸ＳＥ07全景（南東から）
　　（４）１トレンチ井戸ＳＥ02全景（東から）
図版４　（１）２トレンチ北半部全景（東から）
　　（２）２トレンチ南半部全景（北東から）
　　（３）２トレンチ井戸ＳＥ04全景（北東から）
図版５　（１）３トレンチ全景（南西から）
　　（２）３トレンチ掘立柱建物ＳＢ10（西から）
　　（３）３トレンチ柱穴Ｐ７（南から）
図版６　出土遺物

長岡京跡右京第834次調査

図版７　（１）中近世以降全景（西から）
　　（２）完掘状況全景（西から）
図版８　（１）完掘状況全景（北から）
　　（２）溝ＳＤ03（南西から）
　　（３）出土遺物

長岡京跡右京第835次調査

図版９　（１）西調査区長岡京期以降全景（北から）
　　（２）西調査区完掘状況全景（北から）
図版10　（１）東調査区古墳時代～長岡京期全景（北から）
　　（２）東調査区完掘状況全景（北から）
図版11　（１）西調査区弥生時代全景（南西から）

（２）土壙墓ＳＸ07埋土の状況（南西から）
（３）土壙墓ＳＸ07完掘状況（南西から）
図版12　（１）東調査区弥生時代全景（南から）
（２）土器棺墓ＳＸ15出土状況（南西から）
（３）土器棺墓ＳＸ15出土状況（上から）
図版13　（１）溝ＳＤ06・08土層堆積状況（南西から）
（２）溝ＳＤ06土層堆積状況（北西から）
図版14　出土遺物

長岡京跡右京第836次調査

図版15　（１）調査区全景（西から）
（２）調査区南西部全景（北東から）
図版16　（１）土坑ＳＫ08礫出土状況（北から）
（２）土坑ＳＫ08完掘状況（北から）
図版17　（１）土坑ＳＫ11礫出土状況（北から）
（２）土坑ＳＫ11完掘状況（南から）
図版18　（１）土坑ＳＫ13全景（南西から）
（２）土坑ＳＫ09全景（北西から）
（３）土坑ＳＫ10瓦器椀出土状況（西から）
図版19　（１）周溝ＳＤ18全景（北西から）
（２）周溝ＳＤ18土層堆積状況（南西から）
（３）周溝ＳＤ18須恵器出土状況（北西から）
図版20　出土遺物－１
図版21　（１）出土遺物－２
（２）出土遺物－３

挿　図　目　次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）…… iii
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1

長岡京跡右京第820次調査

第３図　調査地土層図（1/80）…… 3
第４図　検出遺構図（1/100）…… 4
第５図　溝ＳＤ07・09土層図（1/50）…… 5
第６図　溝ＳＤ09断面（南東から）…… 5
第７図　溝ＳＤ07断面（南東から）…… 5
第８図　溝ＳＤ07出土遺物実測図（1/4）…… 6
第９図　溝ＳＤ09・その他の出土遺物実測図（1/4）…… 7
第10図　須恵器実測図（1/4）…… 7

長岡京跡右京第826次調査

第11図　調査前風景（西から）…… 9
第12図　調査作業風景（北東から）…… 9
第13図　１トレンチ平・断面図（1/100）…… 10
第14図　井戸ＳＥ03・04・07断面図（1/40）…… 11
第15図　２トレンチ平・断面図（1/100）…… 12
第16図　３トレンチ平・断面図（1/100）…… 13
第17図　掘立柱建物ＳＢ10実測図（1/80）…… 13
第18図　出土遺物実測図－１（1/4）…… 14
第19図　出土遺物実測図－２（1/4）…… 15

長岡京跡右京第834次調査

第20図　調査区土層図（1/100）…… 17
第21図　検出遺構図（1/100）…… 18
第22図　溝ＳＤ03・04断面図（1/50）…… 19
第23図　溝ＳＤ03・04土層堆積状況 …… 19
第24図　出土遺物実測図（1/4）…… 20
第25図　右京第820次調査・本調査検出遺構図（1/200）…… 21

長岡京跡右京第835次調査

第26図　東西調査区の調査状況 …… 23
第27図　調査区土層図（1/100）…… 24
第28図　検出遺構図（1/100）…… 25
第29図　土坑ＳＫ01・02実測図（1/50） …… 26
第30図　溝ＳＤ04・柵ＳＡ05実測図（1/50） …… 27
第31図　溝ＳＤ12実測図（1/50） …… 28
第32図　溝ＳＤ06・08実測図（1/50・1/100）…… 29
第33図　土壙墓ＳＸ07実測図（1/50） …… 29
第34図　土器棺墓ＳＸ15実測図（1/10） …… 29
第35図　出土遺物実測図－１（1/4）…… 30
第36図　出土遺物実測図－２（1/4）…… 32
第37図　出土遺物実測図－３（1/4）…… 34
第38図　出土遺物実測図－４（1/4）…… 34
第39図　右京第766次調査・本調査検出遺構図（1/200） …… 35

長岡京跡右京第836次調査

第40図　発掘調査前風景（北西から） …… 37
第41図　発掘調査作業風景（北西から） …… 37
第42図　調査区土層図（1/80） …… 38
第43図　検出遺構図－１（1/100）…… 40
第44図　柱列ＳＡ19・20実測図（1/40） …… 41
第45図　検出遺構図－２（1/100）…… 42
第46図　周溝ＳＤ18実測図（1/50） …… 43
第47図　土坑ＳＫ08・11・13出土遺物実測図（1/4）…… 45
第48図　土坑ＳＫ09・10・15、柱穴Ｐ８・10出土遺物実測図（1/4）…… 46
第49図　長岡京期、弥生時代の遺物実測図（1/4）…… 47
第50図　周溝ＳＤ18出土遺物実測図（1/4）…… 48
第51図　溝ＳＤ16出土遺物実測図（1/4）…… 49

付　表　目　次

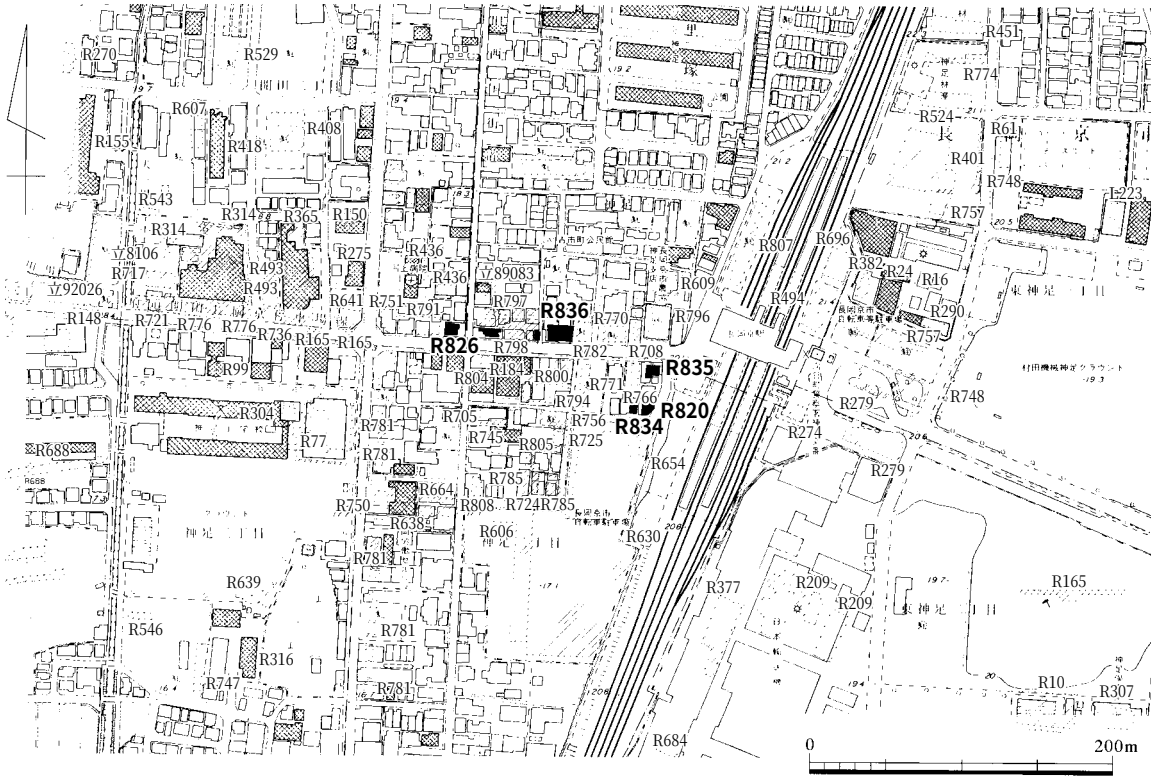
付表－１　本書掲載調査地一覧表 …… ii
付表－２　報告書抄録 …… 51

は　じ　め　に

今回報告する長岡京跡右京第820次・第826次・第834次・第835次・第836次の５調査は、いずれも長岡京駅西口地区の市街地再開発事業にもとずき、長岡京駅前線の道路拡幅工事に伴う事前の発掘調査として平成16年度に実施したものである。

各調査地は、ＪＲ京都線長岡京駅の南西および西側にあたる京都府長岡京市神足一・二丁目地内に所在しており、北側の神足一丁目地内では右京第826次と右京第836次の両調査地が東西に近接して並び、南側の神足二丁目地内では右京第834次調査地とその南側に右京第820次・第835次調査地が近接しながら東西に並んでいる。そのうち、右京第826次調査地については、大きく３ケ所に分かれており、そのうち東と中央の調査区間では平成15年度に右京第798次調査が行われていた。

各調査区を地形的にみてみると、いずれも北西から南東に向かって緩やかに傾斜する低位段丘上に立地していることが知られる。これまでの調査成果によれば、低位段丘を構成する地山面は、おおむね西から東に向かって緩やかに傾斜し、比較的安定した地盤の様相を呈していることが判明している。ただし、地表面の標高をみると、右京第820次調査地が18.7～19.1m、右京第826次調査地が18.2～18.6m、右京第834次調査地が約18.3m、右京第835次調査地が約19.7m、そして右京第836次調査地が18.5～18.7mというように１m以上もの差異がみられるが、これは盛土の厚さの多少によるものと考えることができる。



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

各調査区は、長岡京の条坊復元によると、右京六条一坊十一町から十四町にかけて想定されていることはもとより、縄文時代から中世までの複合遺跡で、特に弥生時代中期の拠点的大集落として著明な神足遺跡、さらに右京第820・834・835次の３調査地点は江戸時代初期に永井直清が造営した居館跡（勝龍寺城跡）の範囲にも含まれる所であるなど、各種遺跡の重複密度が極めて高い地域であるといえよう。

この長岡京駅前線の拡幅工事に伴う発掘調査は、これまでに右京第641次[注1]、同第721次[2]、同第736次[3]、同第751次[4]、同第770次[5]、同第776次[6]、同第791次[7]、同第782次[8]、同第796次[9]、同第798次[10]調査として実施されていた。いずれも小面積の発掘調査ばかりで、しかも後世の撹乱や削平によって遺構、遺物の残存度は必ずしも良好とはいえない状態であったが、それでも近世、中世、平安時代、長岡京期、古墳時代、弥生時代など各時代にわたる遺構、遺物が確認されており、大きな成果が得られている。

注１）小畑佳子『長岡京市センター報告書』第16集　1999年
２）山本輝雄『長岡京市センター報告書』第24集　2002年
３）原　秀樹『長岡京市センター報告書』第28集　2002年
４）中島皆夫『長岡京市センター報告書』第30集　2003年
５）木村泰彦「長岡京跡右京第770次調査概要」『長岡京市センター報告書』第34集　2004年
６）山本輝雄『長岡京市センター報告書』第36集　2003年
７）岩﨑　誠「長岡京跡右京第782次調査概要」『長岡京市センター報告書』第39集　2004年
８）小田桐　淳「長岡京跡右京第791次調査概要」『長岡京市センター報告書』第34集　2004年
９）山本輝雄「長岡京跡右京第796次調査概要」『長岡京市センター報告書』第39集　2004年
10）原　秀樹「長岡京跡右京第798次調査概要」『長岡京市センター報告書』第39集　2004年

第１章　長岡京跡右京第820次（７ＡＮＭＤＢ－17地区）調査概要

－右京六条一坊十一町、神足遺跡、勝龍寺城跡－
長岡京駅前線に伴うＢ－１地区の調査

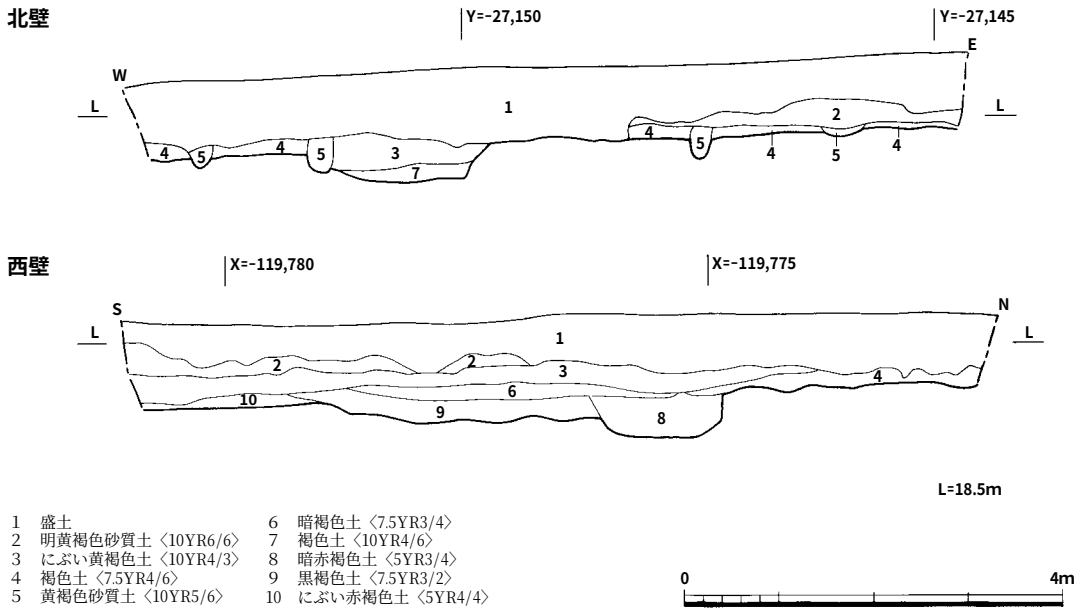
１　調査経過

調査対象地は、ＪＲ長岡京駅西口駅前の住宅跡地に位置する。本地点は、小畑川右岸の低位段丘Ｉに立地しており、付近の標高は18m前後である。現在の地形は、駅前周辺に厚く盛土がされており、西から東に向かって次第に高くなっている。

周辺では、一連の西口駅前再開発事業に伴う発掘調査が実施されている。広範囲にわたる発掘調査の主な成果は、弥生時代では神足遺跡の環濠(注1)の確認と、分銅形土製品(2)、銅鐸形土製品(3)、銅剣(4)の出土。長岡京では、複数町域を利用した大規模建物群(5)の確認。平安時代では、大量の瓦を投棄した井戸跡(6)の確認。中世では、文献史料に記されている神足村の鋳物師(7)を裏付ける鋳造関連遺物(8)の出土。江戸時代では、永井氏の勝龍寺城跡に関わる一括遺物(9)の出土と、茶屋口門跡(10)の確認などが上げられる。調査区の国土座標値は、第VI座標系のＸ＝－119,777、Ｙ＝－27,150である。

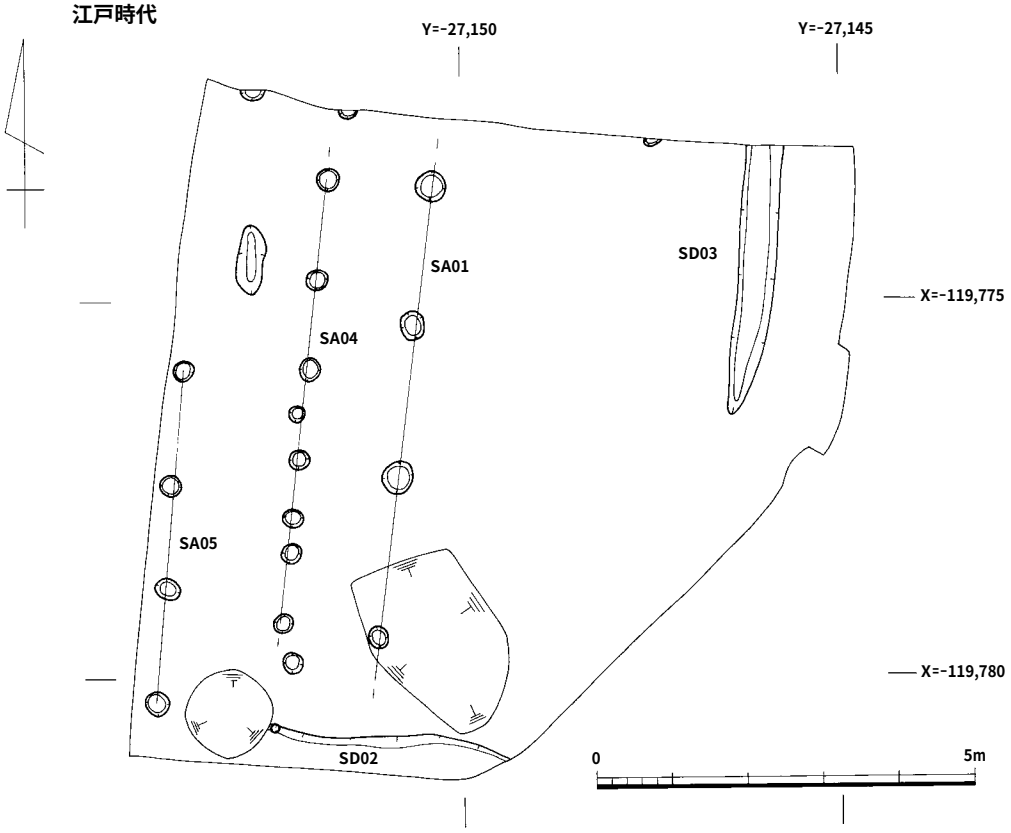
２　検出遺構

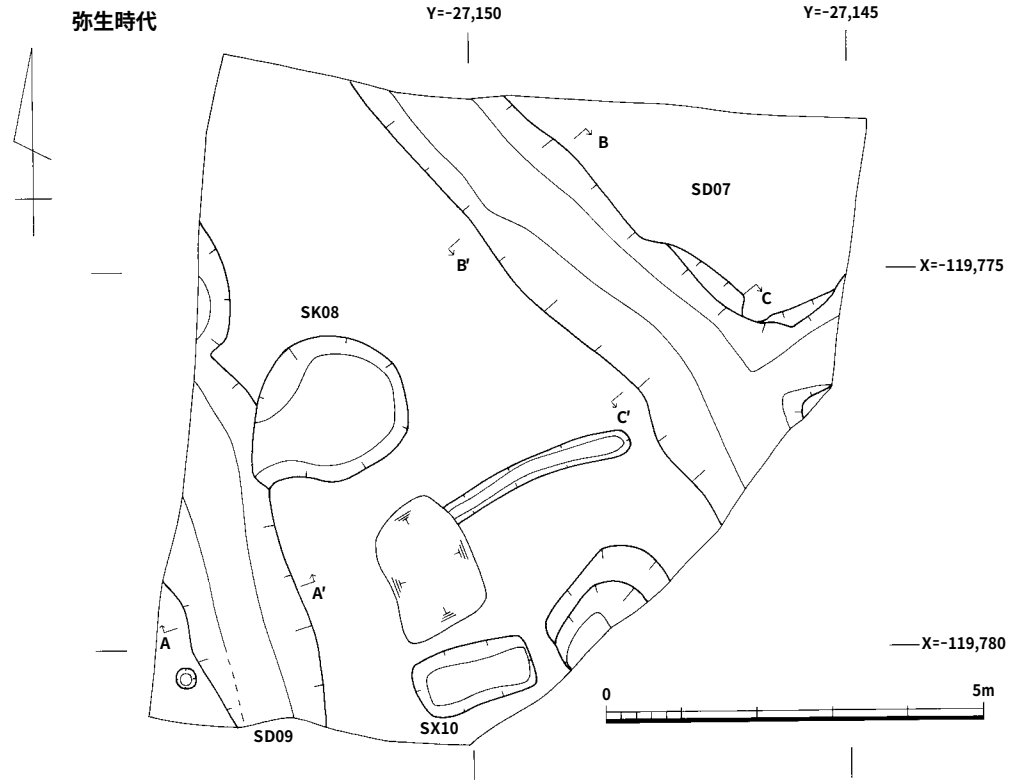
調査地は、緩やかにカーブする道路に面しており一辺９ｍの扇形を呈する。南西隅に現代のコンクリート製井戸と東壁に基礎の一部が残るほかは大きな撹乱はみられない。基本層序は、盛土、明黄褐色砂質土層（薮土）、褐色土層と暗褐色土層、地山となる。盛土の厚いところでは、付近一帯にみられる明黄褐色砂質土は失われており、部分的に残存する程度である。遺構は上下二面



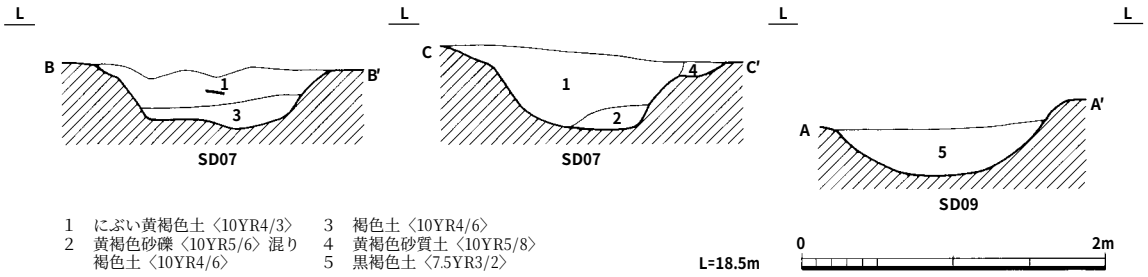
第３図　調査地土層図（1/80）

4　検出遺構





第４図　検出遺構図（1/100）



第５図　溝ＳＤ07・09土層図（1/50）

から検出した。上層遺構は、調査地北側に堆積する褐色土層と南半部の暗褐色土層をベースにしており、埋土の特徴から検出した溝と柵列は江戸時代に想定される。下層遺構は、北東から南西に傾斜する地山面から弥生時代の溝と土壙墓などを検出した。溝は、隣接する調査成果から２基の方形周溝墓に当たる。両地点間の比高は、最大0.6mである。

（１）江戸時代の遺構

柵３列、溝２条などがある。柵は南北方向。溝は南北が１条、東西が１条ある。

柵ＳＡ01　南北方向に直径0.4mの柱穴が４個並ぶ。柱間寸法は１m等間。

柵ＳＡ04　南北方向に直径約0.3mの柱穴が８個並ぶ。柱間寸法は不揃いで、0.5m～1.3m。

柵ＳＡ05　南北方向に直径約0.3mの柱穴が４個並ぶ。柱間寸法は1.5m等間。

これらの柵は1.5m間隔で平行しており、方位は北で東に７°振る。

溝ＳＤ02　溝の北辺を長さ３m分確認する。深さ0.1m。溝はコンクリート製井戸の西側には延びない。

溝ＳＤ03　北壁から南へ長さ3.5m分確認する。幅0.5m。深さ0.1m未満。

これらの遺構は、江戸時代の遺物をほとんど含まないが、埋土が周辺で検出される同時期のものと類似する明黄褐色砂質土であることと、中世を下限とする包含層を切り込む状況から江戸期と判断した。

（２）弥生時代の遺構

方形周溝墓の溝２条と、土壙墓１基などがある。方形周溝墓は、上面が削平されているが溝底は最大0.6mの高低差がある。

溝ＳＤ07　幅1.5m～1.8m。深さ１m。北西から南東方向に直線的に延びる溝は、調査区東壁

第６図　溝ＳＤ09断面（南東から）

第７図　溝ＳＤ07Ｃ断面（南東から）

付近でＴ字形に分かれる。溝内から多数の弥生土器が出土した。

溝ＳＤ09　溝の方位はＳＤ07と類似する。幅1.6m、深さ0.6m。溝内から多数の弥生土器が出土した。

土坑ＳＫ08　長辺2.3m以上、短辺1.9mの不整円形。深さ0.2m。弥生土器が出土した。

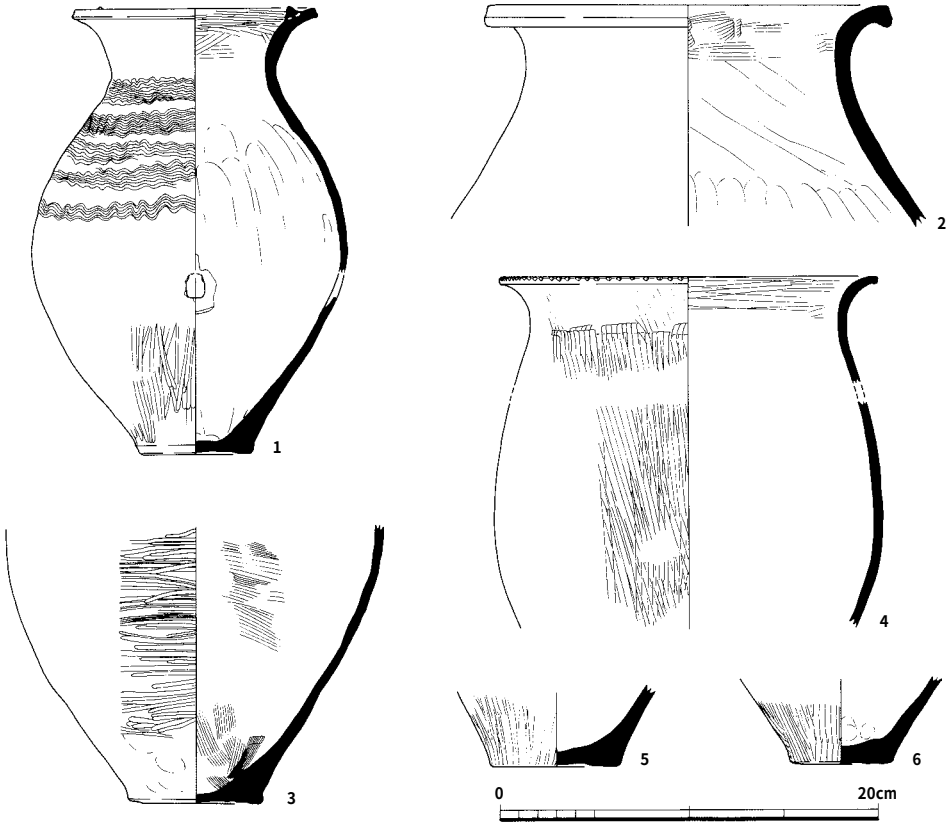
土壙墓ＳＸ10　長辺1.6m、短辺0.8mの長方形。深さ0.1m。削平を受けているが、形態から墓壙と想定した。遺物は出土していない。

この他、時期不明の溝と土坑がある。南東隅の深い土坑は、弥生時代の溝と埋土が類似する。遺物は出土していない。

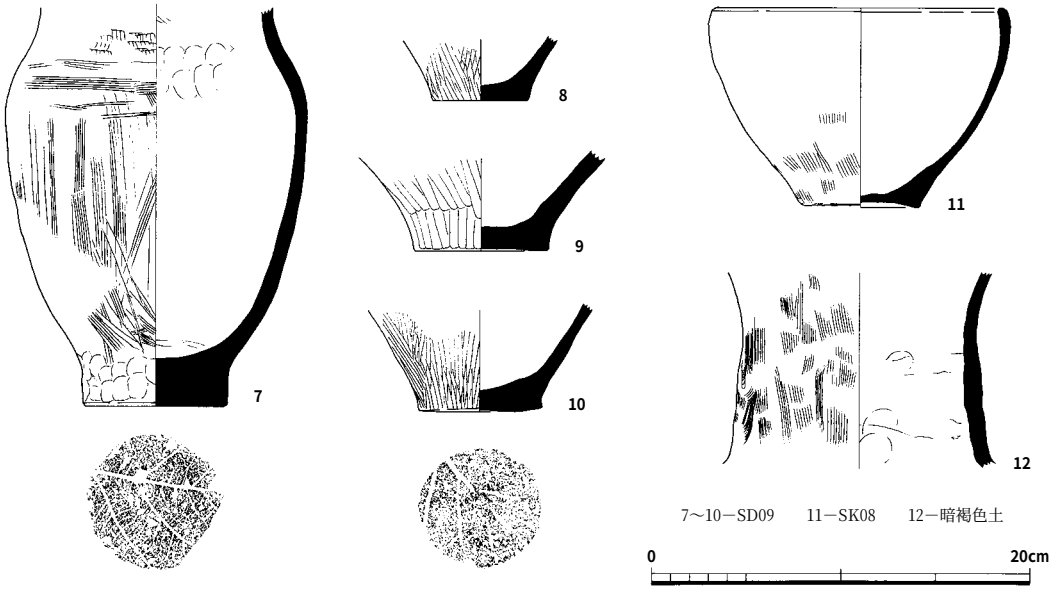
３　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナ２箱分である。遺物の大半は、溝ＳＤ07とＳＤ09から出土した弥生土器である。褐色土層と暗褐色土層には、長岡京期から平安時代中期の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器、瓦と、鎌倉時代から室町時代の土師器、須恵器、瓦器、陶器、白磁、青磁などを包含しているが、小片のため図示できるものはない。各ピットは、埋土と層位から江戸時代に想定したが、遺物は江戸期のものはみられず弥生土器から平安時代、中世の土器小片を含む。包含層の遺物が混入したものと考えている。

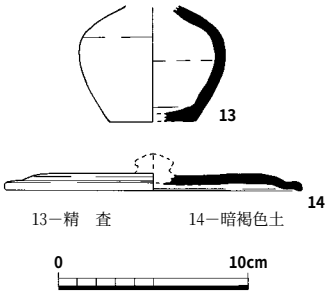
溝ＳＤ07出土遺物（第８図）　広口壺（１・２）、壺体部（３）、甕（４）、底部片（５・６）がある。１は、口径13cm、器高23.6cm。上半部に５条の櫛描波状文を施し、下半部はヘラミガ



第８図　溝ＳＤ07出土遺物実測図（1/4）



第９図　溝ＳＤ09・その他の出土遺物実測図（1/4）



第10図　須恵器実測図（1/4）

キを行なう。口縁部の突起は１個残存するだけで対の有無や配置は不明である。体部中程に意図的に打ち欠いた孔を開ける。底部中央が上げ底気味となる。２は、口径21.2cm。外面は摩滅しており、調整不明。３は、下半部にヘラミガキを施す。４は、口径20cm。口縁部に刻み目を施す。外面はタテハケ調整。５は、底部中央が上げ底気味となる。６は、平底。外面はタテハケ調整。弥生時代中期前半に比定される。

溝ＳＤ09・その他の出土遺物（第９図）　長胴の小型壺（７）、底部片（８～10）、鉢（11）、広口長頸壺（12）がある。７は、体部最大径16cm。口縁部を欠損するが、器高は21cm。外面はハケメ調整。底部に木の葉圧痕が残る。８・10はハケメ調整。９は、ヘラミガキを施す。10は、木の葉圧痕が残る。11は、口径15.6cm、器高10.6cm。外面はタテハケとナデ調整。12は、頸部が大きく立ち上がる。外面はタテハケとナデ調整。弥生時代中期前半に比定される。

須恵器（第10図）　壺Ｍ（13）と、杯Ｂ蓋（14）がある。13は、底部をヘラ切り調整する。底径4.6cm。色調は、暗緑灰色。降灰によるものか。硬質。14は、口径17.7cm。色調は灰白色で、軟質に焼成されている。

４　まとめ

今回の調査では、主に江戸時代に想定される柵と、弥生時代の方形周溝墓の一部を確認した。前者については遺物が無いことから具体的な時期は明確にできなかったが、付近一帯は寛永10（1633）年から慶安２（1649）年の間、永井直清が新しい勝龍寺城である神足館を構えたところであり、「永井直清公御在所城州神足之図[11]」によると武家屋敷の一画にあたる。検出した遺構は

生活痕跡に乏しい内容であるが、西国街道の町場から東に100m余り離れたところで柱筋が揃う柵は計画的な配置を窺わせる。その当否については、今後の調査に負うところである。

弥生時代は、方形周溝墓が連なる墓域にあたる。墓壙については、隣接地の調査成果から方位を異にする２基の方形周溝墓の間に位置している。墓壙の主軸は、概ね溝ＳＤ09と直交する。各時代の遺跡が重複する神足遺跡は市内屈指の複合遺跡であり、その全容は次第に明らかになりつつある。

注１）原　秀樹「右京第757次調査概要」『長岡京市センター年報』平成14年度　2004年
２）注１と同じ
３）原　秀樹「右京第805次調査概要」『長岡京市センター報告書』第40集　2004年
４）岩﨑　誠「右京第807次調査概要」『長岡京市センター報告書』第43集　2005年
５）岩﨑　誠・木村泰彦他『長岡京市センター報告書』第26集　2002年
６）岩﨑　誠「右京第756次調査概要」『長岡京市センター報告書』第29集　2003年
７）仁木　宏「戦国時代、村と町のかたち」『日本史リブレット』26　山川出版社　2004年
８）藤井　整「右京第750次・神足遺跡」『京都府センター概報』第107冊　2003年
９）岩﨑　誠「右京第782次調査概要」『長岡京市センター報告書』第39集　2004年
10）注５と同じ
11）井ケ田良治「２ 永井直清の勝竜寺領知」『長岡京市史』本文編２　第１章第１節　1997年

第２章　長岡京跡右京第826次（７ＡＮＭＳＭ－８地区）（７ＡＮＫＳＭ－13地区）調査概要

―右京六条一坊十一・十四町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡―
長岡京駅前線に伴うＡ－９・12・14地区の調査

１　調査経過

今回の調査地は３ケ所に分断されており、西から順に１～３トレンチと命名した。そのうち、１・２トレンチは鉄骨の建物、３トレンチは木造の倉庫が建っていた所で、１・２トレンチは既存建物の基礎やその解体作業などによって大きく削平や撹乱を受けていた。

調査にあたっては、土置き場を確保する必要から、３トレンチ以外は反転掘削して調査することにした。調査は、2004（平成16）年７月12日より１トレンチ北半部の重機による掘削を開始し、13日に２トレンチ北半部の重機掘削を行うとともに、作業員を動員して両トレンチの遺構の検出を進めた。その結果、１トレンチでは井戸、土坑、柱穴などを、２トレンチでは井戸をそれぞれ確認した。20日からは、重機で１・２トレンチの反転掘削を行い、南半部の調査をさらに進めたところ、１トレンチの南半部で井戸と土坑、柱穴を新たに確認した。そして、23日に調査が終了した１・２トレンチの埋め戻しを行うとともに、３トレンチの重機掘削を行った。３トレンチでは、１・２トレンチに比べて遺構の遺存状態は比較的良好で、土坑と数多くの柱穴などを確認できた。28日に全景の写真撮影を行った後、実測図の作成と埋め戻しなどを行い、現地での調査がすべて終了したのは７月30日であった。

第11図　発掘調査前風景（西から）

第12図　発掘調査作業風景（北東から）

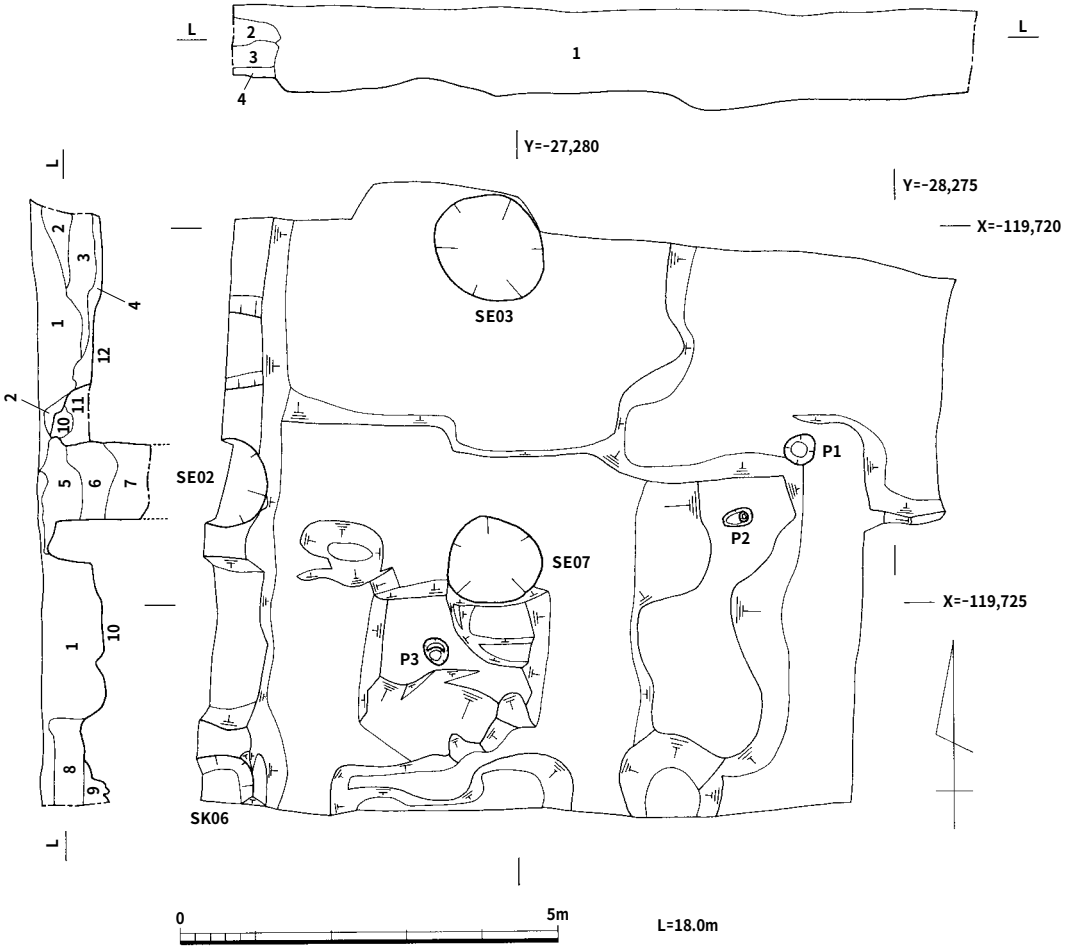
2　検出遺構

（1）１トレンチの所見

西国街道の西側に設定した東西9.5m、南北８mの調査区（７ＡＮＫＳＭ－13地区）で、すぐ西側には右京第791次調査地[(1)]が、北側には右京第436次調査地が位置している。調査面積は70㎡、調査区心の国土座標値はＸ＝－119,724、Ｙ＝－27,279である。

調査区内は、後世の撹乱と削平が顕著であって、地山深くまで掘り込まれている所が多くを占めていた。このため、撹乱土と盛土のすぐ下が橙褐色系の砂礫ないしは粘質土の地山になっていたが、撹乱を受けていない地山面の標高は約18m前後である。また、大きく撹乱と削平を受けた部分であっても、井戸のような深い遺構は上部を破壊されつつも残っていた。以下、主な遺構の内容を説明する。

土坑ＳＫ01　調査区の北西隅で検出した土坑であるが、後世に大きく撹乱を受けているため、形態の詳細はよく分らない。東西0.5m以上、南北2.4m以上の規模があり、埋土は上から褐色砂



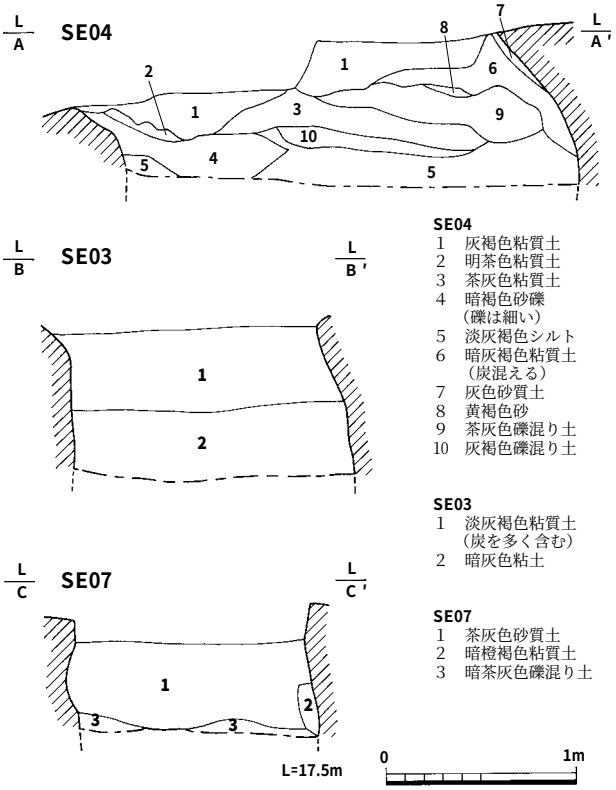
1　撹乱土（解体後の造成土）
2　褐色砂質土
3　灰褐色粘質土　}SK01埋土
4　暗灰褐色粘質土
5　茶灰色粘質土
6　暗茶褐色砂質土　}SK02埋土
7　灰茶色礫混り土
8　盛土
9　茶灰色砂質土（SK06埋土）
10　橙褐色粘質土
11　橙褐色砂礫　}（地山）
12　灰褐色砂礫

第13図　１トレンチ平・断面図（1/100）

質土、灰褐色砂質土、暗灰褐色粘質土の３層に分けることができた。埋土からは、土師器の小皿や染め付け茶碗の破片などが少量出土している。

土坑ＳＫ06　調査区の南西隅で検出した不整形な土坑である。東西0.7m以上、南北0.6m以上、深さ0.2m前後の規模がある。埋土は茶灰色砂質土１層のみであるが、遺物は何も出土しなかった。

井戸ＳＥ02　調査区の西辺中央部で検出した円形の掘形をもつ井戸である。西半部が調査区外にあり、完掘していないために全容は不明であるが、径約1.1m、深さは1.2m以上の規模がある。井戸は、壁面がほぼ垂直になるように掘り窪められており、埋土は上から茶灰色粘質土、暗茶褐色砂質土、灰茶色礫混り土などに分けられた。それらの埋土中からは、土師器、瓦器、染付け磁器、陶器、丸瓦、平瓦など近世を主体とする遺物がまとまって出土している。



第14図　井戸ＳＥ03・04・07断面図（1/40）

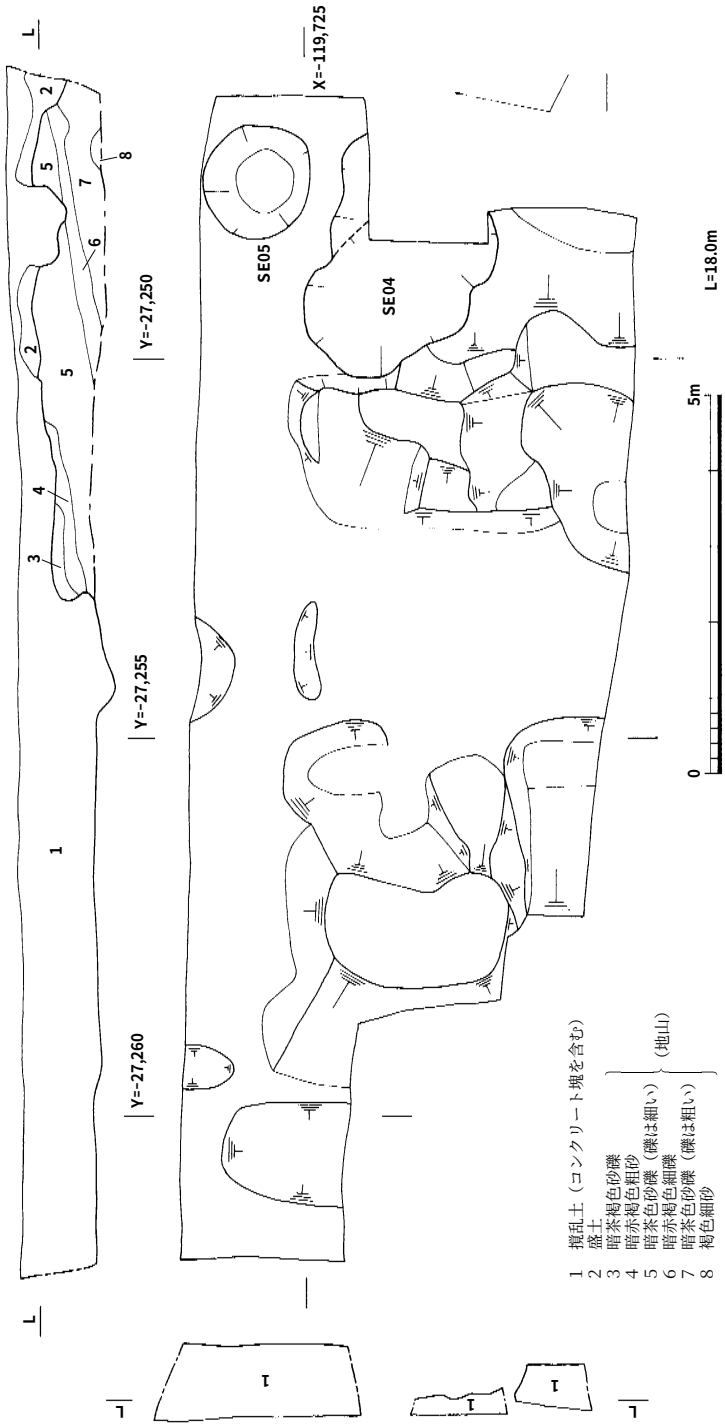
井戸ＳＥ03（第13・14図）　調査区北辺の中央部付近で検出した楕円形の掘形をもつ井戸であるが、上部は大きく削平を受けていた。径1.4～1.5m、深さは0.9mまでを確認したが、完掘していない。井戸の壁面は、崩落によってが抉れた状況で、徐々にではあるが湧水が認められた。埋土は、淡灰褐色粘質土、暗灰色粘土に分けられ、土師器、陶器、染付け、土人形、丸瓦、平瓦、桟瓦など近世の遺物が出土している。

井戸ＳＥ07（第13・14図）　調査区のほぼ中央部で検出した楕円形の掘形をもつ井戸で、上部は大きく削平を受けていた。径1.1～1.2m、深さ0.7m以上の規模があり、この井戸も壁面が崩落により抉れた状態になっていた。埋土は土が主体で、土師器、瓦器、陶器、染付けなど近世の遺物がまとまって出土している。

柱穴　調査区の南部の撹乱を受けていない所で検出したもので、Ｐ１～３がある。いずれも、径0.3～0.45mほどの楕円形であるが、浅いものばかりであることから、遺存状態は不良であるものと考えられる。埋土は茶褐色系の砂質土で、土師器や瓦器の細片が少量出土している。

（２）２トレンチの所見

１トレンチの東13mの地点に設定した調査区（７ＡＮＭＳＭ－８地区）で、すぐ北側には右京第797次調査地[(2)]が、東側には右京第798次調査[(3)]が所在している。当初、東西15.5m、南北６ｍの規模で調査区を設定したが、撹乱を受けている個所が多く、土置き場を確保する必要から、調査の範囲を大幅に縮小することになった。調査面積は67㎡、調査区中心の国土座標値はＸ＝－



第15図　２トレンチ平・断面図（1/100）

119,726、Ｙ＝－27,254である。

このトレンチでも、１トレンチの場合と同様に、既存建物の基礎やその解体時に大きく撹乱を受けていたが、浅い所では地表下約0.1m、標高でいえば約18m前後で地山面に至っていた。ここでの地山は、暗茶褐色系の砂礫が主体で、粘質土はほとんどみられなかった。

井戸ＳＥ04（第14・15図）調査区の東部で検出した長楕円形を呈する井戸で、上部が削平を受けていた。壁面が大きく抉れて袋状になっており、その影響もあって平面の形態も大きく変形しているものと考えられる。長辺約2.8m、短辺約1.8m、深さは0.8m以上の規模があった。埋土は、灰褐色系、茶灰色系、暗褐色系を呈する砂質土や礫混り土などが細かい単位で堆積しており、土師器、須恵器、青磁、染付け磁器、陶器、土人形、丸瓦、平瓦、輪違い瓦など近世を主体とする遺物がまとまって出土している。

土坑ＳＫ05　土坑ＳＫ05のすぐ北東で検出した楕円形を呈した土坑であるが、井戸になる可能性も考えられる。径約0.75m、深さ約0.3mほどの規模があるが、出土した遺物は皆無で、明確な時期は不明であった。

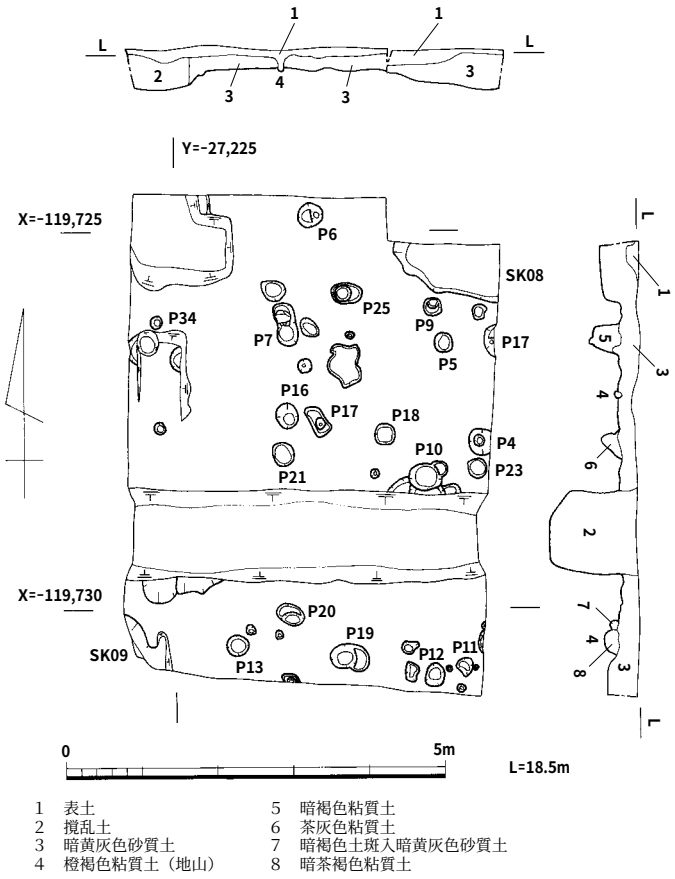
（３）３トレンチの所見

２トレンチの東方約21mの地点に設定した東西５m、南北6.5mの調査区（7ＡＮＭＳＭ－８地区）で、西側は右京第798次調査地に隣接していた。調査面積は30㎡であり、調査区心の国土座

標値はＸ＝－119,728、Ｙ＝－27,223であった。

調査区内は、南部に東西方向の大きな撹乱坑が深く掘り込まれていたが、１・２トレンチに比べて遺構面の遺存度は良好で、柱穴を中心とする多くの遺構を確認することができた。地表下約0.2mほどで橙褐色粘質土の地山面に至っており、上面での標高は18.3m前後であった。

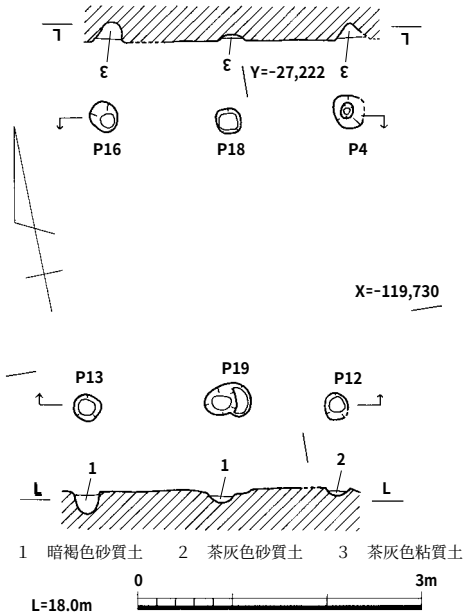
土坑ＳＫ08　調査区の北東隅部において検出した不整形な土坑である。調査区外に延びているため、全容は不明であるが、東西1.4m以上、南北0.8m以上、深さ0.3m前後の規模がある。土師器、瓦器、染付けなどの遺物が少量出土している。



第16図　３トレンチ平・断面図（1/100）

土坑ＳＫ09　調査区南西隅において検出した不整形な土坑で、西隣の右京第798次調査で確認されている土坑ＳＫ04と同じ遺構になる。埋土は、暗灰褐色砂質土と橙褐色土斑入暗灰褐色砂質土で、瓦器椀の破片が少量出土している。

掘立柱建物ＳＢ10（第17図）　調査区の南部で検出した建物である。東西２間以上、南北２間の東西棟建物ではないかと考えられ、方位は北で東に12°前後振れている。柱掘形は径0.3～0.4mほどの楕円形で、径0.1mの柱痕跡が残るものがあった。柱間寸法は、東西約1.3m、南北はmほどの規模に復元できる。柱穴内からは、土師器や瓦器の小片が少量出土している。



第17図　掘立柱建物ＳＢ10実測図（1/80）

柱穴　掘立柱建物ＳＢ10以外にも、いくつかの柱穴を確認している。柱穴は、いずれも径0.3m前後の楕円形を呈しているが、深さ約0.1m前後の浅いものが多い。そのうちＰ７は、深さ約0.3m前後の比較的深いもので、底部に一辺約0.2m前後の扁平な礫が据え置かれていた。柱穴からは、土師器や瓦器の小片を少量出土するものが多く、Ｐ９からは緑釉陶器の細片も出土している。

３　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、陶磁器、瓦、土人形、砥石など中世と江戸時代以降のものに大別することができる。数量は整理箱に５箱程度出土しているが、その大半は江戸時代以降の新しいものばかりであった。

井戸ＳＥ02出土遺物（第18・19図）　土師器、瓦器、陶器、丸瓦、平瓦、砥石など近世を主体とする遺物がまとまって出土している。

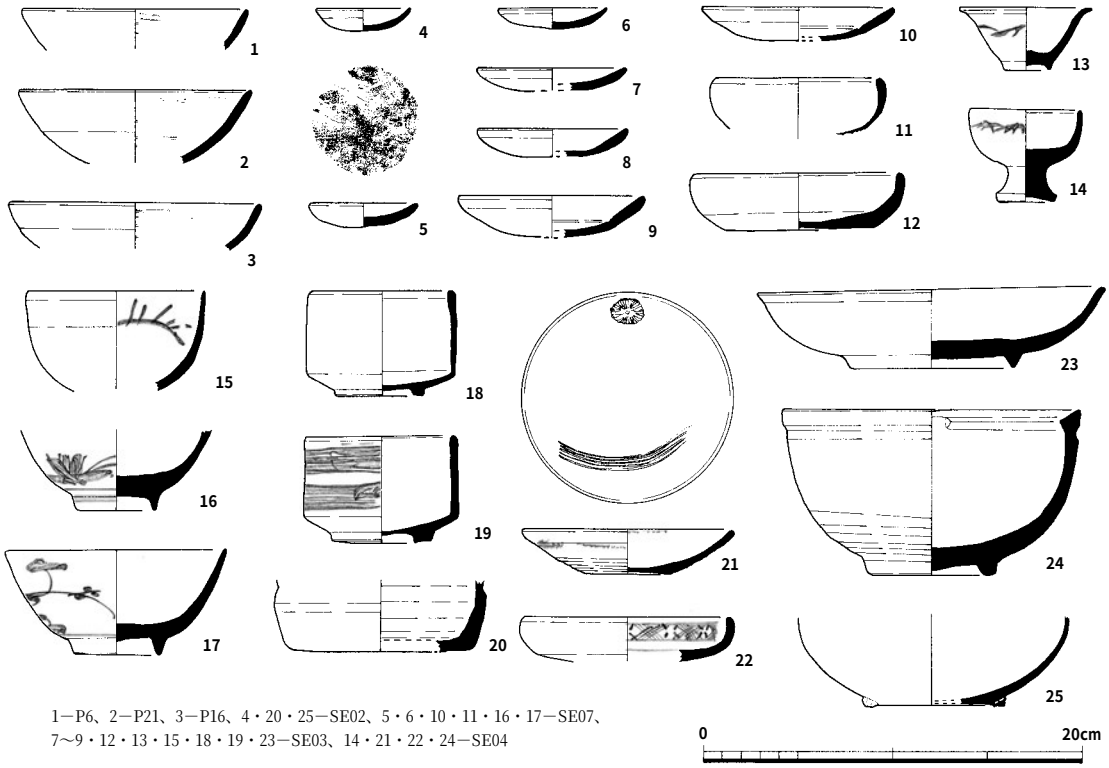
４は、口径５cm、器高が1.2cmしかない土師器の小皿で、器壁を薄く作っている。

20は陶器の鉢で、暗赤茶色を呈する素地に、暗緑灰色の釉がかけられている。底部は平底で、底径10cm、器高3.8cm以上に復元される。25は陶器土瓶の底部片で、底径6.4cm、器高は4.9cm以上ある。釉は淡緑灰色で、全体に細かい貫入が認められた。底部は露胎で、楕円形の突起が張り付けられている。

砥石（26）は、長さ10cm以上、幅5.8cm、厚さ1.7cmある扁平な破損品で、長側２面と短側３面にそれぞれ使用痕が残っている。

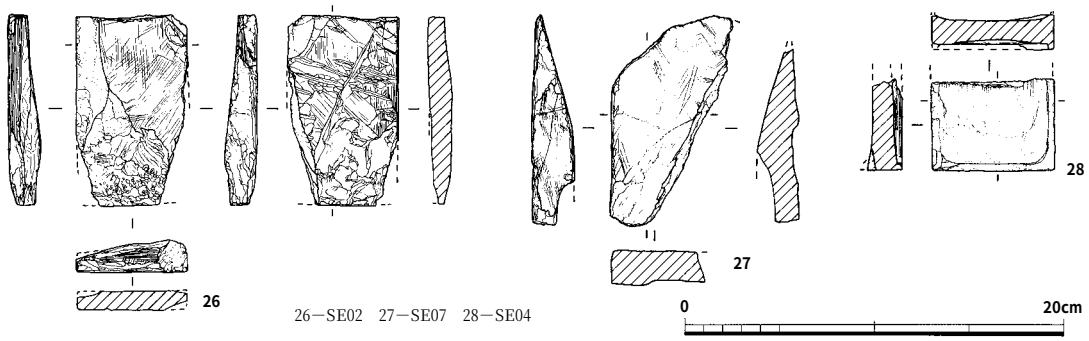
井戸ＳＥ03出土遺物（第18図）　この井戸からは、土師器、染付け、陶器、丸瓦、平瓦、土人形など近世の遺物が出土している。

土師器には小皿（７～９）と小鉢（12）などがある。小皿は口径８cm前後、器高1.2～1.5cmの７・８と、口径8.9cm、器高2.2cmの９があり、後者の見込みには圏線を１条巡らしている。12はロクロ成形によるの小鉢で、口径11.4cm、器高３cmに復元される。底部外面に、ヘラオコ



1－P6、2－P21、3－P16、4・20・25－SE02、5・6・10・11・16・17－SE07、
7～9・12・13・15・18・19・23－SE03、14・21・22・24－SE04

第18図　出土遺物実測図－１（1/4）



第19図　出土遺物実測図－２（1/4）

シの痕跡をとどめている。

13は染付け磁器の盃で、口縁部は外反して大きく開いている。高台は露胎で、口径７cm、器高3.3cmに復元される。15は染付け磁器の碗で、口径は9.5cmに復元される。

陶器には、椀、壺、擂鉢などがある。18・19は陶器の椀で、ともに高台は露胎。18は口径7.8cm、器高5.6cm、19は口径8.1cm、器高5.7cmに復元される。23は陶器の皿で、内外全面に施釉しているが、見込みは蛇の目状に釉を剝ぎ取っていた。口径18.4cm、器高4.3cmに復元できる。瓦には、軒平瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦などがあり、いずれも堅牢な瓦質に焼成されていた。軒平瓦は、瓦当面のほとんどが破損しているため、文様は不明である。

井戸ＳＥ04出土遺物（第18・19図）　土師器、須恵器、青磁、染付け磁器、陶器、平瓦、丸瓦、輪違い瓦、硯、土人形などの遺物が出土している。

14は染付け磁器の仏碗で、口径６cm、器高4.9cmに復元される。高台裾部は露胎で、砂目が残る。22は染付けの皿で、口径は11.3cmに復元され、釉に貫入は認められない。

21は陶器の皿で、内面には肉厚の菊花文を貼付けている。内外面に油煙の痕跡をとどめていることから、灯火器として使用されたものと考えられる。口径11.2cm、器高2.4cmある。24は陶器の椀で、体部の中位以下は露胎である。見込みには三叉トチンの痕跡をとどめており、口径15.8cm、器高8.8cmに復元される。

硯（28）は、陸部分の破損品で、長さ4.9cm以上、幅6.4cm、厚さ1.8cmある。陸部は、使用の頻度が高かったためか、中央が周縁よりも若干窪んでいた。また、裏面は平坦ではなく、摩滅して窪んでいることから、裏面も硯として使用されたものと考えられる。

土人形は、図示していないが、外型造りにより中空に薄く作られていた。

井戸ＳＥ07出土遺物（第18・19図）　土師器、瓦器、染付け磁器、陶器、砥石などの遺物が出土している。

土師器には小皿（５・６・10）と鉢（11）がある。５は口径5.8cm、器高1.3cmの小皿で、内面に布目の圧痕を残す特徴がある。近接する右京第804次調査[4]の土坑ＳＫ07出土品に類例が認められる。10は見込みには圏線を１条巡らせている。口径10.2cm、器高1.8cmに復元できる。11はロクロ成形による土師器の小鉢で、口径9.3cmに復元される。硬質に焼成されており、底部の一部には煤が付着している。

16・17は染付け磁器の碗である。ともに、見込みを蛇の目状に釉を剝ぎ取っていた。17は口径11.7cm、器高5.6cmに復元できる。

砥石（27）は、長側、短側のそれぞれ１面づつに使用の痕跡が認められた。

掘立柱建物ＳＢ10・柱穴出土遺物（第18図）　掘立柱建物ＳＢ10や柱穴からは、土師器や瓦器など中世を主体とする遺物が出土しているが、小片がほとんどであって、図示できたものは少数であった。

１は、Ｐ６から出土した瓦器椀の口縁部片で、口縁端部を丸くおさめている。口径12cm、器高2.2cm以上あり、内面を粗いヘラミガキ調整している。２は、Ｐ21から出土した瓦器椀である。口径12.3cm、器高3.9cm以上あり、口縁端部内面に沈線を１条施し、内外面には粗いヘラミガキを施して仕上げている。炭素の吸着が少なく、淡灰褐色を呈する範囲が多い。３は、掘立柱建物ＳＢ10のＰ16から出土した瓦器椀の破片で、口径13.4cm、器高2.5cm以上ある。

上記の瓦器椀は、いずれも口径が小さくて調整技法も粗雑で退化していることなどから、13世紀代の後半代に比定することができる。

４　まとめ

以上みてきたように、今回の調査では、撹乱や削平を受けた箇所が多く、遺構・遺物の残存状態は必ずしも良好ではなかった。とはいえ、江戸時代を中心とする遺構、遺物を検出できた他、少数ではあるが鎌倉時代の遺構、遺物も確認することができ、ある程度の成果を得ることができた。以下、簡単にまとめておこう。

まず、江戸時代の成果については、円形の掘形をもつ井戸が群在した状態で確認できたことである。井戸は、すべてを完掘したわけではないが、形態や出土遺物の内容などに類似性が認められた。これらの井戸群は、調査区のすぐ西側を南北に走る西国街道沿いの町家に関係するものと推察されるが、その配置や構造などを検討するまでには至らなかった。

次に、中世の成果については、１・３トレンチで検出された多数の柱穴や、復元できたＳＢ10などである。必ずしも情報量は多いとはいえないが、中世の集落構造などを復元する上に不可欠な資料になるであろう。

ちなみに、周辺の調査で確認されている弥生時代や長岡京期に関しては、遺構はもとより遺物もまったく出土しなかった。

注１）小田桐　淳「長岡京跡右京第791次調査概要」『長岡京市センター報告書』第34集　2004年
２）原　秀樹「右京第797次調査概報」『長岡京市センター年報』平成15年度　2005年
３）原　秀樹「長岡京跡右京第798次調査概要」『長岡京市センター報告書』第40集　2004年
４）山本輝雄「長岡京跡右京第804次調査概要」『長岡京市センター報告書』第40集　2004年

第３章　長岡京跡右京第834次（７ＡＮＭＤＢ－18地区）調査概要

－右京六条一坊十一町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡－
ＪＲ長岡京駅西口地区市街地再開発事業に伴うＢ－７地区の調査

１　調査経過

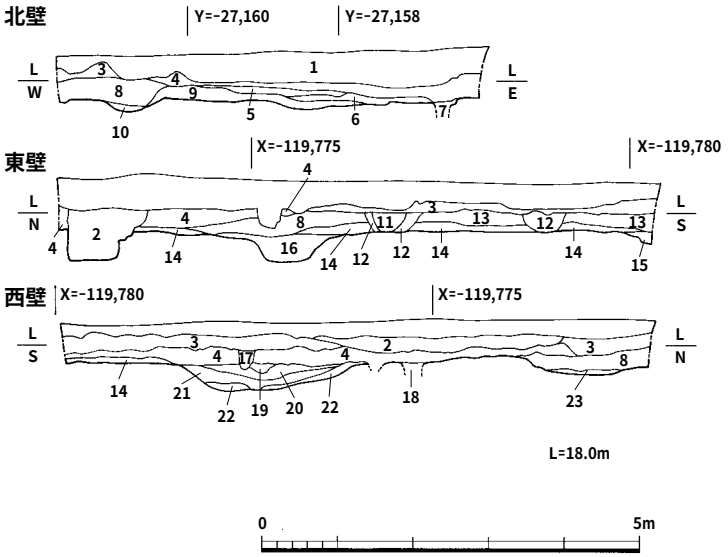
本調査はＪＲ長岡京駅西口再開発事業に伴うものであり、「全画地指摘図」記載地区名のＢ－7地区において実施した。調査地はＪＲ長岡京駅の南西約70mに位置しており、本書所収の右京第820次調査地に隣接している。さらに、調査地の南側では1999年度に右京第606・630・654次調査[注1]が、北側では2002年度に右京第766次調査[2]が行われている。

調査は既存建物の解体を待って、2004年（平成16年）９月16日より重機による盛土、薮土の除去を開始し、その後人力による掘削を行った。調査区は東西約６m、南北約８mの範囲で、前述の右京第820次調査区との間には約2.5mの未調査部分が生じている。調査期間中は大型の台風が再三襲来し作業が滞ったが、２度の全景写真撮影を行った後、11月２日には埋戻し、機材撤去など全ての作業が終了した。なお、本調査は次章の右京第835次調査とほぼ並行して行っている。本調査の総面積は43㎡であり、調査区の中心は旧第Ⅵ座標系のＸ＝－119,776、Ｙ＝－27,159に位置する。

２　検出遺構

（１）基本層序

調査地には厚さ0.2～0.5mの盛土（第１図第１層）が施されている。盛土は調査地の東側ほど厚く盛られており、現地表面で最も高いのは北東隅で、その標高は18.5mを測る。盛土の下には厚さ0.2m前後の薮土（第３層）がほぼ全域に認められるが、薮土より下の状況は一様でなく、



1　盛土
2　撹乱土
3　薮土：淡黄灰色砂質土
4　淡茶灰褐色弱粘質土〈5YR4/3〉
5　暗茶灰褐色弱粘質土（礫混り）〈7.5YR4/3〉
6　暗黒褐色粘質土〈2.5YR2/1〉
7　暗茶灰色粘質土〈7.5YR3/4〉
8　淡黒灰色弱粘質土〈2.5Y3/1〉
9　暗茶褐色弱粘質土（礫混り）〈7.5YR3/2〉
10　溝SD04埋土：淡黒灰色弱粘質土（礫混り）〈2.5YR3/1〉
11　暗茶灰褐色弱粘質土〈7.5YR4/3〉
12　暗茶灰褐色弱粘質土（砂質強し）〈7.5YR4/3〉
13　暗茶褐色弱粘質土〈7.5YR3/2〉
14　淡茶褐色弱粘質土〈7.5YR3/4〉
15　土坑埋土：淡茶灰色弱粘質土〈5YR4/3〉
16　弥生溝SD03埋土：淡黒灰色弱粘質土（礫混り）〈2.5YR3/1〉
17　近世柱穴：淡茶灰色砂質土
18　柱穴埋土：暗茶褐色弱粘質〈7.5YR3/4〉
19　淡茶灰色弱粘質土〈5YR5/3〉
20　淡黒灰色弱粘質土〈2.5YR3/1〉
21　淡茶灰色弱粘質土（礫混り）〈5YR3/4〉
22　暗黄灰色弱粘質土（礫混り）〈2.5YR5/4〉
23　溝SD04埋土：淡黒灰色弱粘質土（礫混り）〈2.5YR3/1〉

第20図　調査区土層図（1/100）

主に締まりの悪い粘土質の茶灰褐色土、茶褐色土、黒褐色土、黒灰色土（第４～６・８・９・13・14層）が存在する。これらの層は第４層の上面から近世の柱穴が掘削されていることから、中世段階までに施された盛土や表土、耕作土と考えられる。しかし、第４～６・８・９・13・14層には弥生土器と考えられる細片の他には遺物がほとんど含まれておらず、時期的な検討や各層の性格を考察することができなかった。

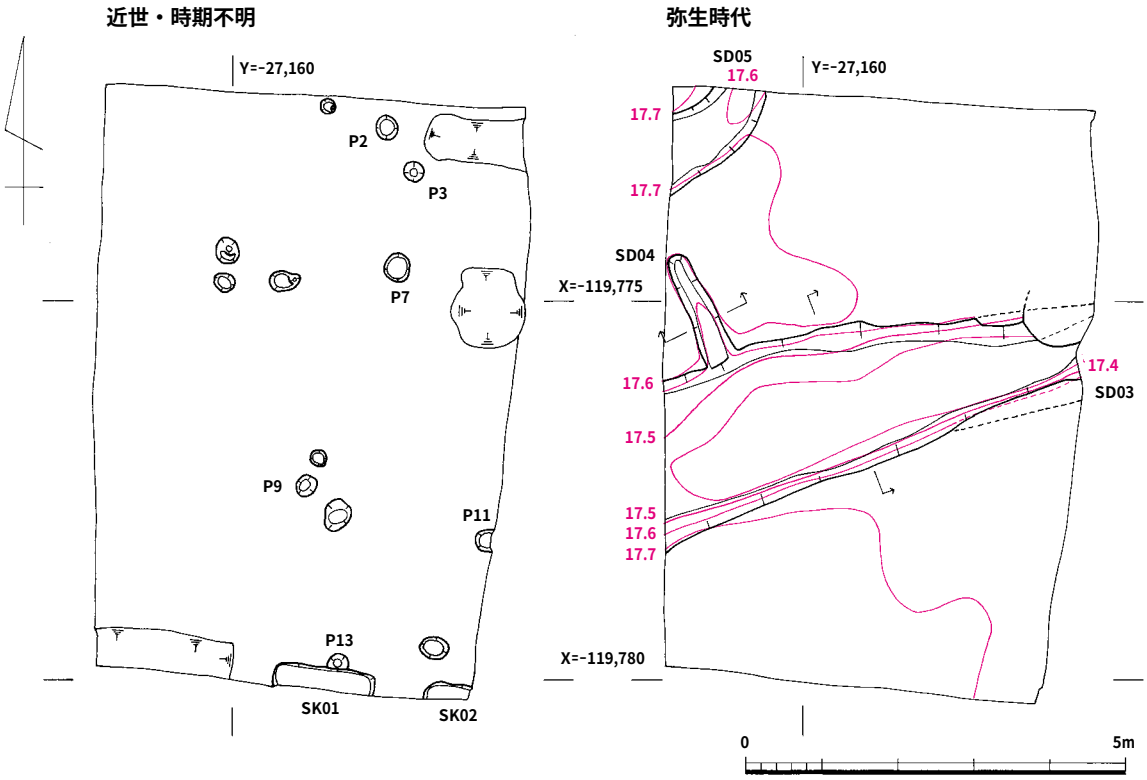
調査区の東半部では淡茶褐色弱粘質土（第14層）、西半部では淡茶灰褐色弱粘質土（第４層）までを除去した段階で地山が表れる。地山は調査区の北西部から南東部にかけてが拳大の礫を含む茶褐色砂礫土で、南西部を中心に黄褐色弱粘質土が分布する。地山上面の高さは調査区の北東部が最も高く標高17.7mを測り、北東から南西方向へ緩やかに傾斜していた。

（２）検出遺構

本調査では近世と弥生時代などの遺構を検出した（第21図）。近世の遺構には柱穴が、弥生時代では溝３条があり、他に時期不明の土坑２基、柱穴を確認している。

Ａ．近世の遺構

柱穴（第21図、第25図）　調査区の東半部を中心に柱穴13基を検出した。このうち、Ｐ２・３・５・７・９・11・13の７基は埋土が淡茶灰色砂質土で、一部に陶磁器片を含むものがあることから近世のものと考えられる。いずれも、直径0.2mまでのもので、深さは0.3m前後を測る。本調査区内で柵や建物として認識できるものはなく、また、東隣の右京第820次調査[3]で確認された近世の柱穴と関連を持つものも見当たらなかった。



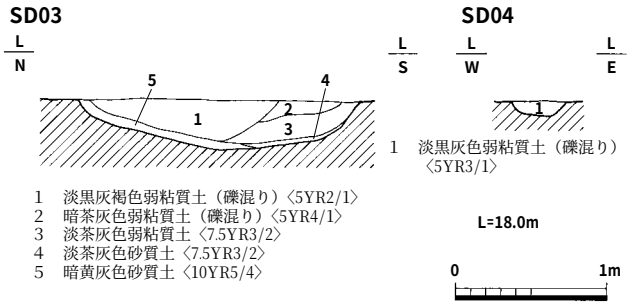
第21図　検出遺構図（1/100）

Ｂ．弥生時代の遺構

溝ＳＤ03（第21～23図、第25図）　調査区のほぼ中央部を東北東から西南西へ横断する溝で、幅1.3～２ｍ、深さ0.2～0.4ｍを測る。溝ＳＤ03は右京第820次調査の南西部で検出された溝と接続することが明らかであり、一辺８ｍ以上を測る方形周溝墓の北辺を画する周溝と判断できる。溝ＳＤ03の方位は東に対して北へ20°程度振っていた。溝の両肩は緩やかな傾斜を示し、起伏の乏しい平坦な底面へと至る。溝ＳＤ03の北肩西端からは後述する溝ＳＤ04が北西方向へ延びていた。溝埋土は大きく粘質系の上層（第23図第１～３層）と砂質の下層（第４・５層）に分かれるが、出土遺物の大部分は上層に含まれていた。

溝ＳＤ04（第21～23・25図）　溝ＳＤ04は前述の溝ＳＤ03と直交方向に接続する溝で、幅0.3ｍ前後、深さが0.15ｍまでの小規模なものである。出土遺物は弥生土器片があるが数少ない。溝の性格は不明であるが、右京第820次調査においても隣り合う方形周溝墓の空閑地に同様な溝が検出されている。

溝ＳＤ05（第20～23図）　調査区の北西隅で検出した溝である。幅0.8ｍ前後、深さ約0.15ｍを測るが、部分的にしか確認できておらず、また、調査区北西部は後世の改変が大きかったため、本来の形態や規模は明らかにできなかった。未調査部分が広いため断定できないが、右京第766次調査の南西部で検出された方形周溝墓周溝との関係も想定される。溝ＳＤ05からも弥生土器が出土している。



第22図　溝ＳＤ03・04断面図（1/50）

上・溝ＳＤ03（南西から）、下・溝ＳＤ04（南東から）
第23図　溝ＳＤ03・04土層堆積状況

Ｄ．時期不明の遺構

調査区の東半部で土坑２基（土坑ＳＫ01・02）と柱穴６基を検出した（第20・21図）。土坑、柱穴ともに出土遺物が皆無で詳細な時期が分からない。しかし、調査区の南辺で検出した土坑が中世段階と考えた第13・14層より層位的に古いこと、また、土坑、柱穴の埋土がいずれも茶灰色を呈することから、古墳時代から中世までの時期を想定できる。

３　出土遺物

本調査では、整理箱にして２箱の遺物が出土した。出土遺物には近世、長岡京期、弥生時代のものがあるが、弥生時代以外の時期は数量的に限られていた。また、弥生時代に属する遺物は方形周溝墓周溝である溝ＳＤ03の出土遺物が多数を占める。

（１）近世の遺物

近世の遺物には、土師器皿、染付茶碗、陶器甕、桟瓦があるが、その量は少ない。また、薮土に含まれていたものがほとんどで、柱穴からは土師器皿、染付茶碗などが少量出土しただけであった。

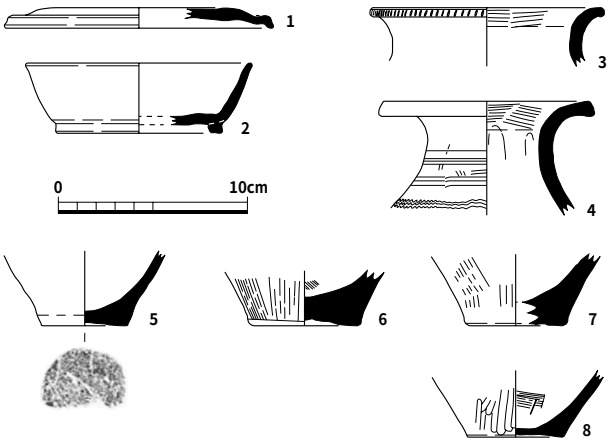
（２）長岡京期の遺物

近世と同様に長岡京期も出土遺物の種類、量が限られていた。出土遺物には土師器椀・高杯、須恵器杯Ｂ（第24図２）・杯Ｂ蓋（第24図１）・甕、瓦などの破片があるが、いずれも中世段階までの盛土や耕作土と考えられる第４～６・８・９層から出土している。１の須恵器杯Ｂ蓋は口径14.2cmに復元できる破片で、宝珠つまみなど中央部が失われている。２の須恵器杯Ｂは外傾する口縁部の端部付近が僅かに外反する。口径12cm、器高3.7cmを測る。

（３）弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には弥生土器、剝片があり、溝ＳＤ03～05の他、中世段階の土層や薮土から出土している。第24図に図示した弥生土器はいずれも溝ＳＤ03から出土したものである。

溝ＳＤ03出土遺物（第24図３～８）　溝ＳＤ03では溝埋土の上層を中心に遺物が出土した。出土遺物には弥生土器の壺（３・４）、壺ないし甕の底部片（５～８）、甕、石器剝片がある。



第24図　出土遺物実測図（1/4）

３・４は広口壺であり、頸部から口縁部が大きく外反する形態を持つ。４では口縁端部付近が明らかに肥厚されており、外端面には櫛描の直線文が施されている。３は口縁端部が丸みを帯びるものであるが、僅かな外端面にはヘラ状工具による刻み目文が施されていた。いずれも、口縁部の内面は粗いヨコハケ、ナナメハケが認められる。体部の文様構成は明らかでないが、４では頸部付近の状況が看取できる。頸部外面は

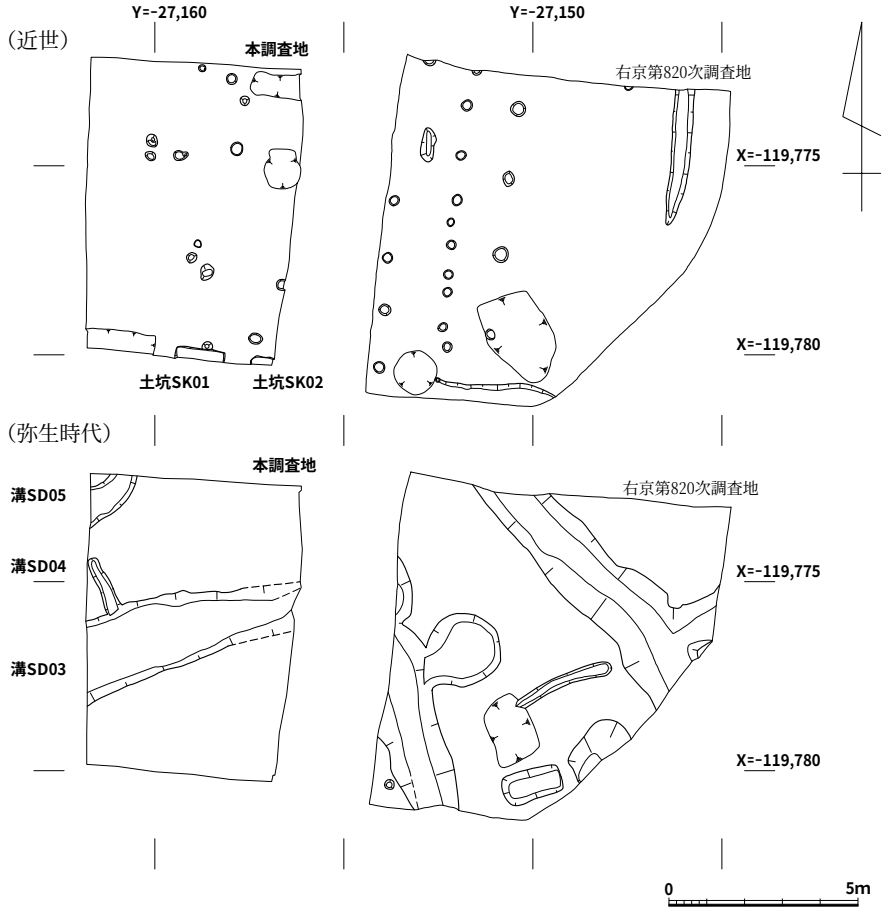
不規則な方向のハケメが施された後、上から櫛描直線文が２条、そして波状文１条が施されていた。口縁部の直径は、３が12.5cm、４が11.3cmを測る。５～８の壺ないし甕の底部片は底部径が4.6～6.2cmを測る。６・７の外面にはタテハケ、８には縦方向のヘラミガキが施されている。底部底面はいずれも上げ底気味であり、６・７では中央部が一段窪んだ形態を示す。また、５の底部には不明瞭ながらも木の葉圧痕が認められた。剝片はサヌカイト製であり、長軸２cm程度のものが２点出土している。

４　まとめ

本調査では近世、中世、弥生時代の遺構と、近世、中世、長岡京期、弥生時代の遺物を確認することができた。ここでは各時期における周辺調査の成果を含めて若干のまとめを行なう。

（１）近世

本調査地は永井直清の近世勝龍寺城跡推定域にあり、その中央部西辺寄りに相当するものと考えられる。調査では建物や柵、溝などの明確な遺構が検出できなかったが、東隣の右京第820次調査地では柵、溝が確認されている。また、本調査地の西約35mの地点で行われた右京第771次調査[(4)]では、近世勝龍寺城跡の西辺を限る堀が確認されている。これまでの調査成果と『永井直清公御在所城州神足之図』（大阪府池田市仏日寺蔵）に照らし合わせれば、本調査地周辺には下級



第25図　右京第820次調査・本調査検出遺構図（1/200）

家臣団の屋敷地ないし足軽町が配されていたと考えられる。

（２）弥生時代

弥生時代では方形周溝墓の周溝１条（溝ＳＤ03）と溝２条を確認している。これまでの調査成果から、当地周辺は神足弥生集落の西側に広がる墓域であり、方形周溝墓群が展開することが明らかとなっている。また、西側の墓域内には区画溝が設けられ、区画溝によって数グループの方形周溝墓群に分割されていた。各グループの方形周溝墓には方位的なまとまりが想定されるが、その他にも方形周溝墓の築造順序や供献土器の特徴、南西部の小規模な竪穴住居群、北西部の土坑群との関連など、検討しなければならない課題は数多く残されている。

注１）岩﨑　誠・木村泰彦・山本輝雄『長岡京市センター報告書』第26集　2002年

２）木村泰彦『長岡京跡右京第766次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第33集　2003年

３）本書所収

４）中島皆夫『長岡京跡右京第771次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第35集　2004年

第４章　長岡京跡右京第835次（７ＡＮＭＤＢ－19地区）調査概要

－右京六条一坊十一町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡－
ＪＲ長岡京駅西口地区市街地再開発事業に伴うＢ－２・３地区の調査

１　調査経過

本調査はＪＲ長岡京駅西口再開発事業に伴うものであり、「全画地指摘図」記載地区名のＢ－２・３地区において実施した。調査地はＪＲ長岡京駅の西南西約50mに位置し、市道ＪＲ長岡京駅前線に面している。調査地周辺では、西側で2003年（平成15年）３月から４月にかけて右京第766次調査[(注1)]が、さらには2004年（平成16年）６月には南側で右京第820次調査[(2)]が実施されている。また、本調査終了後の12月から翌2005年１月にかけて南隣りの敷地において右京第844次調査[(3)]が実施されている。

調査は既存建物の撤去を待って2004（平成16）年９月16日から開始した。しかし、調査地は道路および仮設建物などに画されており、全域を調査するためには対象地を分割し順に作業を行う必要があった。このため、まず調査対象地の西半部に南北約９m、東西約５mの西調査区を設定し、この部分の掘削作業と記録作業を行った。調査期間の前半は台風、秋雨によって予定が遅れがちになり、とくに、台風21号の激しい降雨によって東壁が広範囲に崩壊し、後述する東調査区との間に未掘部分が生じてしまった。西調査区では10月1日に長岡京期以降の全景写真、10月13日には完掘状況の全景写真を撮影し、掘削、記録作業が完了したのが10月14日であった。その後、

左－西調査区（南から）、右－東調査区（南から）
第26図　東西調査区の調査状況

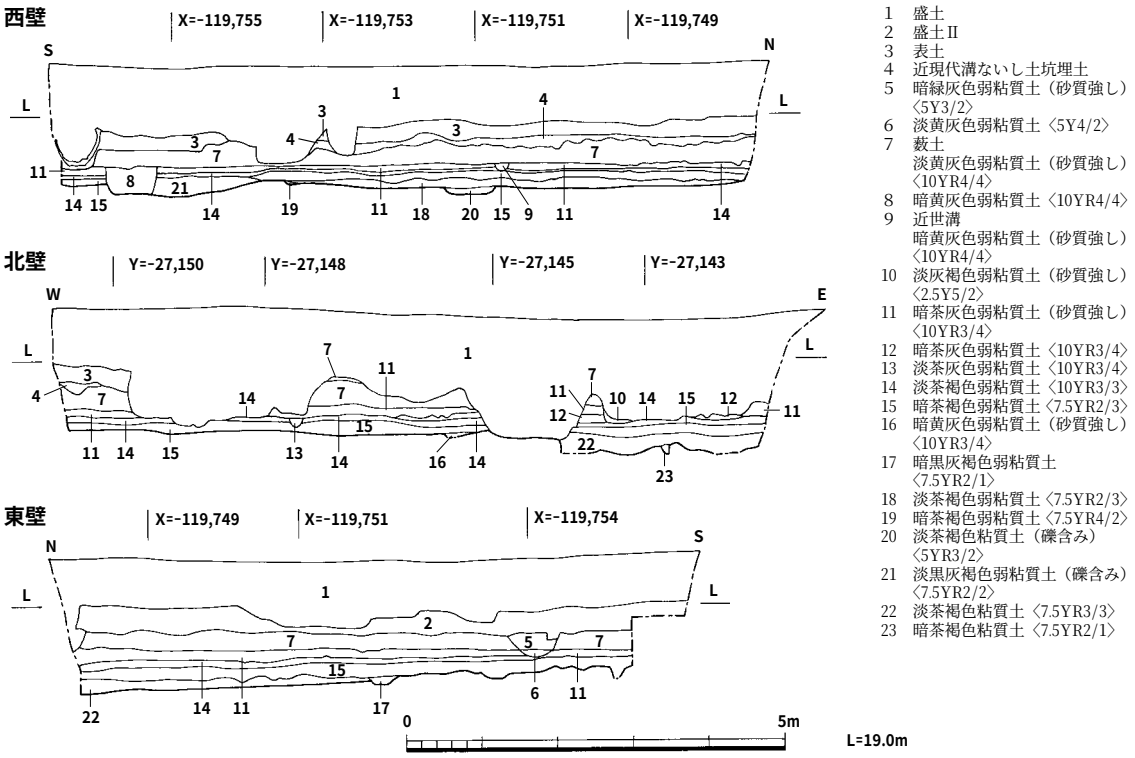
10月15・16日に西調査区の埋戻しと東調査区の重機掘削を行った。東調査区の範囲は西調査区よりやや小さく南北約７m、東西約4.5mの範囲を設定した。東調査区においても、再び大型の台風23号の影響を受けるなど降雨に悩まされた。東調査区では10月22日に長岡京期以降の全景写真、10月28日には完掘状況の全景写真を撮影した。記録作業の終了後、直ちに東調査区の埋戻しを行い、機材撤去など現地における全ての作業が終了したのは11月２日であった。

なお、本調査は前章の右京第834次調査とほぼ並行して行っている。本調査の総面積は73㎡であり、調査区の中心は旧第Ⅵ座標系のＸ＝－119,752、Ｙ＝－27,146に位置する。

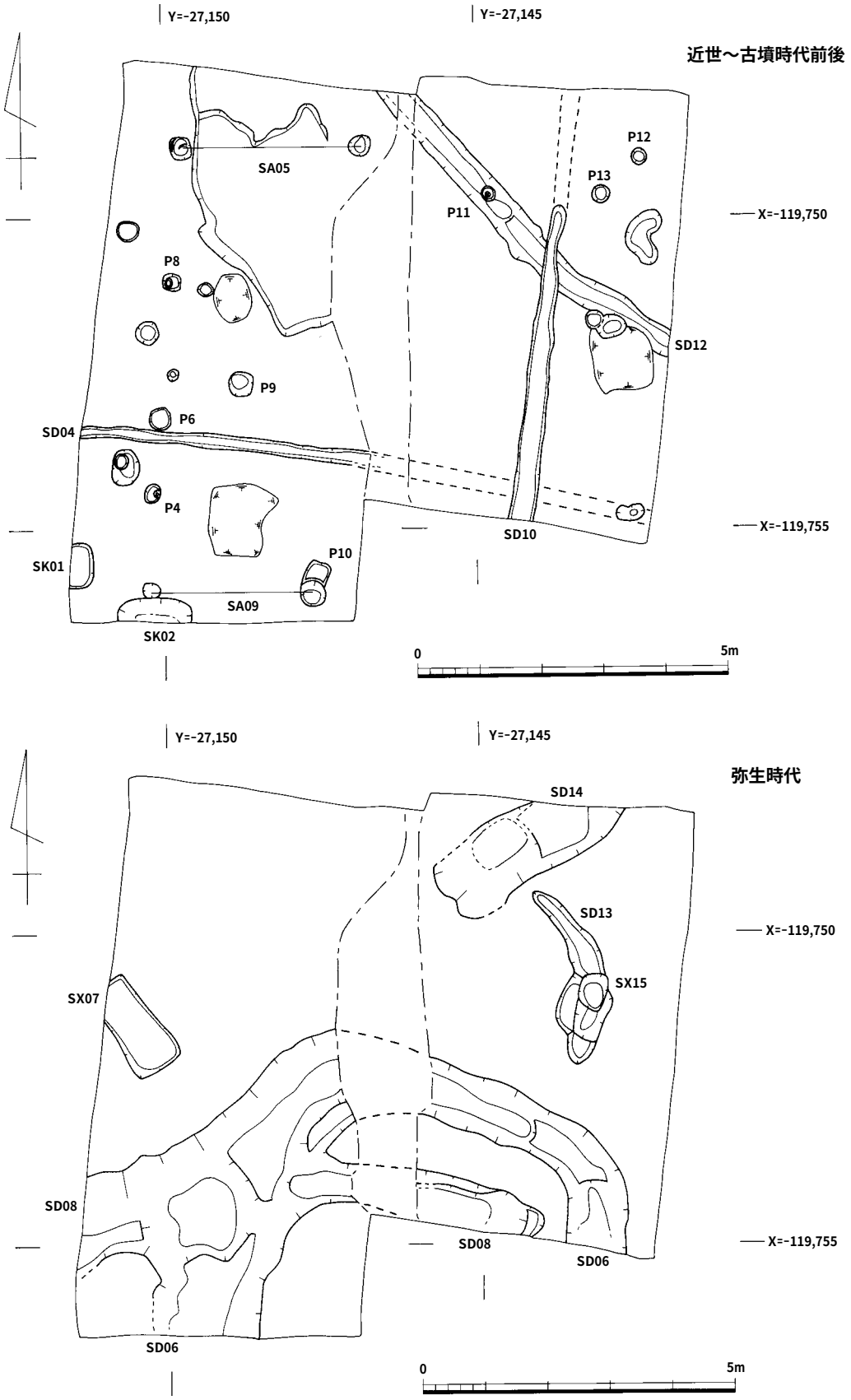
２　検出遺構

（１）基本層序

調査地には厚さ0.7～１mの盛土（第27図第１・２層）が施されている。この盛土はＪＲ長岡京駅西口に向かう東西道路の嵩上げに伴って施されたもので、旧地表面が低い調査区の南西部ほど厚く盛られていた。現地表面で最も高いのは北西隅で、その標高は19.7mを測る。調査区の西半部では盛土の下に厚さ0.3m前後の旧表土（第３層）がある。薮土（第７層）は厚さが0.3m前後で、調査区の全域で認められるものの西側ほど厚く施されていた。薮土を完全に除去した段階で表れる暗茶灰色弱粘質土（第11層）が近世の遺構面であり、同層の厚さは約0.1m、調査区北西部における第11層上面の標高は18.4mを測る。第11層の下には茶褐色系の弱粘質土（第14・15・18層）が0.1～0.3mの厚さで堆積している。第14・15層は長岡京期前後の遺物包含層であり、



第27図　調査区土層図（1/100）



第28図　検出遺構図（1/100）

とくに第15層には長岡京期の土師器、須恵器など多数の遺物が含まれていた。また、第15層は西調査区の北半部で土坑状の堆積状況を呈しており、この部分から軒平瓦などが出土している。地山は第15・18層を除去した段階で表れ、この面で長岡京期以前の遺構を確認した。地山の性質は一様でなく、西調査区の北半部が暗茶灰色弱粘質土、南半部が淡黄褐色粘質土で、東調査区では南半部を中心に淡黄褐色粘質土が分布する。地山上面の高さは標高18.1mを測る調査区の北西部が最も高く、北から南へ緩やかに傾斜していた。

遺構の検出作業は、長岡京期前後の遺物包含層上面と地山面で行ったが、第３図の検出遺構図は古墳時代以降と弥生時代に分けて図示した。

（２）検出遺構

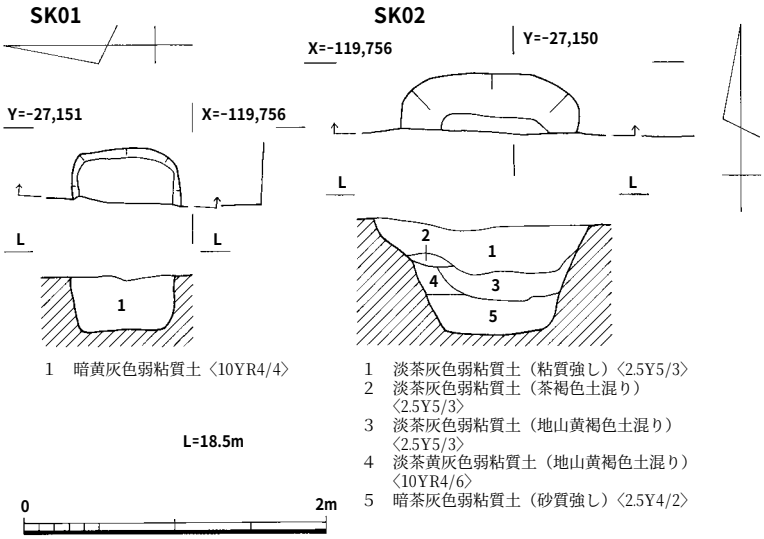
本調査では近世と弥生時代などの遺構を検出した（第２図）。近世の遺構には柱穴が、弥生時代では溝３条があり、他に時期不明の土坑２基、柱穴を確認している。

Ａ．近世の遺構

本調査地は永井氏勝龍寺城跡の中央部西辺に推定される。『永井直清公御在所城州神足之図』には本丸を中心に大きく二重（北と南は異なる）の屋敷地が表現されており、当地周辺が位置する外側の区画は下級家臣や足軽の居住区画に相当する。さらに、右京第606次調査[4]などの周辺調査成果と指図を検討した場合、当地は指図に「千馬（ちば）権兵衛」と記された屋敷地に当たるものと考えられる。

溝ＳＤ10（第28図）　東調査区の中央部で検出した南北方向の溝で、方位は北に対して東へ約10°振っていた。溝は竹薮客土の直下から掘削されており、規模は幅0.3～0.5m、深さ0.4m程度を測る。溝には表土に似た灰褐色土が堆積していた。溝ＳＤ10は本調査地の南側で行われた右京第820・844次調査地でも確認されており、30m以上にわたって掘削されていることが分かった。後述する土坑ＳＫ01・02との関連は明らかでないが、右京第844次調査では溝が近世の柱穴を切っており、近世勝龍寺城跡より新しい時期の遺構と考えられる。

土坑ＳＫ01（第29図）　西調査区の南西隅で検出した土坑で、遺構の輪郭はさらに西側へ続いていた。調査区では南北0.7mを測り、方形に近い平面形を呈するものと考えられる。土坑断面は箱形に掘削されており、深さ0.35mを測る。埋土には薮土に似た黄灰色砂質土が堆積しており、土坑の底部付近からは土師器皿などが出土している。



第29図　土坑ＳＫ01・02実測図（1/50）

土坑ＳＫ02（第29図）　土坑ＳＫ01の南東で確認した。土坑ＳＫ01と同様に遺構の輪郭が調査区外へ続き、全容を明らかにすることが出来ない。調査区では東西1.4mを測り、平面形態も方形を呈するものと考えられる。土坑断面は逆台形に掘削されており、深さが0.7mを測る。埋土には土坑ＳＫ01と同じ黄灰色砂質土が堆積しているが、壁面近くの周縁部には黄褐色粘質土の地山を含む土が認められ、若干異なった様相を呈する。

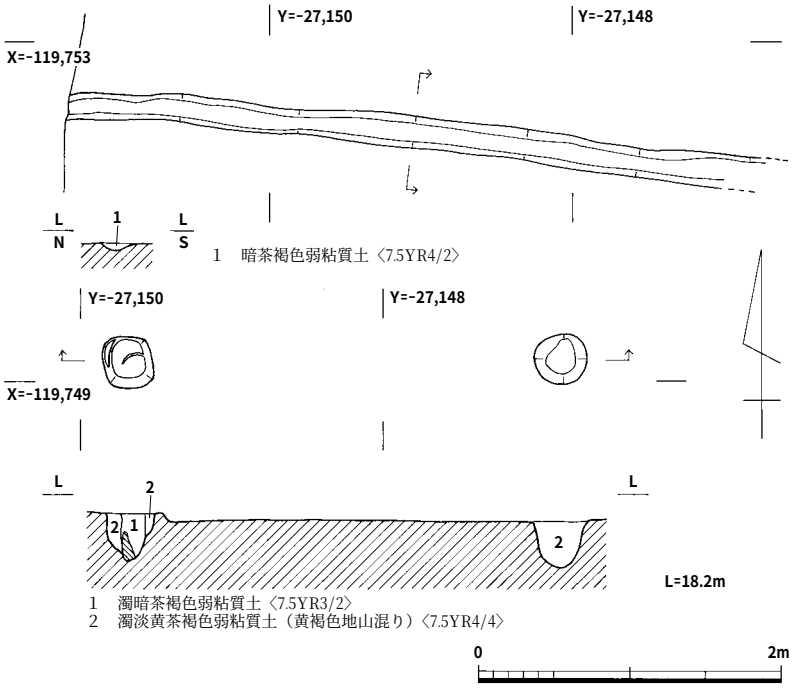
柱穴（第28図）　調査区の南西部で土坑ＳＫ01・02と同様な埋土を持つ円形の柱掘形を２基確認した。直径0.2～0.4mで、深さは0.3m前後を測る。

Ｂ．長岡京期の遺構

調査地は長岡京跡の右京六条一坊十一町にあり、十一町の中でも東側中央部に推定される。右京第606次調査をはじめとする長岡京駅西口再開発の関連調査では、右京六条一坊十一～十四町の四町四方に内溝で区画された大規模な掘立柱建物群が想定されており、十一町は建物群想定域の北東町に当たる。調査区には長岡京期を中心とする時期の遺物包含層である茶褐色系の弱粘質土（第２図第14・15・18層）があり、同層を完全に除去した段階で長岡京期の遺構を確認した。

溝ＳＤ04（第30図）　調査区の南半部で検出した東西方向の溝で、右京第766次調査区の溝ＳＤ12に繋がるものと考えられる。溝は幅0.15～0.25m、深さ0.1mまでの小規模なものであった。溝の方位は東でやや南へ振っており、調査区西壁における溝心は旧第Ⅵ座標系のＹ＝－27,151.3でＸ＝－119,753.4を測る。東調査区では繰り返し精査を行ったが、南東隅で部分的な痕跡を確認しただけであった。埋土からは土師器、須恵器の小片が出土しているが、その数は少ない。

柵ＳＡ05（第30図）　西調査区の北辺部で形態、規模、埋土の共通した柱穴を３基検出した。東西棟の掘立柱建物とも考えられたが、南側の柱穴が明らかでないため東西に並ぶ２基を柵とした。ただし、東西方向の柵とした柱列が東西棟の南側柱筋である可能性は残されている。柱掘形は隅円方形で、一辺が0.25～0.35m前後を測るのに対し、深さは検出面から0.4m程度で、掘形の大きさに比べて深く掘削されていた。柵ＳＡ05の方位はほぼ真東西で、柱掘形から柱痕跡が確認されていないが柱間は2.8m程度を測る。柱掘形には良く締まった茶褐色土が堆積しており、埋土からは長岡京期の土師器、須恵器が出土している。東調査区の北半部においても



第30図　溝ＳＤ04・柵ＳＡ05実測図（1/50）

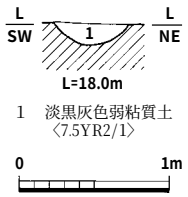
同様な規模の柱掘形を確認しているが、柱筋の方向、柱間間隔などを検討した結果、柵ＳＡ05とは関連性を持たないものと考えられた。

柵ＳＡ09（第28図）　西調査区の南西部で真東西方位に並ぶ柱穴２基を確認した。しかし、柵の東延長部分については東調査区の範囲外となったため確認できなかった。柵ＳＡ05と同様、柵ＳＡ09についても東西棟の北側柱筋とも考えられる。柱掘形は隅円方形で、一辺が0.3～0.45m、深さは検出面から0.3m程度であった。柱痕跡が確認されていないが、柱間は2.7m程度を測り、埋土からは長岡京期の土師器、須恵器が出土している。なお、柵ＳＡ05と柵ＳＡ09は南北に約7.2m離れている。

柱穴（第28図）　西調査区の中央部と東調査区の北東部で長岡京期の柱穴を８基（Ｐ４・６・８～13）検出している。このうち、西調査区で検出した柱穴Ｐ４・６・８は、柵ＳＡ05・09西端の柱穴を南北に結ぶ線上にあり柵との関連が想定される。しかし、柱穴Ｐ４・６は、その他の柱穴に比べて著しく浅く、輪郭も不明瞭であった。

Ｃ．古墳時代前後の遺構

溝ＳＤ12（第28・31図）　調査区の北東部で北西から南東方向に斜行する溝を検出した。溝の規模は幅0.3～0.5mで、深さ0.3m前後を測る。溝ＳＤ12は長岡京期の柱掘形によって撹乱されているが、後述する弥生時代の土器棺墓よりは新しい時期のものである。溝内からは弥生土器、土師器の判別が困難な小片が出土しただけで、溝の時期を詳細に検討することができないため、古墳時代前後の可能性を示すに止める。

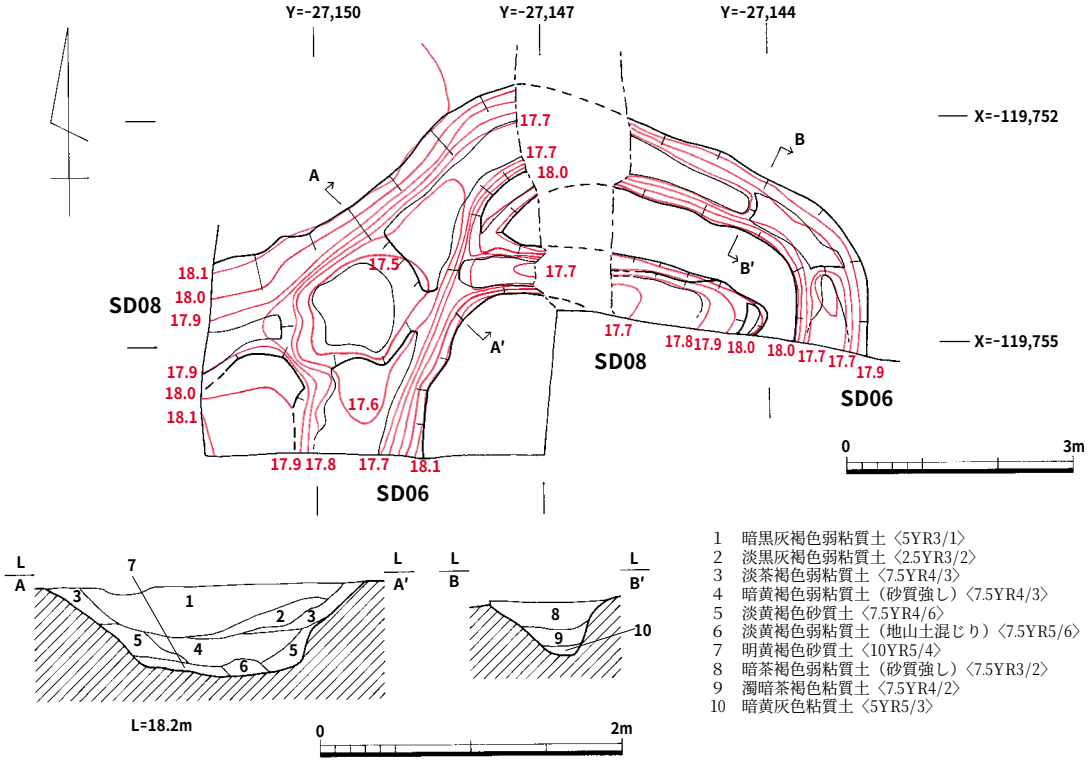


第31図　溝ＳＤ12
実測図（1/50）

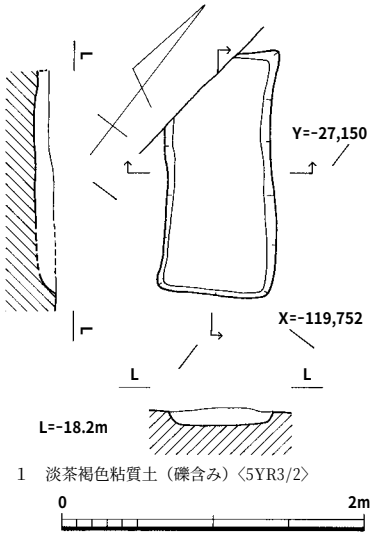
Ｄ．弥生時代の遺構

弥生時代中期の神足遺跡は、現在のＪＲ長岡京駅東口に集落の中心があり、居住域の周囲を方形周溝墓群、土坑群が取り囲む状況が確認されている。居住域の北および北東縁部で行われた右京第748[(5)]・757[(6)]次調査では居住域を巡る環濠が発見され、神足遺跡における環濠の存在が初めて明らかにされた。当地周辺は集落西側の方形周溝墓群が展開する場所であるが、さらに西側の右京第771次調査[(7)]地付近では方形周溝墓は無くなり土坑群が展開する。

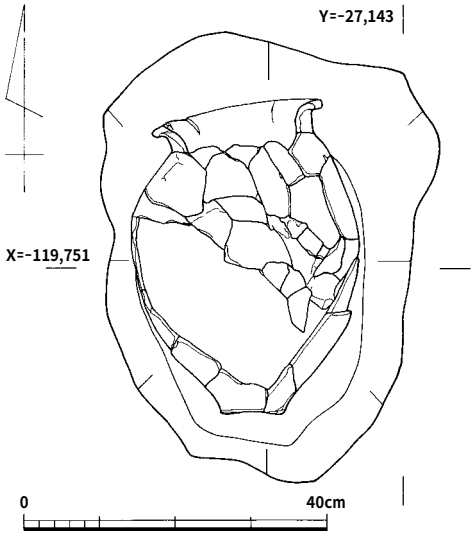
溝ＳＤ06（第32図）　調査区南半部で確認した溝ＳＤ06は、西調査区の南壁中央部から北へ延び、西調査区中央で東南東へ屈曲し、東調査区では調査区の南東隅で南側へ屈曲する。後述する溝ＳＤ08と重複しており、溝ＳＤ06がより新しい段階に掘削されたものと考えられる。溝ＳＤ06によって画される範囲を方形周溝墓と考えた場合、その規模は東西方向の溝心々間距離で約5.5mとなり、神足遺跡における方形周溝墓なかでも最も小規模な部類に属する。想定される方形周溝墓の主軸は北に対して約15°東へ振る。溝ＳＤ06の規模は幅0.8～1.6m、深さは0.3～0.7mを測るが、溝ＳＤ08との交差部分については厳密に溝幅を測定することができなかった。溝は西側が全体的に深く掘削されており、屈曲部分はそれ以外の部分に比べて浅かった。溝の埋土は、黒灰褐色から茶褐色の上層（第１～３層）と黄褐色で砂質が強い下層（第４～７層）に二分される。このうち、遺物を多く含んでいたのは上層の暗黒褐色弱粘質土（第１層）であり、弥生時代



第32図　溝ＳＤ06・08実測図（1/50・1/100）



第33図　土壙墓ＳＸ07実測図（1/50）



第34図　土器棺墓ＳＸ15実測図（1/10）

中期の土器や石器が出土している。下層では遺物の出土は僅かで小片に限られていた。

溝ＳＤ08（第32図）　調査区の南西隅から東へ延び、溝ＳＤ06と交差して東調査区内で収束する溝である。溝は幅0.6～1.3m、深さ0.4m前後を測る。溝ＳＤ06との交差部分が一段深くなっているが、この部分は前述の溝ＳＤ06の掘削に伴うものと考えられる。溝埋土の上半部には斑状に地山である黄褐色土の混入が認められた。出土遺物には弥生時代中期の土器と石器剝片があるが、その量は溝ＳＤ06に比べて少なかった。

土壙墓ＳＸ07（第33図）　西調査区の西辺中央部で検出した。北西から南東方向に主軸を持

つ土壙墓と考えられ、主軸の方位は北に対して35°西へ振っている。土壙墓の規模は主軸方向の長さ1.6mが幅0.8m前後で、深さ0.2mを測る。木棺の痕跡については平面と畦の精査を繰り返し行ったが確認できなかった。また、茶褐色粘質土の埋土を全て持ち帰り洗浄作業を行ったが、土器、石器などの遺物は含まれていなかった。調査区の北半部では周溝が確認されていないため、土壙墓ＳＸ07は方形周溝墓の主体部ではなく独立した埋葬施設と考えられる。

土器棺墓ＳＸ15（第34図）　土器棺墓ＳＸ15は東調査区の東半中央部で検出した。溝ＳＤ12、溝ＳＤ13と重複しており、いずれにも先行する段階の遺構である。土器棺墓の掘形は、主軸が北に対して約５°西へ振っており、規模は主軸方向の長さ0.6m、幅0.4m、深さ0.4mを測る。土器棺は器高約40cmの広口壺形土器で、掘形のほぼ中央に埋置されていた。土器棺の主軸も北に対して約５°西へ振っており、土器の口縁部が北、底部が南に配されている。土器棺は口縁部が閉塞されていない。また、土器棺の内部に含まれていた土も全て持ち帰り丁寧に洗浄を行ったが、出土遺物は確認できなかった。

溝ＳＤ13・14（第28図）　溝ＳＤ13・14には出土遺物がないが、溝ＳＤ13は溝ＳＤ12、土器棺墓ＳＸ15との重複関係から弥生時代後半期の遺構と考えられる。溝ＳＤ14については底部や肩部の下半が不明確で自然作用によるものとも考えられる。

３　出土遺物

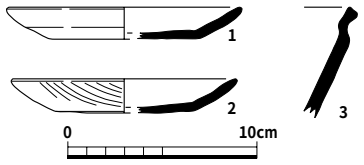
本調査では、整理箱にして５箱の遺物が出土した。出土遺物には近世、中世、長岡京期、弥生時代のものがあり、数量的には長岡京期と弥生時代のものが目立つ。中世の遺物は薮土などに混入した小片であり、遺構に伴うものはなかった。

（１）近世の遺物

近世の遺物は土坑ＳＫ01・02、溝ＳＤ10と薮土から出土している。土師器、陶磁器、桟瓦があるが、土坑ＳＫ01から出土したもの以外は小片で図示できなかった。

土坑ＳＫ01出土遺物（第35図）　土師器皿（１・２）、陶器鉢（３）が土坑底面から出土している。１・２の土師器皿は平らな底部から口縁部が直線的に外傾する形態で、口径12cm前後、器高約1.7cmを測る。口縁部と底部の境界部内面には圏線状の沈線が施される。いずれも内外面はナデ調整によって仕上げられているが、２の口縁部外面には斜め方向のハケメが認められた。３は器高８cm程度の陶器鉢と考えられる。口縁部がくの字形に屈曲し、内外面には乳灰色の施釉が認められる。

（２）中世の遺物



第35図　出土遺物実測図－１（1/4）

中世の遺物は旧表土、薮土、そして、暗茶灰色弱粘質土（第27図第11層）に含まれていた。第11層は近世以降の遺物がなく、中世段階に施された可能性を指摘できる。出土量は限られているが、土師器小皿、瓦器椀・羽釜などが認められる。

（３）長岡京期の遺物

長岡京期の遺物は第15層などの包含層や薮土、そして、溝、柱穴から出土している。第11図に示した出土遺物の多くは第15層から出土しており、溝や柱穴から出土したものは限られていた。また、第15層は第14・18層と厳密に区分できなかったため、本来第14・18層に含まれていたものが混入している可能性がある。

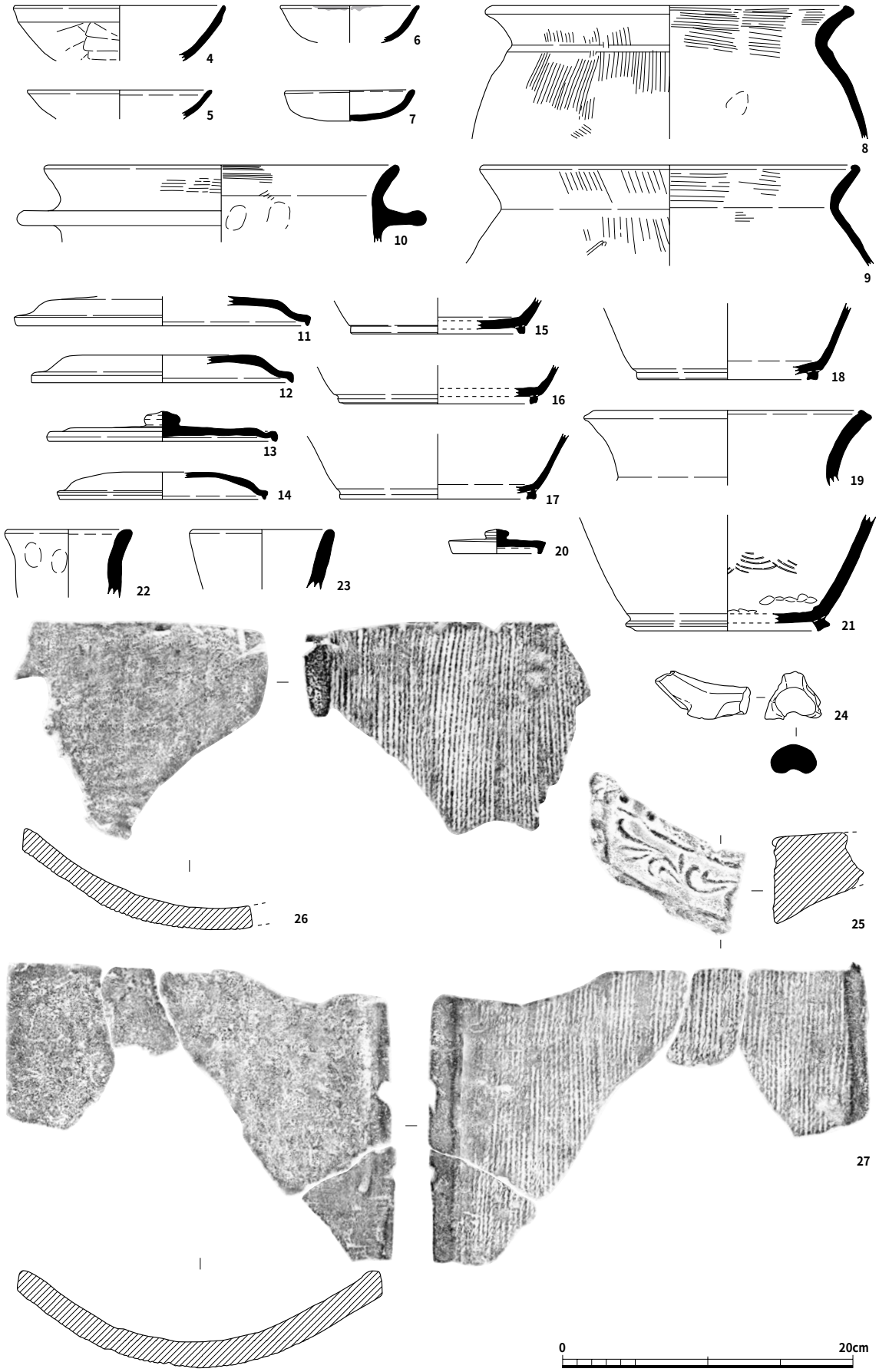
第15層の出土遺物（第36図）　第15層から出土した遺物には、土師器の椀Ａ（４）、皿Ａ（７）、杯Ａ、甕、羽釜（10）、須恵器の杯Ａ、杯Ｂ（15～18）、杯Ｂ蓋（11～14）、甕（19）、壺（21）、そして、製塩土器（23）、土馬（24）、軒平瓦（25）、平瓦（26）、丸瓦がある。

４の土師器椀Ａは口径14.6cmを測る。外面にはヘラケズリが施されるが、口縁部付近は強いヨコナデによって仕上げられ、外側面がやや直立気味に立ち上がる形態となる。７の皿Ａは成形、調整が粗く、砂粒を多く含む胎土が黄褐色を呈するなど、本調査で出土した長岡京期の土師器供膳形態にあって特異な性質を示す。また、底部と口縁部の境界は不明瞭で、肉厚な器壁が減じないまま口縁端部へ至る形態を有している。口径9.1cm、器高2.2cmを測る。10の羽釜は口径24.5cmで、口縁部から約3.5cm下に幅３cm程度の鍔を有する。内外面ともにナデによって仕上げられているが、部分的に粗いハケメや指頭圧痕を残している。

11～14は須恵器の杯Ｂ蓋であり、口径は順に20.4cm、18.1cm、15.9cm、14.5cmを測る。天井部の立ち上がりが大きい形態（11・12・14）と、扁平な天井部形態（13）の２形態が認められる。13は宝珠つまみを残す破片であり、器高2.1cmを測る。12の天井部外面には火襷が残されていた。15～18の杯Ｂは、高台径が順に12cm、13.6cm、13.8cm、13.6cm、12.5cmを測る。15は高台部分を除いた底部外面が未調整で、成形段階と考えられる爪状圧痕が残されていた。杯Ｂ、杯Ｂ蓋はともに硬質に焼成されており、軟質で乳白色を呈する個体はほとんど認められない。19は甕の口縁部片であり、口径19.8cmを測る。口縁部は内外面ともにナデによって丁寧に仕上げられ、端部は内面がやや肥厚している。21は高台を有する形態で、壺の体部下半と考えられる。高台は外側へ強く張り出しており、高さと幅はともに約１cmを測る。体部内面には部分的に同心円の当て具痕跡と指頭圧痕が残されており、底部内面には自然釉が付着していた。

23は口径約10cmの製塩土器である。布目圧痕や指頭圧痕は、器壁の摩耗が激しく看取できなかった。24の土馬は胴部中央から尾部の破片で、脚部は失われていた。25の軒平瓦は平城宮式6695－Ａ型式と考えられ、同様の文様構成を持つ破片が右京第771次調査でも出土している。外区に珠文を配するが、縁部の摩耗が激しく外縁や珠文の詳細は分からない。内区の唐草文は、左最終単位の第一支葉が太く端部が上方へ巻き、それ以外は短く斜め下方へ延びる。断面形は三角形状で、彫りも比較的明瞭である。表面の色調は灰白色を呈しており、胎土は精良であった。26の平瓦は凸面に縄目タタキが認められるが、凹面は摩耗のため僅かな布目圧痕が残されていただけであった。焼成は軟質で、色調は灰褐色を呈する。

柱穴の出土遺物（第36図）　ここでは柱穴出土遺物を一括して記述した。出土遺構は柵ＳＡ05のＰ１が平瓦（27）、Ｐ２が製塩土器（22）、柵ＳＡ09のＰ１が須恵器壺蓋（20）で、その他の柱



第36図　出土遺物実測図－２（1/4）

穴として柱穴Ｐ８から土師器椀（５）、柱穴Ｐ12で土師器甕（９）、柱穴Ｐ13からは土師器椀Ａ（６）、甕（８）が出土している。

５・６は土師器の椀Ａであり、口径12.7cm、9.6cmを測る。６の口縁部には部分的に油煙痕跡が残されていた。８・９の甕は口径25.4cmと同26.2cmを測る。肩部から口縁部にかけての形態は、８が凹凸のある肩部から外反気味に口縁部が立ち上がるのに対し、９は肩部から口縁部がより直線的に成形されている。内外面の調整にはヨコハケ、タテハケ、ナデが用いられる。20は須恵器の壺蓋であり、口径6.5cm、器高1.7cmの小型品である。全体に丁寧な均整がとれた作りで、天井部から鋭く屈曲する口縁部は直線的に内傾する。また、口縁端部は幅0.3cm程の平らな端面が形成されている。外面には自然釉の付着が認められた。22の製塩土器は口径8.8cmで、直立気味の体部形態が想定できる。外面は未調整で指頭圧痕が看取される。27の平瓦は両側辺を残す破片で、幅約25cm、厚さ２cm前後を測る。凸面に縄目タタキ、凹面に布目圧痕が認められ、側辺付近は丁寧なナデが施されていた。

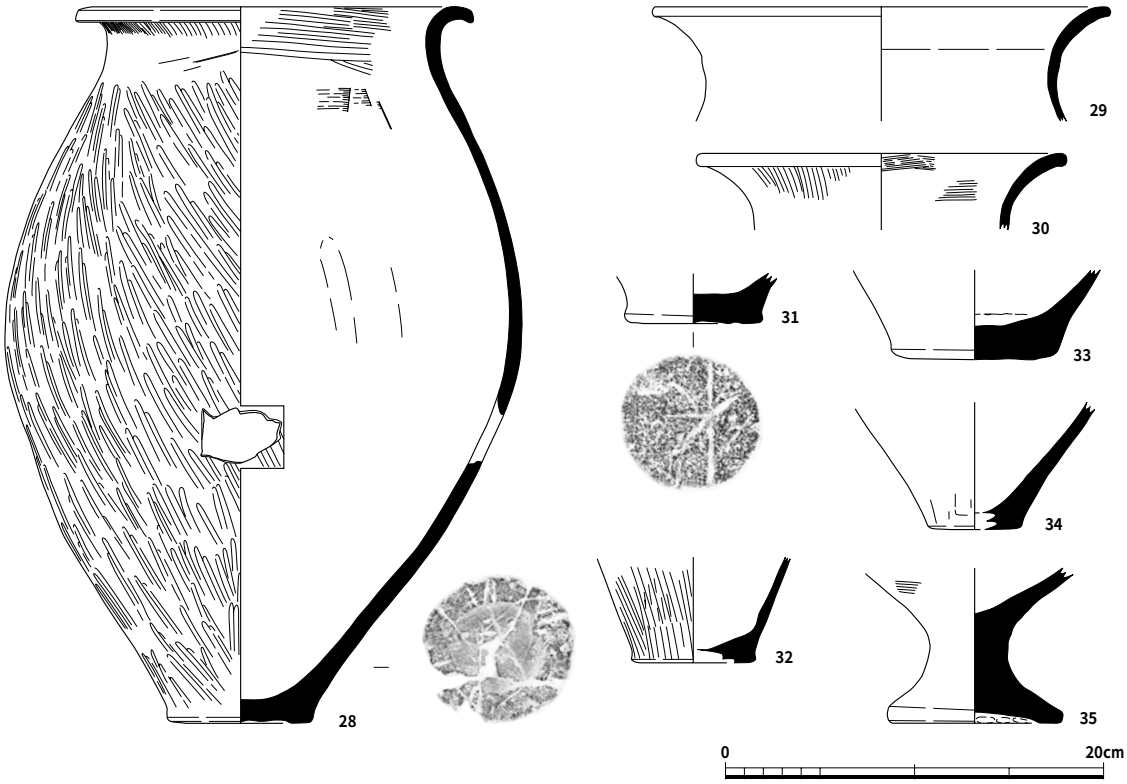
（３）弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には弥生土器、石器、剝片があり、溝ＳＤ06・08、土器棺墓ＳＸ15の他、長岡京期以降の遺構埋土や薮土、包含層からも出土している。第12・13図には主に土器棺墓ＳＸ15、溝ＳＤ06から出土した遺物を図示した。当該期の遺物は量的に目立つが、溝ＳＤ08、包含層の遺物は小片や部位の明らかでないものが多い。

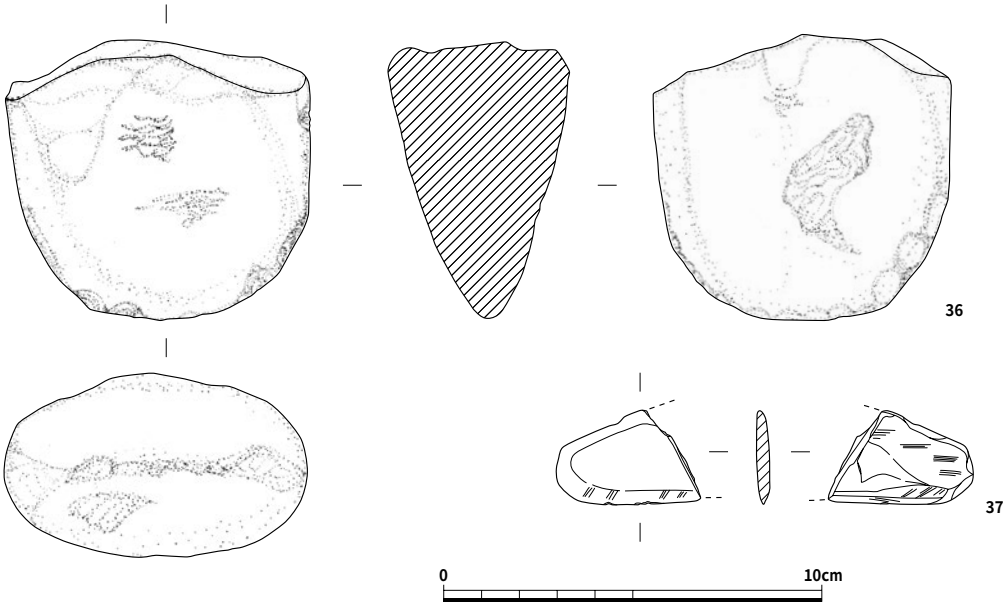
土器棺墓ＳＸ15出土遺物（第37図28）　28の広口壺は土器棺として使用されたもので、体部最大径の下方に幅４cm、高さ2.5cm程度の穴が焼成後に穿たれている。広口壺は器高37.9cm、口径20.8cm、体部最大径27.3cm、底部径7.6cmを測る。最大径が体部の中位よりやや上にあり、不明瞭な肩部から頸部が直立気味に立ち上がり、大きく外反する口縁部へ至る。また、口縁端部には内傾する幅0.7cm程度の外端面が形成されている。口縁部および体部には文様などの意匠が施されていない。しかし、体部外面は密なヘラミガキが斜め方向に施され、頸部から口縁部にかけても部分的にタテハケや工具痕跡を残すものの丁寧なナデによって整えられている。内面調整では肩部から口縁部にかけてヨコハケが、体部には丁寧なナデが認められた。厚さ1.3cm程度の底部は上げ底形態で、木の葉や枝状の圧痕が残されていた。精良な胎土には大粒の砂粒が含まれておらず、焼成も非常に良好であった。また、表面の色調は暗黄褐色を呈する。

溝ＳＤ06出土遺物（第37図29～35、第38図）　溝ＳＤ06では溝埋土の上層を中心に多くの遺物が出土した。29・31・37は第15層から出土しているが、その出土地点から本来溝ＳＤ06に含まれていたものと考えた。出土遺物には弥生土器の壺（29・30・35）、壺ないし甕の底部（31～34）、甕、石器の磨製石斧（36）、不明品（37）、剝片がある。

29・30は広口壺であり、口径は24.2cmと同19.6cmを測る。いずれも、頸部から緩やかに外反する口縁部を有しており、器厚は口縁端部に向かって増し、端部に幅0.6cm程度の外端面が形成される。29は器壁の摩耗が激しいため明らかでないが、30では内外面ともに粗いナデとハケメが認められた。35は台付壺の脚台と考えられる破片で、脚台の高さは約６cm、底径9.4cmを測る。



第37図　出土遺物実測図－３（1/4）



第38図　出土遺物実測図－4（1/2）

外面調整には丁寧なナデが用いられるが､脚台底面は未調整で成形段階の指頭圧痕を残している。色調は暗茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに良好であった。31～34の壺ないし甕の底部片は、底部径が順に7.3cm、6.6cm、8.8cm、4.9cmを測る。いずれも、内面調整はナデによって仕上げられており、外面は32に腰の強いタテハケが、34では部分的ながらヘラケズリが認められる。底部の形態には平坦なもの（33・34）と僅かに上げ底気味のもの（31）がある。32は底部の大部分が失

われており、その形態は分からない。また、31の底部には木の葉ないし枝状の圧痕が認められた。

36は砂岩製の磨製石斧である。刃部の破片であり、最大幅7.6cm、残存長7.3cmを測る。刃部には石斧使用時の打撃痕が多数認められる。37はサヌカイト製の不明品である。破片の長辺に片刃が付けられており、小型の石庖丁とも考えられる。残存長3.8cmで、厚さは0.3cm前後を測る。剝片はサヌカイト製で、長軸２～３cm程度のものが数点出土した。

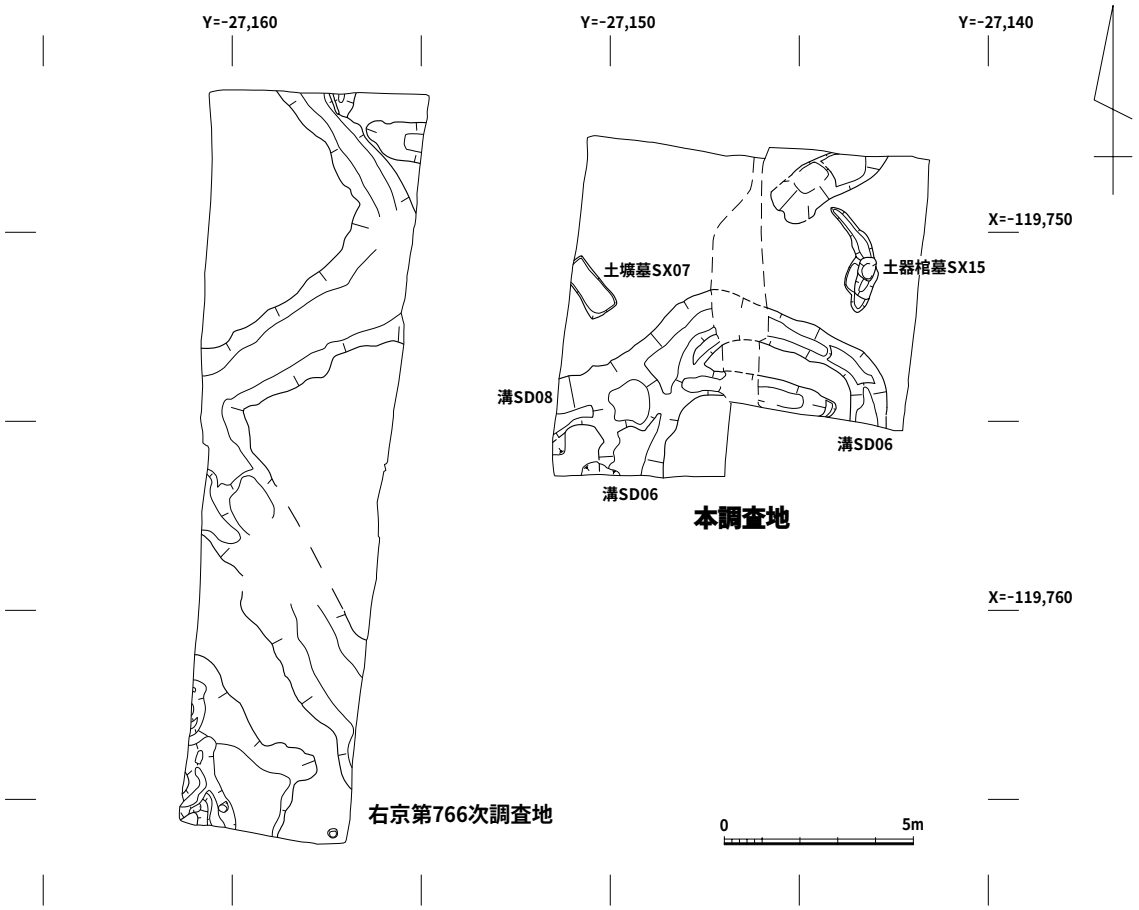
４　まとめ

（１）近世

調査地は永井直清の近世勝龍寺城跡推定域にあり、その中央部西辺寄りに位置する。調査では土坑２基、柱穴と溝を確認したが、溝は近世後半期以降のものと考えられる。本調査地の西約35ｍで行われた右京第771次調査地では、近世勝龍寺城跡の西辺を限る堀が確認されている。また、ＪＲ長岡京駅東口を中心に本丸を巡る堀が確認されており、こうした成果から本調査地周辺には下級家臣団の屋敷地ないし足軽町が配されていたと考えられる。

（２）弥生時代

ＪＲ長岡京駅周辺の調査、なかでも住友ベークライト跡地で行われた右京第606・630・654次調査によって神足遺跡の様相が明らかにされており、当地周辺は神足弥生集落の西側に広がる墓



第39図　右京第766次調査・本調査検出遺構図（1/200）

域として利用されていたと考えられている。本調査においても方形周溝墓の周溝（溝ＳＤ06)、土壙墓（ＳＸ07)、土器棺墓（ＳＸ15）といった墓域に係わる遺構を確認し、これまでの調査成果を補強する成果が得られた。西隣の敷地で行われた右京第766次調査でも方形周溝墓が確認されている（第39図)。しかし、本調査の溝ＳＤ06とは異なった方位であり、想定される規模も一回り以上大きい。また、供献土器と考えられる遺物の出土状態が検出されており、溝ＳＤ06出土遺物との格差も認めることができる。このように本調査などの成果は、方形周溝墓の格差、土壙墓、土器棺墓の存在など、墓域内における階層性を検討するための重要な資料と評価できる。

注１）木村泰彦『長岡京跡右京第766次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第33集　2003年
２）本書所収
３）中島皆夫『長岡京跡右京第844次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第45集　2005年　所収予定
４）岩﨑　誠・木村泰彦・山本輝雄『長岡京市センター報告書』第26集　2002年
５）山本輝雄・岩﨑　誠『長岡京跡右京第748次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第31集　2003年
６）原　秀樹「右京第757次調査略報」『長岡京市センター年報』平成14年度　2004年
７）中島皆夫『長岡京跡右京第771次発掘調査報告』『長岡京市センター報告書』第35集　2004年

第５章　長岡京跡右京第836次（７ＡＮＭＳＭ－９地区）調査概要

―右京六条一坊十四町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡―
長岡京駅前線に伴うＡ－７・８地区の調査

１　調査経過

今回の調査地は、東側の右京第782次調査地と西側の右京第798・826次調査地とに挟まれており、調査前までは木造の住宅や店舗が建っていた。調査にあたっては、東西約15.5～18m、南北約10.5mの台形を呈した調査区を設定したが、土置き場を確保する必要から、調査区の南西隅部を掘り残し、後日に反転掘削して調査することにした。

調査は、2004（平成16）年９月21日より調査対象地の周囲にフェンスを設置することから開始した。そして、22日から重機による掘削を開始し、27日に作業員を動員して遺構検出のための精査に着手した。その結果、地表面から地山面までは比較的浅く、また浄化槽やコンクリート製の井戸側をもつ井戸など近・現代の撹乱や削平を受けている範囲が少なからずあることが判明した。それでも、土坑、溝、掘立柱塀など中世を中心とする遺構群を数多く検出することができた他、古墳時代の溝や近世の溝、土坑なども確認することができ、大きな成果を得ることができた。調査期間中は、例年になく降雨の日が多く、調査の進行に影響を及ぼしたが、10月28日に完掘状態の写真を撮影し、翌29日に埋め戻しと南西隅部の掘削を行った。そして、11月１日から遺構の検出と掘り下げ、４日に写真撮影し、５日には埋め戻しを行って現地での調査をすべて終了した。

第40図　発掘調査前風景（北西から）

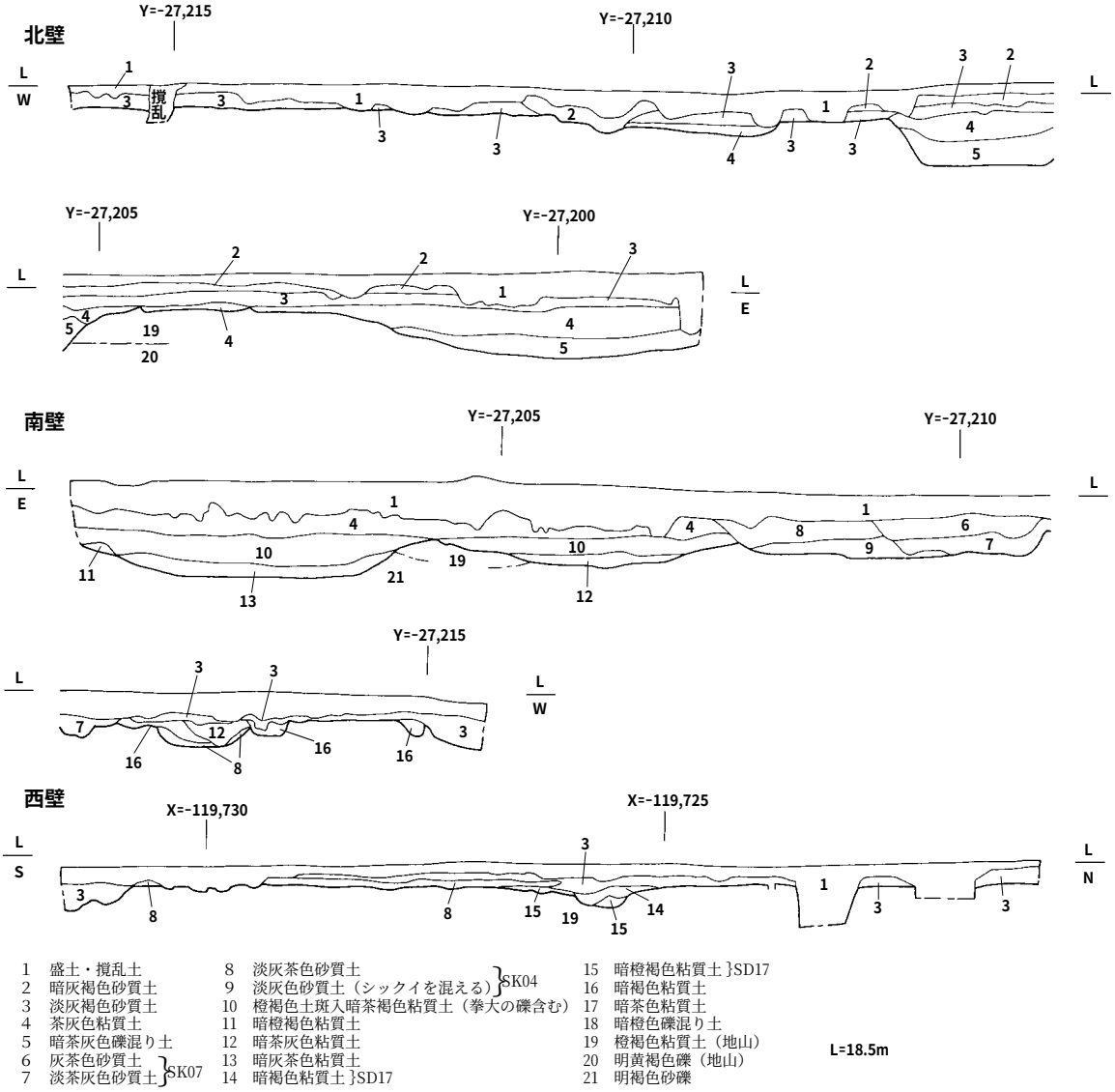
第41図　発掘調査作業風景（北西から）

ちなみに、調査面積は174㎡、調査区心の国土座標値はＸ＝－119,726、Ｙ＝－27,207である。

2　検出遺構

（1）基本層序

調査区内の基本層序は、上から盛土・撹乱土（第１層）、淡灰褐色砂質土（第２層）、淡灰茶色砂質土（第３層）の順で堆積し、地表下約0.2～0.5mほどで橙褐色系の粘質土および砂礫の地山に至っていた。地山は、更新世に形成された段丘層であって、その上面は北西から南東に向かって緩やかに傾斜しており、標高にすると調査区の北西端で約18.25m、南東隅で約17.9m前後であった。遺構は、すべて地山面上において重複した状態で検出したが、柱穴など遺構の残存状況を考慮するならば、地山面は後世に大きく削平を受けているものと考えられた。



第42図　調査区土層図（1/80）

（２）近世以降の遺構

土坑ＳＫ01　調査区の西部で検出した不整形な土坑で、東西約1.4m、南北約1.5m、深さ約0.2mほどの規模がある。埋土は暗灰褐色砂質土で、陶器、桟瓦などの破片が出土している。

溝ＳＤ02　調査区中央やや西寄りで検出した東西方向に延びる素掘り溝で、方位は北で東に約７°前後振れていた。幅約0.5m、深さ0.15～0.2mほどの規模があり、埋土は基本層序の第２層と同じで、土師器や陶器、瓦の破片などが少量出土している。

井戸ＳＥ03　調査区の中心近くで検出した円形掘形をもつ井戸で、径約1.15m、深さ0.6m以上の規模がある。

土坑ＳＫ04　調査区の南辺中央部付近で検出した不整形な土坑である。東西2.3m、南北1.9m以上、深さ0.4mほどの規模があり、埋土は淡灰茶色砂質土と淡灰色砂質土の上下２層に分けられ、陶器、土管、瓦などが出土している。

土坑ＳＫ05　土坑ＳＫ04の北西で検出した不整形な土坑で、東西約１m、南北1.2m、深さ0.3mほどの規模があり、陶器の破片が少量出土している。

土坑ＳＫ06　調査区の南西隅で検出した楕円形を呈する土坑で、擂鉢状に窪んでいた。底部には、厚さ0.1m前後の漆喰状のものが貼付けられていた。

土坑ＳＫ07　土坑ＳＫ04と重複関係にある不整形な土坑で、それよりも新しいことを確認できた。東西1.8m、南北0.6m以上、深さ0.4mほどの規模があり、埋土は灰茶色砂質土と淡茶灰色砂質土の２層であった。陶器、瓦器などの破片が少量出土している。

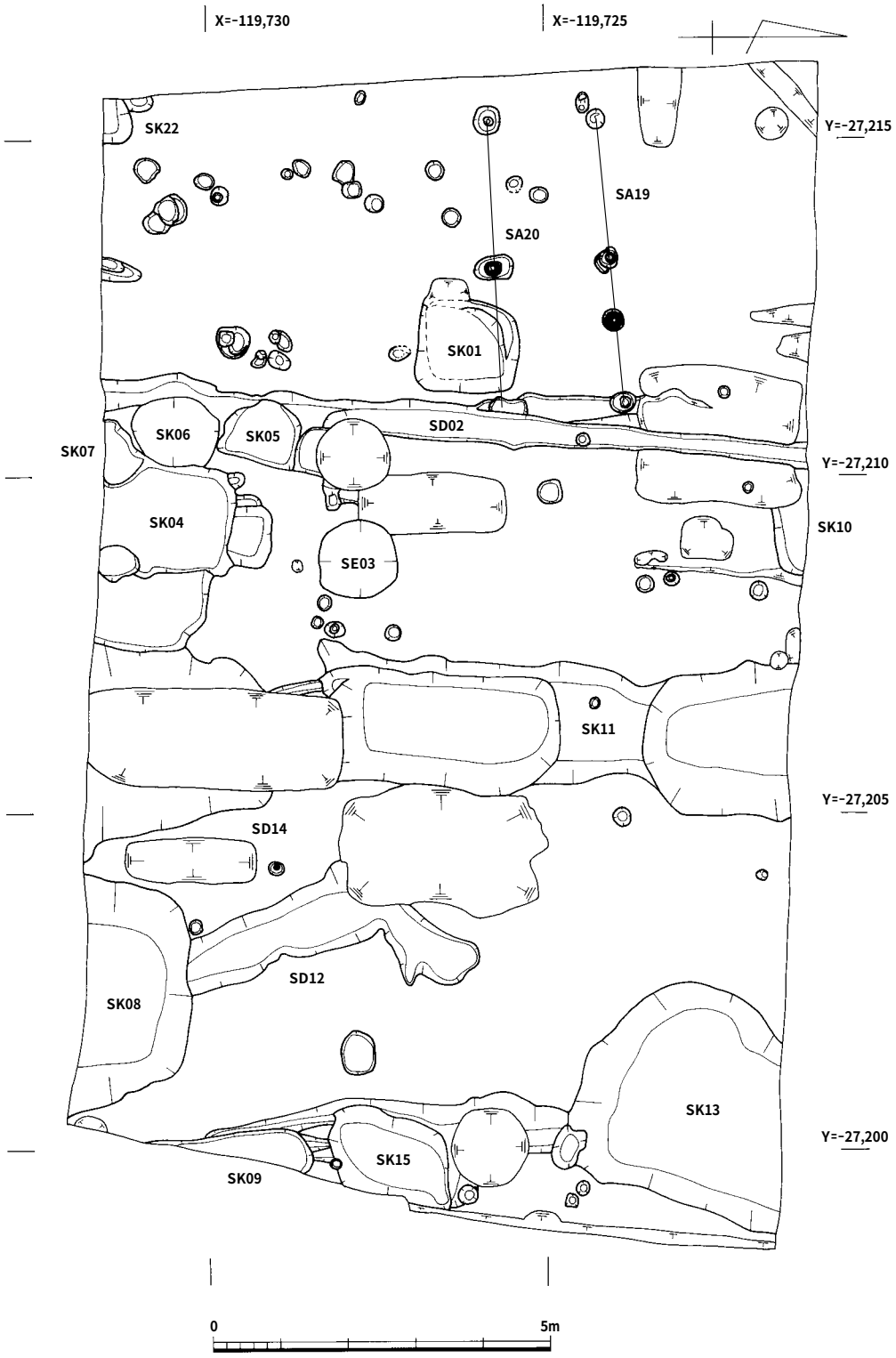
この他に、コンクリート製の井戸側をもつ井戸２基、ガラスや陶器、桟瓦などが大量に廃棄された大型の撹乱坑１・２などがある。

（３）中世の遺構

土坑ＳＫ08（図版16）　調査区の南東部において検出した隅円方形を呈すると考えられる土坑である。南半部が調査区域外にあるため、全容は不明であるが、東西約3.6m、南北1.6m以上、深さは約0.4.m前後の規模に復元できる。埋土は、橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土と暗茶灰色粘質土の上下２層に分けられ､上層からは拳大や人頭大の礫が多量に廃棄された状態で出土している。また、土師器の小皿、須恵器の壺・鉢、瓦器の椀・鍋・羽釜、白磁の碗など中世を中心とする各種の遺物がまとまって出土したほか、弥生土器や長岡京期の須恵器なども混在した状態で少量出土している。

土坑ＳＫ09（図版18）　調査区の南東部で検出した不整形な土坑で、南側は調査区域外に延びているために全容は不明だが、長さ2.2m以上、幅0.8m以上、深さ約0.3mほどの規模がある。埋土は、橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土と暗茶灰色粘質土の上下２層で、底部には拳大ほどの礫とともに土師器の小皿や瓦器椀の破片などが埋没していた。

土坑ＳＫ10（図版18）　調査区北辺の中央部付近で検出した土坑である。西と南側が撹乱坑で破壊され、北側も調査区外に延びるために全容は不明であるが、東西1.6m前後、南北0.55m以上、深さ約0.1mほどの規模に復元される。埋土は茶灰色粘質土１層のみで、瓦器の椀や土師器



第43図　検出遺構図－１（1/100）

の小皿などの遺物が少量出土している。

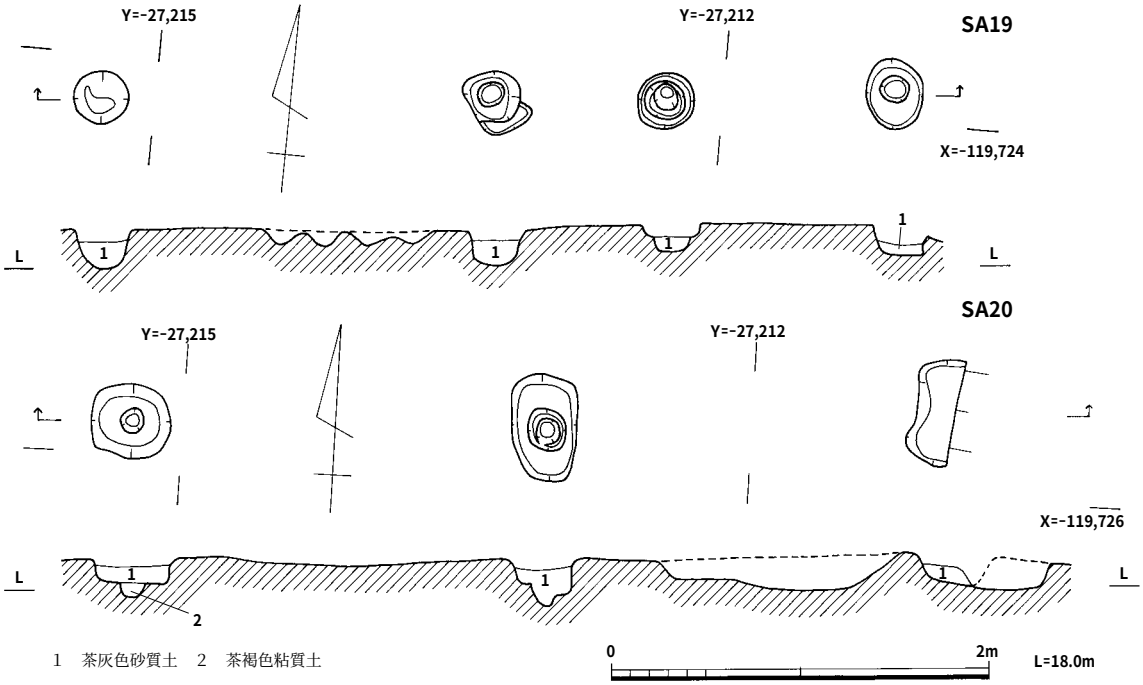
土坑ＳＫ11（図版17）　調査区のほぼ中央部で検出した南北方向の大型土坑で、南端は撹乱坑２によって破壊され、北側は調査区域外に延びている。東西２～2.3m、南北が７m以上もある長大なもので、深さは0.15～0.6m前後の規模がある。埋土は、茶灰色粘質土と茶灰色礫混り土の上下２層に分けられ、土坑ＳＫ08の場合と同様に、上部に拳大ほどの礫が多量に廃棄された状態で出土した。また、出土遺物としては、土師器の小皿、瓦器の椀・羽釜、須恵器の鉢、白磁の碗、それに炉壁体とみられる破片が10数点出土していることは注目される。この他、土師器の高杯・羽釜（生駒西麓産）、須恵器の杯Ｂなど長岡京期の遺物も混入した状態で少量出土している。

土坑ＳＫ13（図版18）　調査区の北東部で検出した不整形な土坑である。東西3.9m以上、南北3.1m以上、深さ0.6m前後の規模がある。埋土は、茶灰色粘質土と暗茶灰色礫混り土の上下２層で、上部に拳大ほどの礫がまとまって堆積していたことは、土坑ＳＫ08・11の場合と同じ状況であった。出土した遺物は、土師器の小皿、瓦器の椀・羽釜、須恵器の鉢など中世のものが主体であるが、長岡京期の須恵器も少量ある。

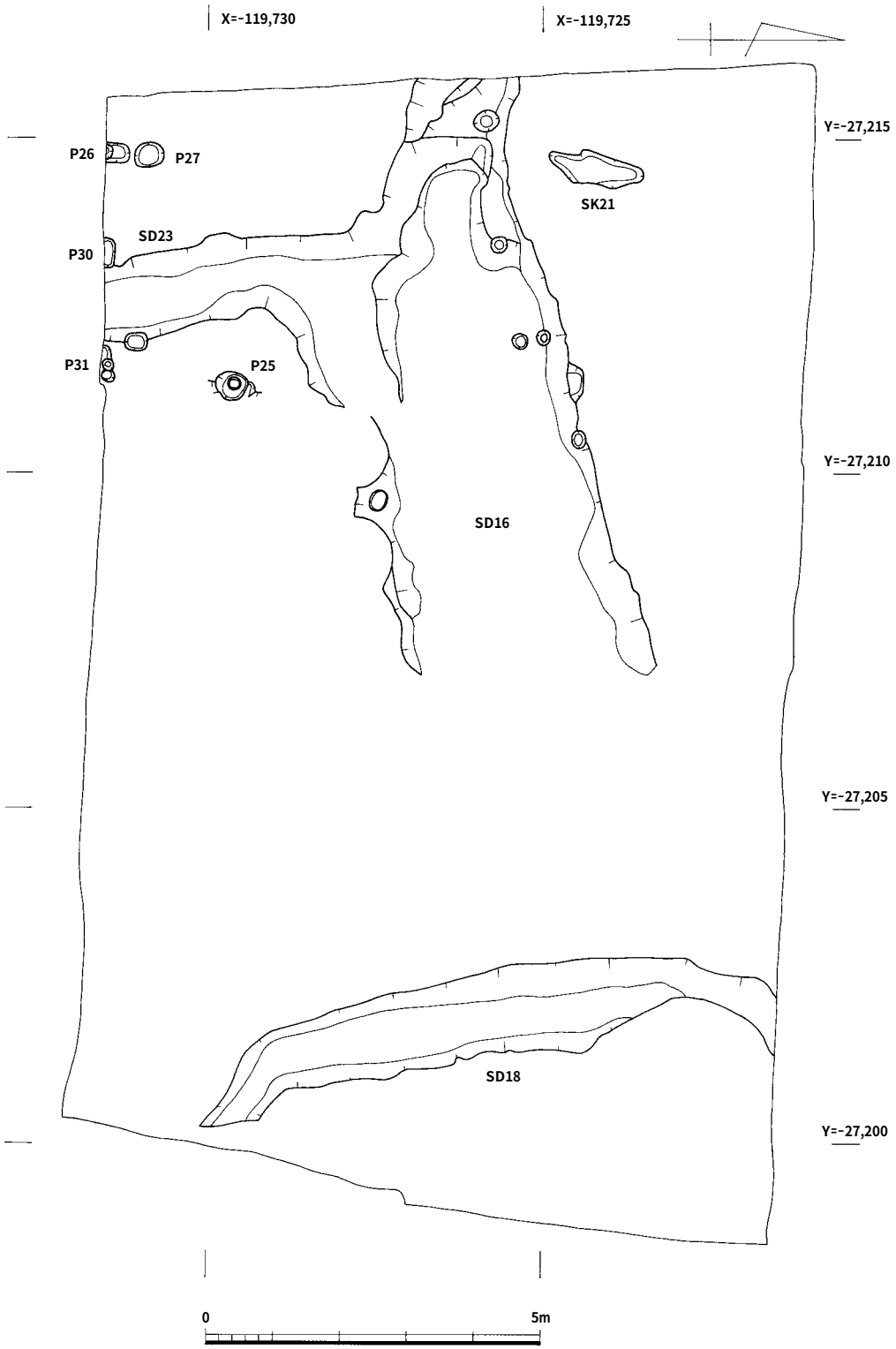
土坑ＳＫ15　土坑ＳＫ09のすぐ北側で検出した不整形な土坑で、東西13m、南北18m、深さ約0.3mの規模がある。

柱列ＳＡ19（第44図）　調査区の北西部において確認した東西方向に延びる柱列で、３間分を検出したが、さらに西側に続く可能性が考えられる。柱掘形は0.3m前後の楕円形で、径0.15mの柱痕跡が残っていたが、柱間寸法は東から1.2m、１m、２mと不揃いである。

柱列ＳＡ20（第44図）　柱列ＳＡ19より1.7mほど南で検出した東西方向の柱列で、２間分を確認できた。柱掘形は0.3～0.55m前後の長楕円形で、径0.1mの柱痕跡が残るものがある。柱間寸法はおおむね2.2m前後の等間といえる。



第44図　柱列ＳＡ19・20実測図（1/40）



第45図　検出遺構図－２（1/100）

溝ＳＤ12　調査区の南東部で検出したＬ字状に屈曲する溝である。幅0.8～１m前後、深さは0.1mほどの規模で、茶褐色粘質土が堆積していた。

（４）長岡京期の遺構

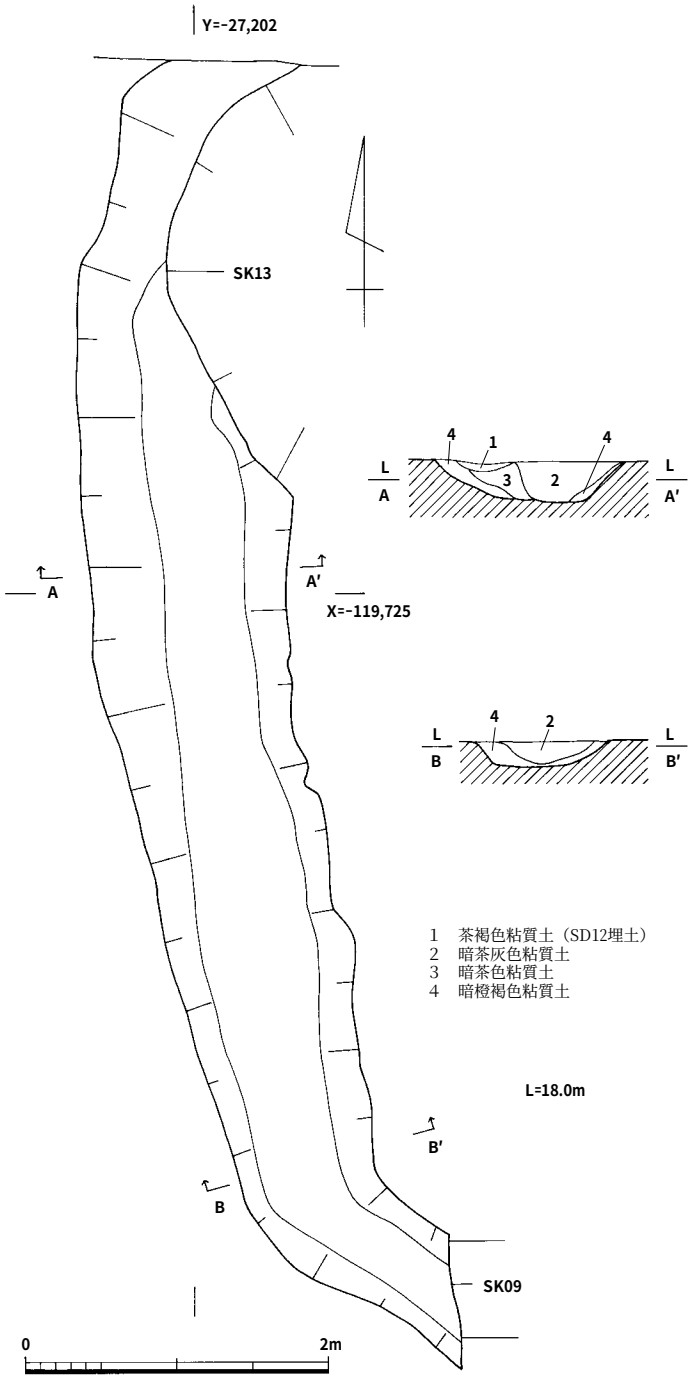
長岡京期の遺構は極めて乏しく、柱穴がわずかに確認できた程度である。また、当該期の遺物が新しい時代の遺構から混在した状態で出土していることから、遺構が破壊されている可能性が考えられる。

柱穴　調査区の南西部において検出したもので、Ｐ26・27・30・31などがある。一辺0.3m前後の隅円方形を呈し、そのうちＰ27からは土師器椀の破片などが少量出土している。

（５）古墳時代の遺構

溝ＳＤ16（第45図）　調査区の西半部で検出した東西方向の溝で、土坑ＳＫ11よりも東側に延びることなく途切れることを確認できた。幅3.5m、深さ0.3mほどの規模があり、西端ではやや北側に屈曲する溝と、南南東に大きく屈曲する溝ＳＤ23に分かれる。須恵器の甕片が散乱した状態で出土した他、弥生土器の破片なども出土している。

周溝ＳＤ18（第46図、図版19）　調査区の東辺部近くで検出した南北方向に延びる素掘り溝で、北部は土坑ＳＫ13に、南部は土坑ＳＫ09によってそれぞれ破壊されていたが、南北両端は東側へ緩やかに曲がる様相を呈していた。幅約1.3m前後の規模で、深さは中央部分が約0.2mと深く、北および南に向かうにしたがって徐々に浅くなっていた。溝の埋土は、暗茶灰色系の粘質土などで、溝の中央部付近からは須恵器の杯身、杯蓋、壺、甕の他、土師器の甕などの遺物がまとまって出土している。そのうち杯身、杯蓋、壺類のいくつかは、完形もしくはそれに近い状態で出土



第46図　周溝ＳＤ18実測図（1/50）

したのに対して、須恵器や土師器の甕は破片となって散乱した状態であった。

ところで、この溝は、調査区東隣の右京第782次調査(注)で確認されている方形周溝墓（方墳）ＳＸ33の西辺を画する周溝であることが判明した。これによって、方形周溝墓（方墳）の東西規模が約10mになることが確定した。

溝ＳＤ23（第45図）　溝ＳＤ16から屈曲して南東の方向に派生する断面Ｕ字形の溝。幅約1.3m、深さ約0.2mほどの規模があり、長岡京期の須恵器や弥生土器などが少量出土している。

３　出土遺物

（１）中世の遺物

土坑ＳＫ08出土遺物（第47図）　この遺構からは、土師器、瓦器、須恵器、陶器、白磁など中世を中心とする遺物の他、弥生土器や須恵器、平瓦など長岡京期の遺物も混在した状態で少量出土している。

土師器の皿には、口径8.6cm、器高1.7cmの１と、やや大きい口径12.4cm、器高2.1cmの２があり、２の内面にはハケメの痕跡がわずかに認められた。

瓦器には、椀、鍋、羽釜、三足羽釜などがある。鍋（４）は、口縁部を水平に屈曲させ、その端部を浅く窪ませている。土師質に焼成されており、口径は32.8cmに復元できる。外面には、煤の付着が認められる。羽釜には口径20.6cmの中型品（５）と、口径23.8cmの大型品（６）がある。５は、内面に横方向のハケメを密に施して調整している。

須恵器には、壺と鉢がある。壺（８）は、丸味をもちながら屈曲する口縁部をもち、端部を折り曲げて丸くおさめている。口径は14.6cmに復元でき、口縁部内面と外面に灰が薄く付着している。９・10は、東播磨系の鉢である。９は口径26.9cmに復元でき、口縁部外面には重ね焼きの痕跡が認められた。内面は若干平滑にされており、使用の痕跡と考えられる。10は口径30.9cmに復元される大型品で、口縁部外面に重ね焼きの痕跡や内面に使用の痕跡と考えられる摩滅が認められた。

白磁の碗（７）は、口縁端部を玉縁状に肥厚させる形態である。口径は18.3cmに復元でき、体部下半は露胎である。釉に貫入は認められない。

11は、口径27.4cmほどに復元できる陶器の擂鉢である。内面の擂り目は８条であるが、擂り目やロクロ目がほとんど摩滅していないことから、使用の痕跡は認められなかった。

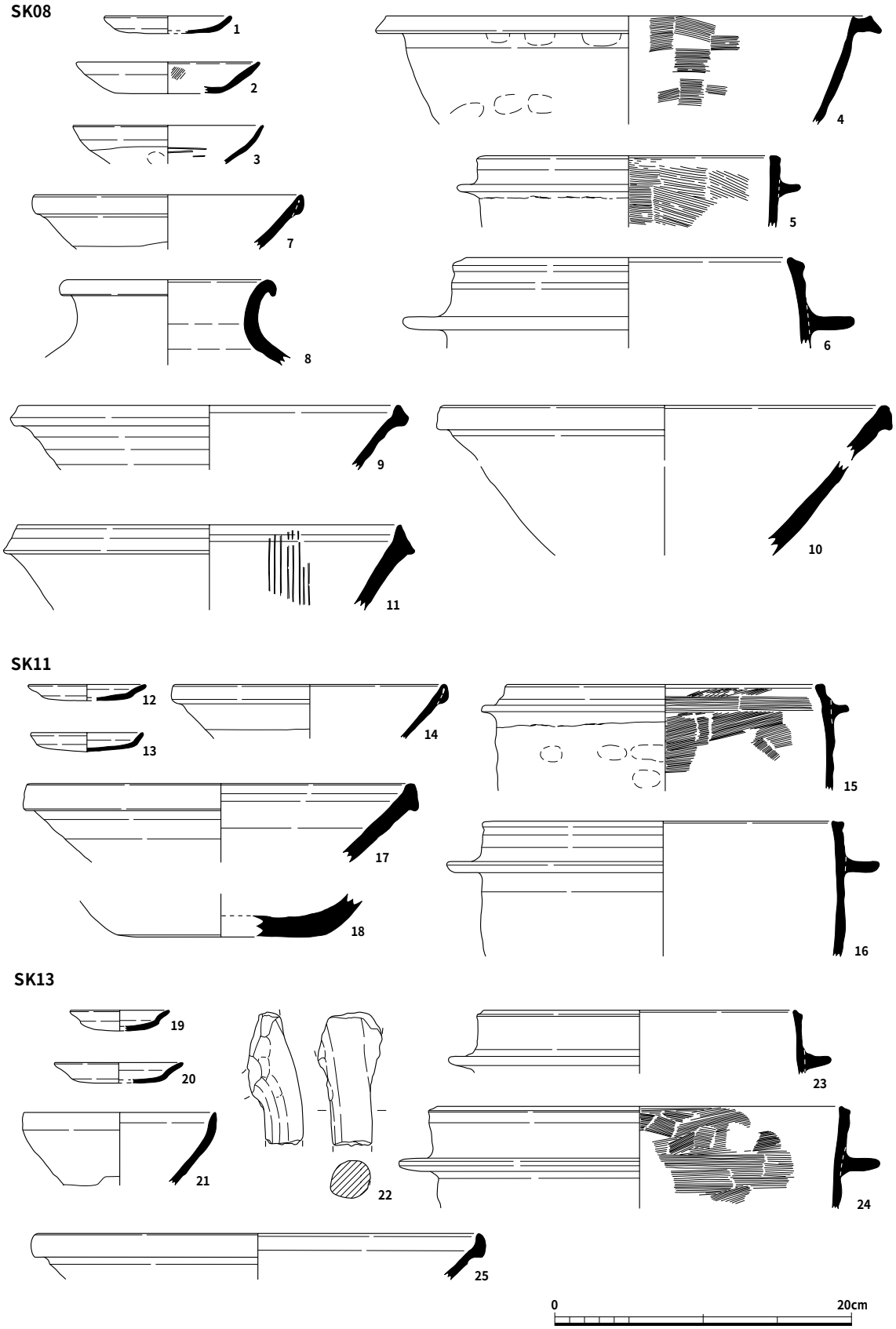
土坑ＳＫ09出土遺物（第48図）　土師器、須恵器、瓦器など中世の遺物が少量出土している。

31は土師器の小皿で、口径8.8cm、器高1.4cmに復元できる。36は瓦器椀の口縁部片で、ミガキによる調整は認められず、口径11.2cmに復元できる。

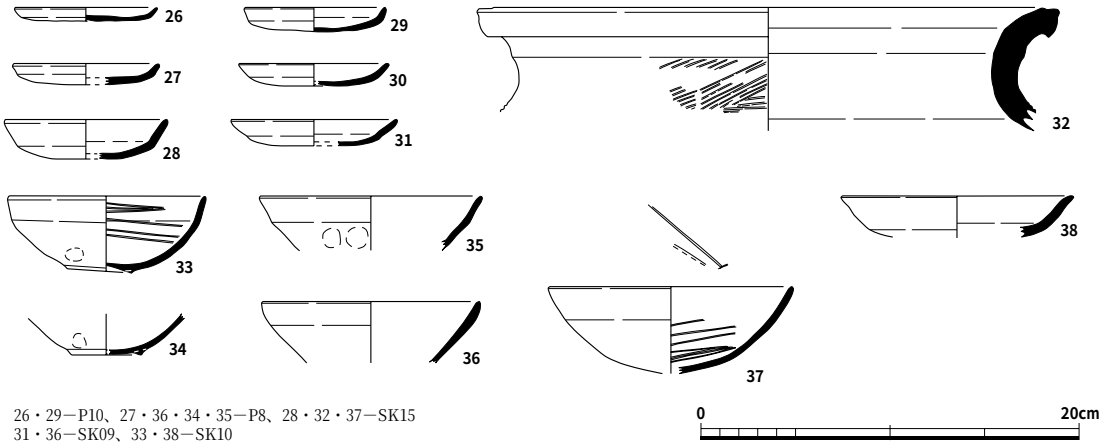
土坑ＳＫ10出土遺物（第48図）　土師器、瓦器、青磁などが少量出土している。

33は瓦器の椀で、底部には断面三角形の低い高台を貼付けている。口径10.5cm、器高4.1cmと法量が小さく、調整も内面に粗いヘラミガキを施すのみである。

青磁の皿（38）は、口径12.3cmに復元でき、釉は淡い灰緑色を呈している。



第47図　土坑ＳＫ08・11・13出土遺物実測図（1/4）



第48図　土坑ＳＫ09・10・15、柱穴Ｐ８・10出土遺物実測図（1/4）

土坑ＳＫ11出土遺物（第47図）　土師器、須恵器、瓦器、白磁、炉壁とみられる破片などが出土している。

12・13は土師器の小皿である。12は口縁部が外反し、底部との境に稜がみられ、口径８cm、器高1.1cmに復元される。13は口縁部が直線的に延び、口径7.6cm、器高1.3cmに復元できる。

白磁の碗（14）は、口縁端部を玉縁状に肥厚させた形態で、体部下半は露胎である。口径18.7cmに復元できる。

15・16は瓦器の羽釜で、15は口径21.8cm、16は口径24.4cmある。16の内面には、ハケメ調整して仕上げる。

17・18は、東播磨系と考えられる須恵器の鉢である。17は口縁部の破片で、内外面のロクロ目が明瞭に残り、口縁端部には重ね焼きの痕跡をとどめている。口径26.6cm前後に復元できた。18は底部の破片で、内面は擂る行為によって平滑にされており、17と同一個体になる可能性が考えられる。

土坑ＳＫ13出土遺物（第47図）　土師器、須恵器、瓦器、陶器など中世を中心とする遺物がまとまって出土している。

土師器の皿（19・20）は、ともに口縁部と底部との境が明瞭で、外反気味の口縁部をもつ。19は口径6.8cm、器高1.4cm、20は口径8.6cm、器高は1.5cmほどに復元される。

21は美濃焼の天目茶椀で、口径13.1cm、器高は4.9cm以上ある。釉色は、口縁部の内外面が暗茶色、体部の内外面が黒色を呈していた。

瓦器には、椀、羽釜、三足羽釜などの器種がある。22は三足羽釜の脚部片、23・24は羽釜の口縁部片である。23は口径21.2cmに復元され、瓦質に焼成されている。24は口径27.2cmに復元され、内面を横方向にハケメ調整して仕上げている。体部の外面には、わずかに煤の付着が認められる。

25は東播磨系の須恵器鉢で、口径30.7cmに復元できる。胎土には、砂粒を多量に含み、淡茶灰色を呈している。

土坑ＳＫ15出土遺物（第48図）　土師器、須恵器、瓦器などの遺物が出土している。

28は土師器の小皿で、口径8.6cm、器高2.1cmに復元される。32は須恵器甕の口縁部片で、頸部外面には斜め方向の平行タタキ痕が残っており、口径は30.8cmに復元される。37は瓦器椀で、見込みに暗文が施されており、口径は13cmに復元される。

柱穴出土遺物（第48図）　柱穴からは、土師器、須恵器、瓦器など中世を中心とする遺物が出土している。

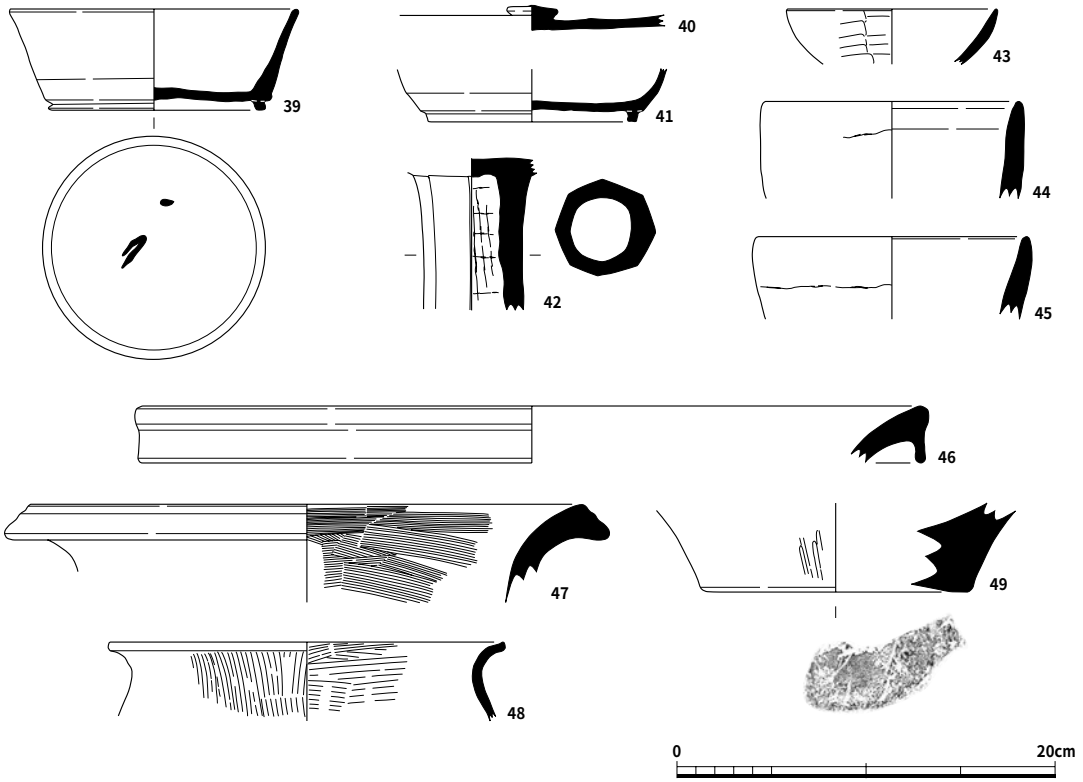
柱穴Ｐ８からは、土師器の小皿や瓦器椀などが出土している。27・30は土師器の小皿で、27は口径7.8cm、器高1.1cm、30は口径８cm、器高1.2cmである。34・35は瓦器の椀である。34の高台は、断面三角形の低いもので、内外面にミガキは認められない。35は口径11.8cmで、内外面の調整は認められない。

26・29はＰ10から出土した土師器の小皿で、26は口径7.6cm、器高0.7cmの扁平なもの、29は口径7.5cm、器高1.3cmに復元できた。

（２）長岡京期の遺物

この時期の遺物は、土師器、須恵器、製塩土器、瓦などがあるが、全体的に出土量が少なく、しかも中世の遺構に混入した状態で出土したものがほとんどであった。このため、大半が破片であって、図示できたものは極めて少なかった（第49図）。

土師器　椀Ａ、高杯、羽釜などの器種がある。43は、柱穴Ｐ27から出土した椀Ａの口縁部片で、口径は11.2cmに復元でき、外面全体をヘラケズリするｃ手法で調整して仕上げている。42は、高杯の脚柱状部片で、全体に摩滅しているが、８角形に面取りされている。粘土紐の巻上げによって成形されたもので、内面には巻上げと絞り目の痕跡を明瞭にとどめている。土坑ＳＫ11から



第49図　長岡京期、弥生時代の遺物実測図（1/4）

出土した。羽釜は図示していないが、胎土に角閃石を含む暗茶褐色を呈した生駒山西麓産の特徴をもつもので、土坑ＳＫ11から出土している。

須恵器　杯Ｂ、杯Ｂ蓋、甕などの器種がある。39・41は、土坑ＳＫ13から出土した杯Ｂで、39は口径15.3cm、器高は4.9cmに復元でき、底部外面には不明瞭ではあるが墨痕跡をとどめている。40は、土坑ＳＫ08から出土した杯Ｂ蓋で、扁平なつまみを天井部の中央に貼付けている。

製塩土器　44・45は、砲弾形の形態になるのではないかと考えられもので、胎土には砂粒を多く含み、口径は14cm前後に復元できる。ともに溝ＳＤ16の上面から出土した。

（３）古墳時代の遺物

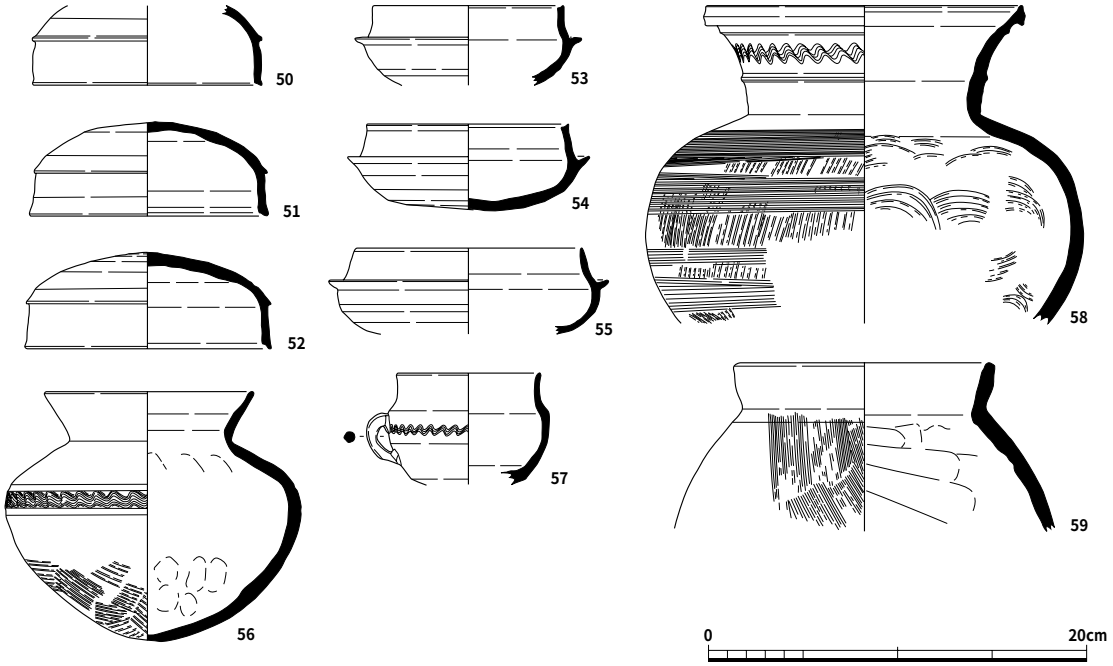
周溝ＳＤ18出土遺物（第50図）　この溝は、先述したように一辺が約10m前後の規模に復元される方形周溝墓（方墳）ＳＸ33の西辺を画する周溝であり、須恵器、土師器など古墳時代の遺物がまとまって出土している。

須恵器には、杯身、杯蓋、壺、把手付き壺、甕などの器種がある。

杯身（53～55）は、立ち上がりの端部が内傾する段をもつもの（53・54）と、丸くおさめるもの（55）がある。いずれも底部外面の回転ヘラケズリは、範囲が比較的狭く、自然釉が付着している。完形に近い状態の54は、口径10.7cm、器高4.2cmあるが、55は口径12.2cmとやや大きい。

杯蓋（50～52）は、口縁部と天井部との境に明瞭な稜があり、口縁端部に内傾する段をもつ形態である。天井部は丸味を帯び、3/4ほどの範囲を時計回りに回転ヘラケズリ調整して仕上げている。口径12～13cm、器高５cm前後に復元される。胎土に砂粒を多く含み、いずれも軟質に焼成されているため、灰白色を呈している。

壺（56）は、口縁部の一部を欠失している以外はほぼ完形の状態で出土したものである。「く」字状に屈曲する口縁部と胴の張った体部をもつ形態で、底部は尖底気味におさめている。体部最



第50図　周溝ＳＤ18出土遺物実測図（1/4）

大径付近に浅い凹線を２条巡らし、その間に波状文を施している。外面には平行タタキの痕跡をとどめるが、内面はナデ調整して仕上げている。口径11cm、器高13cm、体部最大径は15.7cmある。

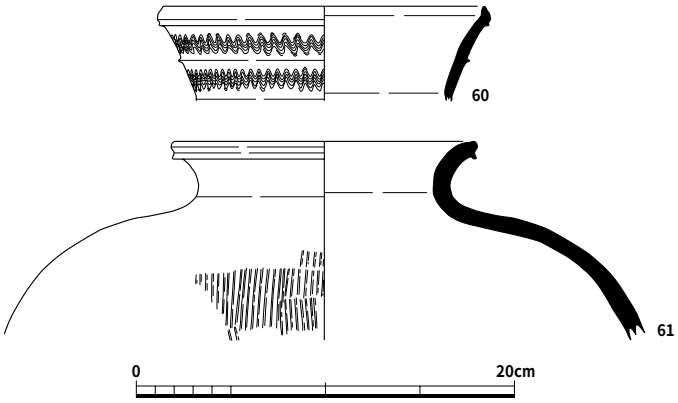
把手付き壺（57）は、コップ状の形態で、内湾気味に立ち上がる口縁部の端部を丸くおさめている。体部最大径付近に波状文を巡らし、断面円形の把手を貼付けている。口径は7.7cmほどに復元できる。

甕（58）は、口頸部の中位と上位に突帯をそれぞれ巡らし、その間に波状文を施している。体部外面は、平行タタキを施した後にカキメを加えて調整し、内面は同心円状の当て具痕の一部をナデ調整を加えて消し去っている。外面全体に灰が被り、口縁部内面には重ね焼きの痕跡をとどめている。口径16.8cm、体部最大径23.2cm、器高16.8cm以上に復元できる。これ以外にも、別個体と考えられる甕の破片が出土しているが、接合して復元することはできなかった。

土師器の甕（59）は、破片が散乱した状態で出土したものである。垂直気味に立ち上がる口頸部をもち、口縁端部は外傾する面をもつ。体部外面に縦方向のハケメを丁寧に施し、内面は稜線がでるほど強く指ナデして調整している。口径13.8cmに復元できる。

上記の須恵器は、形態や法量の特徴などから、陶邑窯のＴＫ47型式に比定することができる。同様の須恵器類は、他辺の周溝内からも一括で出土しており、小規模な墳墓とはいえ、供献された須恵器の数量は多いといえよう。

溝ＳＤ16出土遺物（第51図）　須恵器の甕や弥生土器などが出土している。



第51図　溝ＳＤ16出土遺物実測図（1/4）

60は須恵器甕の口縁部片で、復元口径は約17.6cmである。口頸部の中央に突帯を１条巡らし、その上下に波状文をそれぞれ施している。61も須恵器の甕で、破片となって散乱した状態で出土したものである。体部の破片が多数あるが、接合することはできなかった。口縁部が丸味を帯ながら屈曲する形態で、端部を垂下させておさめている。肩部は大きく張り出しており、外面に施された平行タタキをナデ調整して仕上げている。また、内面の同心円当て具痕も、丁寧にケズリないしはナデ調整して消し去っている。色調は、表面が暗青灰色を呈しているが、断面は赤紫色であった。口径は16.2cmに復元される。

（３）弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、すべて新しい時代の遺構から出土したもので、量的にはさほど多くなく、長岡京期のものと同量程度であった（第49図）。

46は、土坑ＳＫ08から出土した大型の広口壺と考えられる口縁部の破片である。口縁端部を垂

下させて拡張しており、口径は41.6cmに復元できる。胎土に砂粒を多く含んでいるが、比較的硬質に焼成されている。

47は広口壺の口縁部片で、外面はナデ調整、内面は横方向にハケメを施して仕上げている。硬質に焼成されており、口径は29.2cmに復元できる。溝ＳＤ17から出土した。

48は倒釣鐘形態と推察される甕の口縁部片で、復元口径は20.8cmである。外面は縦方向、内面を横方向にハケメを施して調整するが、ハケメの単位は粗い。溝ＳＤ17から出土した。

49は厚手に作られた壺の底部片で、体部外面には縦方向のヘラミガキ痕跡がわずかに認められた。底部外面には、木の葉の痕跡をとどめており、底径は14.4cmに復元される。土坑ＳＫ08から出土した。

４　まとめ

以上みてきたように、今回の調査では、撹乱を受けた箇所が多かったとはいえ、近世、中世、長岡京期、古墳時代に大別される遺構、遺物を検出した他、少量ではあるが弥生時代の遺物も確認することができ、大きな成果を得ることができた。以下に、簡単ではあるが、中世と古墳時代の概要をまとめておきたい。

まず、中世の遺構には、土坑、溝、柱列、柱穴などがあり、この時代の遺構密度がもっとも高い状況であったことは、集落の中心に近いことを示唆している可能性が考えられる。そのうち土坑ＳＫ08・11・13は、それぞれ形態や規模は異なっていたものの、多数の礫が埋設されている点や出土遺物の時期などは共通している。特に、土坑ＳＫ11から炉壁とみられる遺物が出土していることは、この地に何がしかの工房が存在していた可能性を示唆するものとして重視すべきであろう。ただし、東に隣接する右京第782次調査で、長岡京期に属する製鉄関連の遺構・遺物が確認されており、それらの混入品である可能性も考えられるだけに、即断することはできない。今後、周辺でのさらなる調査をまって検討を加えることにしたい。

次に、古墳時代の遺構については、方形周溝墓（方墳）の周溝を検出し、そこから須恵器がまとまって出土したことである。この墳墓は、すでに右京第782次調査において確認されており、今回の成果によってその形態と規模が明確になった。また、周溝から出土した須恵器は、杯身、杯蓋、高杯、壺、把手付き壺、甕など各種の器種があり、埋葬施設の副葬品なのか、あるいは墳丘上に供献されたものかなどの詳細は不明だが、出土量が多い点は注目すべきであろう。こうした小規模墳は、通常群集する場合が多いのだが、周辺で数多くの調査が行われているにもかかわらず、古墳時代の遺構はもとより、遺物もほとんど確認されていない現状では単独で存在していたと考えざるを得ない。

注）岩﨑　誠「長岡京跡右京第782次調査概要」『長岡京市センター報告書』第39集　2004年

付表－２　報告書抄録

ふ　り　が　な	ながおかきょうしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ　だい44しゅう
書　　名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第44集
副　書　名	
シ リ ー ズ 名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第４４集
編　著　者　名	中島皆夫、山本輝雄、原　秀樹
編　集　機　関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所　　在　　地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０－１

所　収　遺　跡　名	所　在　地	コ　ー　ド		北　　緯	東　　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡（右京第820次） 神足遺跡 近世 勝 龍寺城 跡	長岡京市神足 二丁目地内	26209	107 83 84－2	34 °55 ′11 ″	135 °42 ′10 ″	20040610 ～ 20040630	64㎡	長岡京駅前再開発事業
長岡京跡（右京第826次） 神足遺跡 近世 勝 龍寺城 跡	長岡京市神足 一丁目地内	26209	107 83 84－2	34 °55 ′13 ″	135 °42 ′6 ″	20040712 ～ 20040730	167㎡	長岡京駅前再開発事業
長岡京跡（右京第834次） 神足遺跡 近世 勝 龍寺城 跡	長岡京市神足 二丁目地内	26209	107 83 84－2	34 °55 ′11 ″	135 °42 ′10 ″	20040916 ～ 20041102	43㎡	長岡京駅前再開発事業
長岡京跡（右京第835次） 神足遺跡 近世 勝 龍寺城 跡	長岡京市神足 二丁目地内	26209	107 83 84－2	34 °55 ′12 ″	135 °42 ′10 ″	20040916 ～ 20041102	73㎡	長岡京駅前再開発事業
長岡京跡（右京第836次） 神足遺跡 近世 勝 龍寺城 跡	長岡京市神足 一丁目地内	26209	107 83 84－2	34 °55 ′13 ″	135 °42 ′9 ″	20040921 ～ 20041105	174㎡	長岡京駅前再開発事業

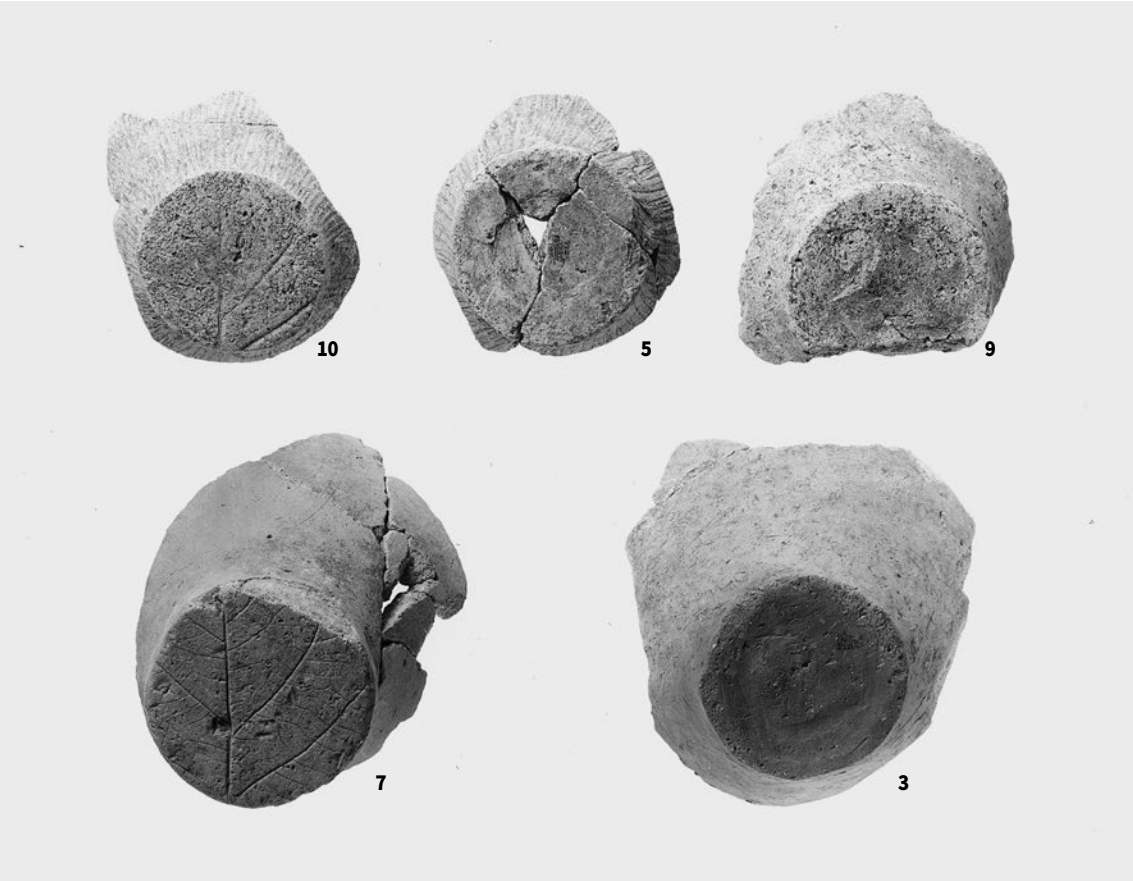
所　収　遺　跡　名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第820次）	都城跡	長岡京期			
神足遺跡	集落跡	弥生時代	溝、土坑、土壙墓	弥生土器	
近世勝龍寺城跡	城館跡	江戸時代	柵列、溝		
長岡京跡（右京第826次）	都城跡	長岡京期			
神足遺跡	集落跡	鎌倉時代	柱穴	瓦器	
近世勝龍寺城跡	城館跡	江戸時代	井戸	土師器、陶磁器、瓦	
長岡京跡（右京第834次）	都城跡	長岡京期		須恵器	
神足遺跡	集落跡	弥生時代	溝	弥生土器	
近世勝龍寺城跡	城館跡	江戸時代	柱穴	土師器、陶磁器	
長岡京跡（右京第835次）	都城跡	長岡京期	溝、柵列、柱穴	土師器、須恵器、製塩土器	
神足遺跡	集落跡	弥生時代	溝、土壙墓、土器棺墓	弥生土器、石器	
近世勝龍寺城跡	城館跡	江戸時代	溝、土坑、柱穴		
長岡京跡（右京第836次）	都城跡	長岡京期		土師器、須恵器、製塩土器	
神足遺跡	集落跡	古墳時代	方形集溝墓（方墳）	須恵器、土師器	
		鎌倉時代	土坑、溝、柱列	土師器、須恵器、瓦器、白磁、青磁	
近世勝龍寺城跡	城館跡	江戸時代			

図　　版

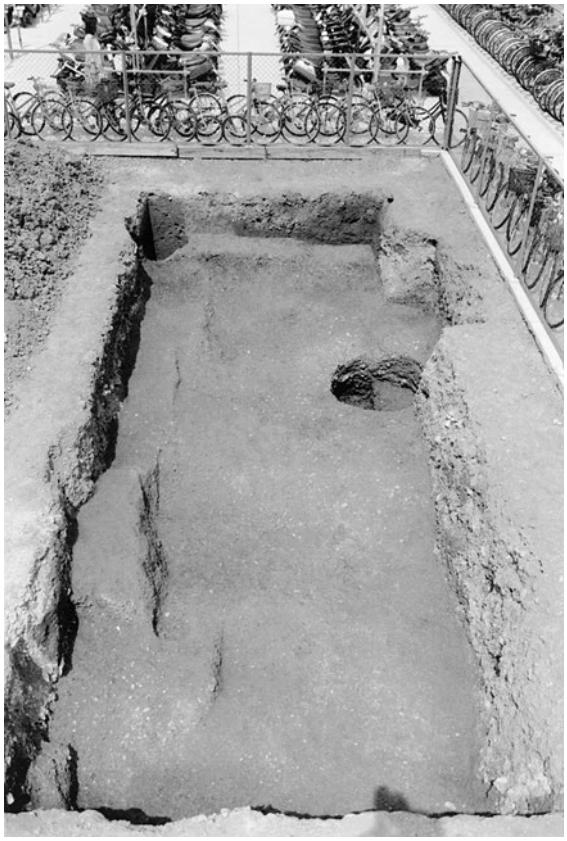
（1）上層遺構全景（南から）

（2）下層遺構全景（南から）

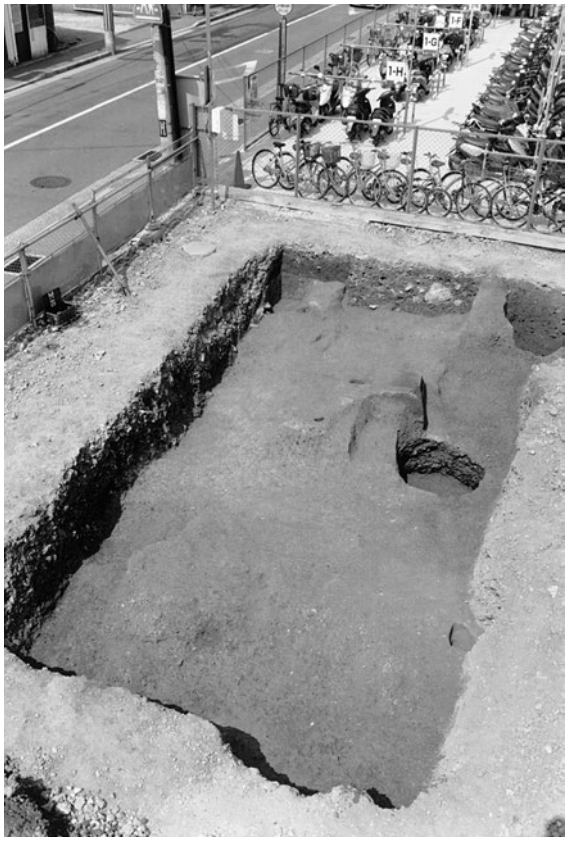
長岡京跡右京第820次調査



出土遺物



（1）１トレンチ北半部全景（東から）



（2）１トレンチ南半部全景（北東から）

（3）１トレンチ井戸ＳＥ07全景（南東から）

（4）１トレンチ井戸ＳＥ02全景（東から）

長岡京跡右京第826次調査

（1）２トレンチ北半部全景（東から）

（2）２トレンチ南半部全景（北東から）

（3）２トレンチ井戸ＳＥ04全景（北東から）

（1）３トレンチ全景（南西から）

（2）３トレンチ掘立柱建物ＳＢ10（西から）

（3）３トレンチ柱穴Ｐ７（南から）

長岡京跡右京第826次調査

5

9

12

21

23

24

26

28

出土遺物

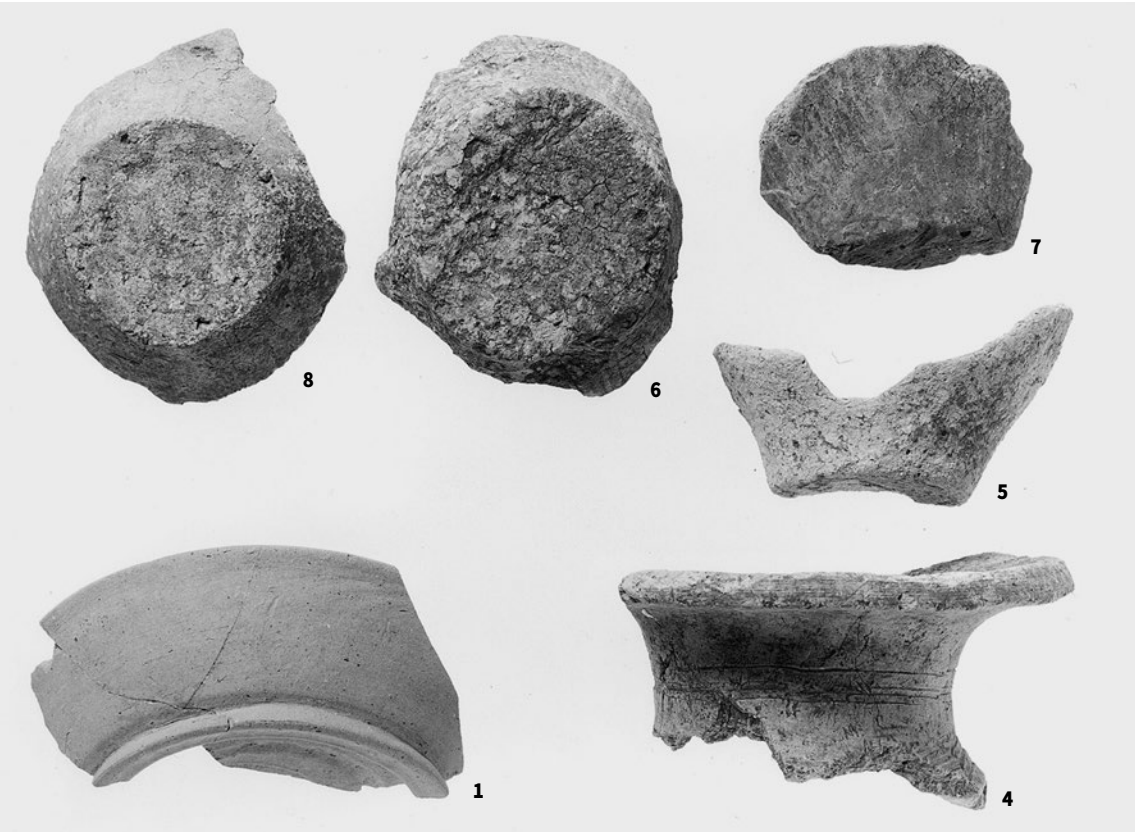
（１）中近世以降全景（西から）

（２）完掘状況全景（西から）

長岡京跡右京第834次調査

（１）完掘状況全景（北から）

（２）溝ＳＤ03（南西から）



（３）出土遺物

（１）西調査区長岡京期以降全景（北から）

（２）西調査区完掘状況全景（北から）

長岡京跡右京第835次調査

（１）東調査区古墳時代～長岡京期全景（北から）

（２）東調査区完掘状況全景（北から）

（１）西調査区弥生時代全景（南西から）

（２）土壙墓ＳＸ07埋土の状況（南西から）

（３）土壙墓ＳＸ07完掘状況（南西から）

長岡京跡右京第835次調査

（１）東調査区弥生時代全景（南から）

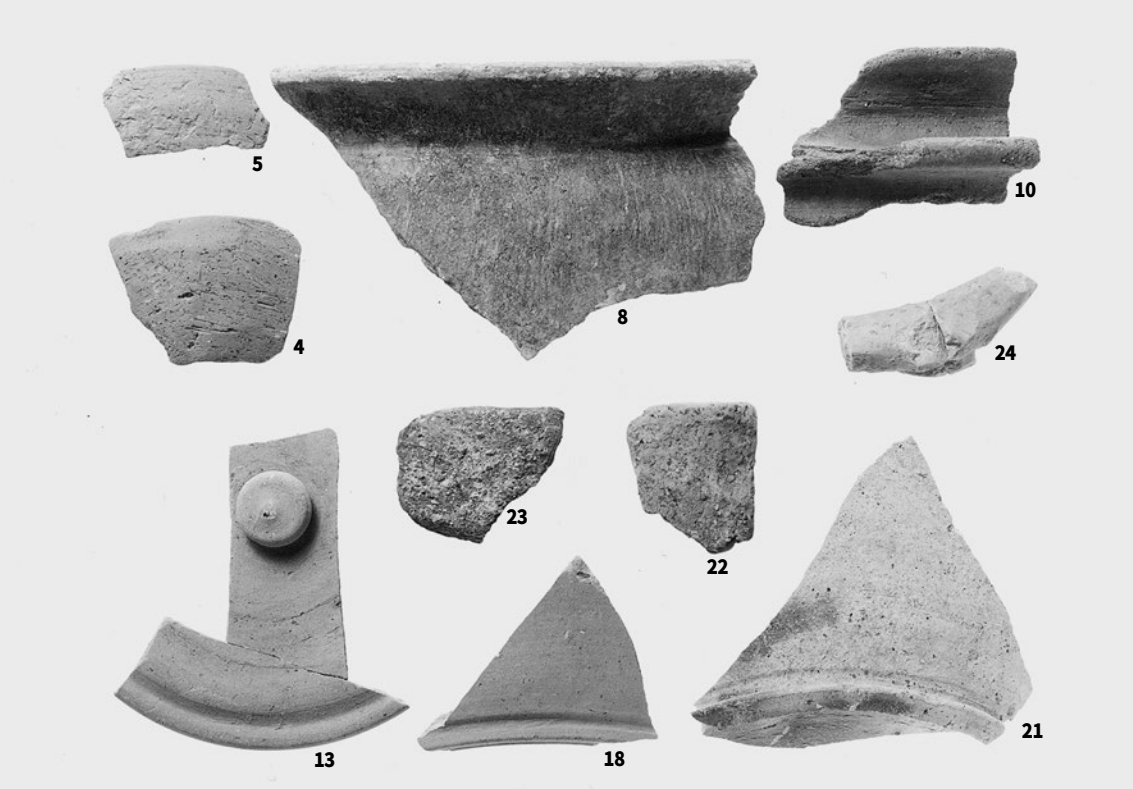
（２）土器棺墓ＳＸ15出土状況（南西から）

（３）土器棺墓ＳＸ15出土状況（上から）

（１）溝ＳＤ06・08土層堆積状況（南西から）

（２）溝ＳＤ06土層堆積状況（北西から）

長岡京跡右京第835次調査



出土遺物

（１）調査区全景（西から）

（２）調査区南西部全景（北東から）

（１）土坑ＳＫ08礫出土状況（北から）

（２）土坑ＳＫ08完掘状況（北から）

（１）土坑ＳＫ11礫出土状況（北から）

（２）土坑ＳＫ11完掘状況（南から）

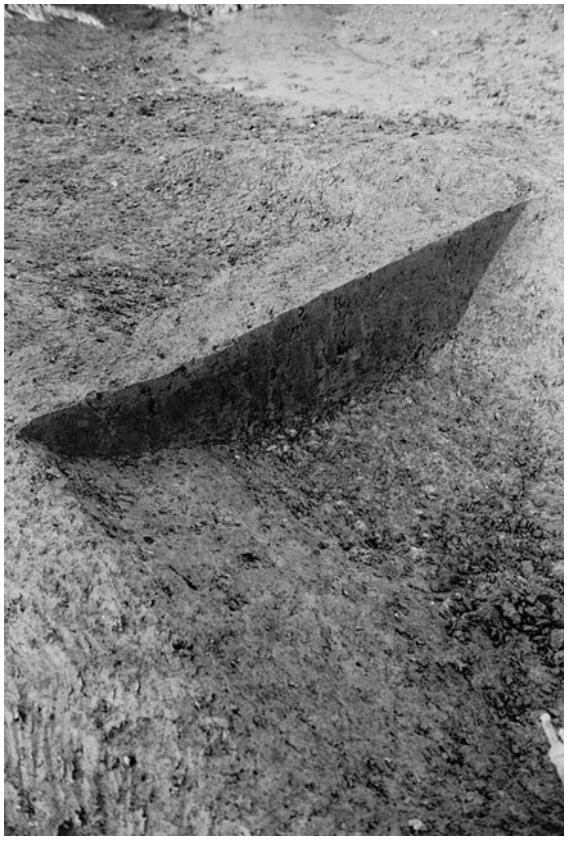
長岡京跡右京第836次調査

（１）土坑ＳＫ13全景（南西から）

（２）土坑ＳＫ09全景（北西から）

（３）土坑ＳＫ10瓦器椀出土状況（西から）

（１）周溝ＳＤ18全景（北西から）



（２）周溝ＳＤ18土層堆積状況（南西から）

（３）周溝ＳＤ18須恵器出土状況（北西から）

長岡京跡右京第836次調査

51

54

52

56

39

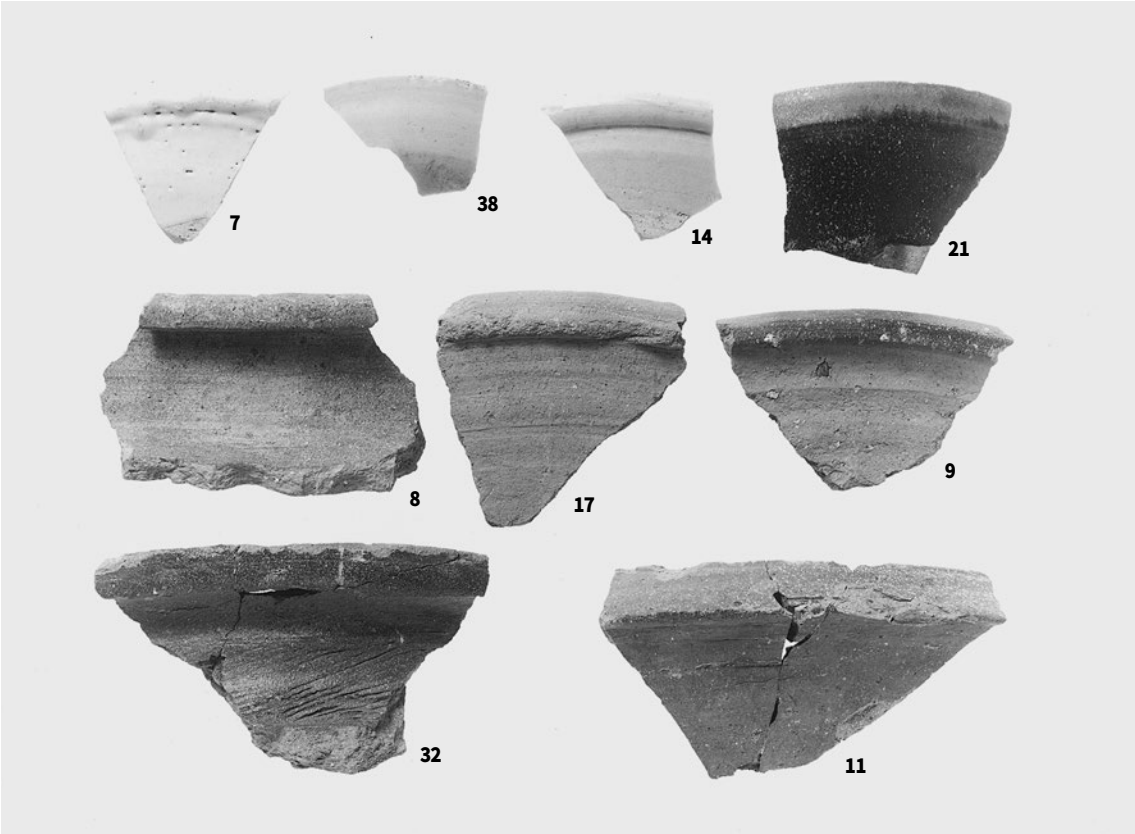
29

30

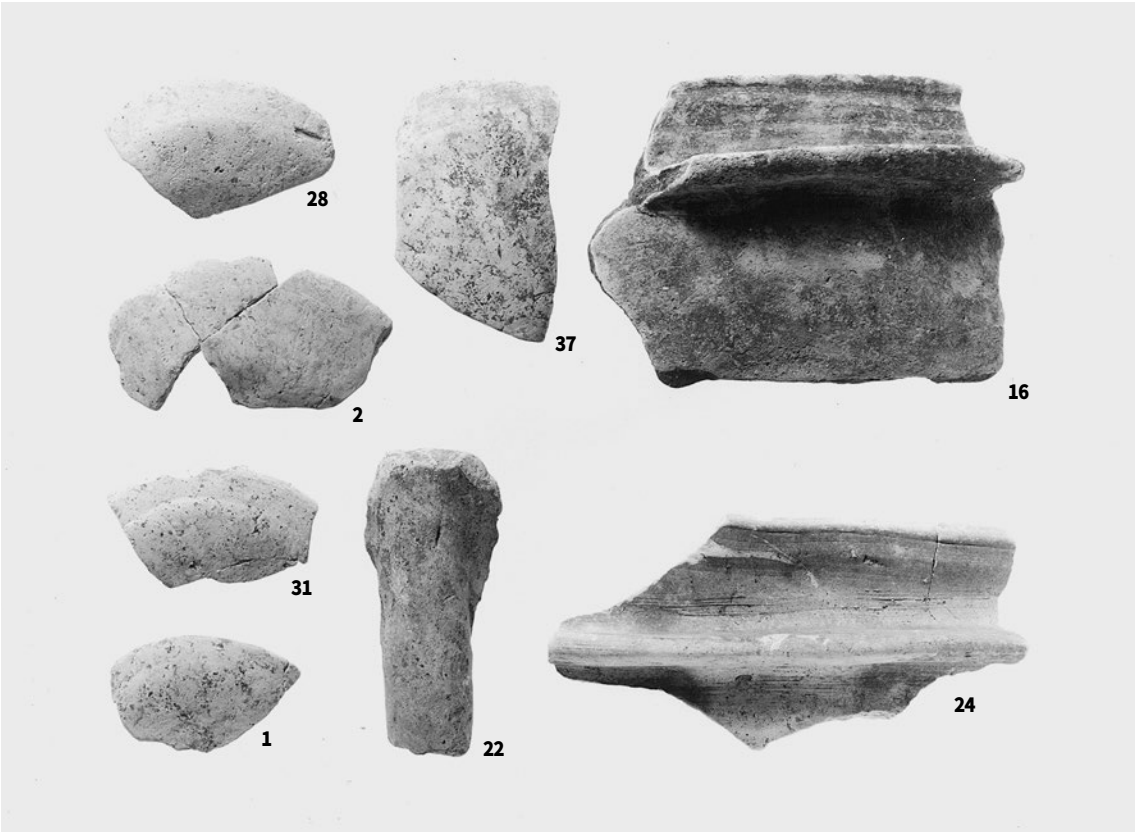
33

13

出土遺物－１



（1）出土遺物－2



（2）出土遺物－3

長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第４４集

平成17(2005)年３月28日　印刷
平成17(2005)年３月30日　発行

編集発行　財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622
FAX　075－951－0427

印　　刷　株式会社　図書印刷　同朋舎
〒600－8805　京都市下京区中堂寺鍵田町２
電話　075－361－9121(代)
FAX　075－371－0666